

歯学部ニュース

平成18年度第1号（通算109号）



特集 講義「食べる」:教育褒賞受賞
新学士課程教育を支える新学務情報システム

新潟大学歯学部広報委員会

<http://www.dent.niigata-u.ac.jp/news.html>

目 次

特 集「講義「食べる」：教育褒賞受賞」	1
山田 好秋	
野田 忠・花田 晃治・鈴木 敦士・永野 芙美	
特 集「新学士課程教育を支える新学務情報システム」	11
大島 勇人・木竜 徹・五島 譲司・永井 雅人	
平成18年度歯学部歯学科入学者名簿	22
平成18年度歯学部口腔生命福祉学科入学者名簿	22
平成18年度歯学部歯学科第3年次編入学者名簿	22
平成18年度歯学部口腔生命福祉学科第3年次編入学者名簿	22
平成18年度大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻入学者名簿	23
入学を祝して	24
学部長	
副病院長	
入学者のことば	26
歯学科生から 上村 藍太郎・平原三貴子	
口腔生命福祉学科生から 小林 玲・山本有加利	
大学院生から 池野 良・目黒真依子	
第99回 歯科医師国家試験合格者名簿	30
平成18年度臨床研修歯科医名簿	31
教授に就任して	32
鈴木 昭	
島田名誉教授叙勲おめでとうございます	34
新・診療部紹介	36
荒井 良明・星名 秀行・魚島 勝美	
看護部だより	43
中俣 文子	
野原廣美先生を偲ぶ	45
柳村 光寛・山下 智・山崎 和久	
素顔拝見	48
黒川 孝一・奥田 一博・飯田 明彦・児玉 泰光	
留学報告	53
両角 俊哉	
学会レポート	59
坂上 直子・奥井 隆文・魚島 勝美・八巻 正樹	
同窓会だより	66
新入生合宿研修を終えて	72
歯学部各種委員会	74
教職員異動	77
編集後記	81
表紙説明	

野田先生、“教育褒賞”受賞 おめでとうございます

歯学部長 山田好秋

平成17年度“教育褒賞”が、医歯学系の野田忠教授と人文社会・教育科学系の山田剛志助教授に授与されました。野田先生の受賞は11年前に歯学を広義にとらえ企画され、全学の学生を対象に開講した「食べる」をここまで充実・発展させてきた業績が高く評価された結果です。学際的オムニバス形式で、受講生も多いため、学生の高い満足度を11年間維持する努力は並大抵ではなかったと想像されます。人気の秘密は、野田先生のコーディネータとしてのたゆまぬ授業改善によるものですが、まず「食べる」のコンセプトを明確にして、生まれてから死ぬまでの人生に“食人生”の概念を取り入れておられます。そして到達目標を、おっぱいを飲むところから、寝たきりの食まで、どうしたら楽しく健康に食べて行けるかを学生自身が回答を出せることに設定しています。簡単そうに見えますが、「食べる」ことのメカニズム、口腔の健康、新潟の米や酒、拒食症など、そのテーマは広範です。当然、歯学部の講師陣ではカバーできません。農学部・教育人間科学部・保健管理センターなど他部局の先生方や、「食の陣」代表や北方博物館館長など学外の講師をお招きしてのまさ

に学際的な科目に仕上がっています。このような多くの講師陣をそろえることができたのは、野田先生の人脈・人柄に負うところが多いと思います。また、オムニバス形式の授業は多様な講師による魅力ある授業が可能ではあるものの、バラバラな講義の寄せ集めになればコーディネータの努力も水の泡と化します。野田先生は講義ごとに提出を義務付けたレポートを講師にフィードバックすることで、内容の統一を図り、講義終了後に学生との親睦会を身銭を切って開催することで、学生の生の声を聞くなど多くの努力を重ねてこられました。

旭町キャンパスに暮らしていると、社会との接点が少なく、歯科学を学際的に考えることが希薄になりがちです。また、口腔機能が日常生活にどのような役割を演じているのかを歯科治療を通して広報する、そんな単純なスタイルは現在では通用しません。野田先生の11年間に渡る努力は、おそらくゆっくりではあっても確実に社会に「歯科学」の重要性を広めてくれたものと信じております。野田先生、ありがとうございました。



教養教育科目『食べる』

口腔生命科学系列・教授 野田 忠
(小児歯科学)

開講の経緯

『食べる』という妙な名前の科目は、平成7年度から開講されました。平成6年秋の総合科目ワーキンググループで、当時の吉村尚久大学教育開発センター長から、教養教育の総合科目の増加を要請され、歯学部が全学に提供する科目として開設しました。

歯科はむし歯や歯周病の予防や治療、義歯の装着のように一般的には思われていますが、本来は生れてから死ぬまでの口腔の健康維持、簡単に言えば、一生涯健康に楽しく食べることのお手合いがその役目です。

『食べる』ではそのコンセプトをベースに、おっぱいを飲むところから始まる、長い長い食人生、いかに楽しく健康に食べて行くか、学生自身が「食べる」ことについて考えることを目標に設定しました。

平成7年度の第1回の講義では、受講希望者が講義室から階段にまであふれ、急遽定員を50名から100名に変更しましたが、受講者の決定は大変でした。その後抽選方法などを工夫し、スムーズに行くようになりましたが、5倍から10倍の受講希望者の抽選では、講義室周囲の研究室の先生方にはご迷惑をおかけしました。学生のクチコミで人気科目となり平成11年には新潟日報夕刊にも取り上げられました。

受講希望者が多いので、平成12年からは前後期の開講としましたが、それぞれに6-7倍となり、受講希望の改善にはなりませんでした。

平成17年度からは、教養教育の改変に伴い、前期だけの開講となりました。

平成7年度～平成11年度



- 前期『食べる—そのメカニズム—』
平成12年～平成16年度
- 前期『食べる—そのメカニズム—』
後期『食べる—楽しく食べる—』
平成17年度～
- 前期 新潟発『食べる』

授業内容

初年度は歯学部のみ構成でしたが、『食べる』というのは歯科だけでなく、いろいろな分野にわたって考えることができるので、幅広く組み立ててゆくこととし、次年度には教育人間科学部の小谷スミ子教授とエチゴビールの上原誠一郎氏に加わっていただき、しだいにさまざまな分野の講師を加えて、総合的な科目へと発展しました。

今までに提供した講義は表1に示すように、食べることのメカニズムから口腔の健康、食べる機能の老化、新潟の食文化までさまざまです。

12年の間、基本的なテーマは変わっていませんが、

学外からの講師による講義は、食の楽しみや新潟の食について学生たちにインパクトを与えて、この科目の特色となりました。

食材を使った講義も、この科目の特色で、「プディングの楽しみ方」では実際にプディングを食べさせ、歯で噛むのではなく舌で押しつぶすように食べているのを実感させて、食材の違いによる咀嚼や嚥下の違いを確認させています。

原価1万円以上する「のどぐろ」を、本職が焼いたものを持ち込んで、新潟の食のすごさを実感させてくれた講師もいました。食材を使った講義は学生に好評でしたが、食材費は講師のポケットマネーなので、100人の学生を毎回満足させるわけにはゆかなかったのが残念でした。

全学の文系・理系・医歯学系の全ての学部の学生が受講しました。それぞれの学部の学生にはそれぞれの傾向があり、文系と理系では違い、同じ理系でも工学部と農学部では異なります。各学部学科により、知識のベースが違うことによる理解度の差があり、興味のポイントも違い、理論の展開も異なりますから、バラバラなベースの学生に教えるには、使う用語はもちろん、どのように興味を持たせるかなど、いろいろな苦労がありました。

受講後のアンケートで「興味があった・面白かった授業」と「期待はずれ・面白くなかった授業」をあげさせ、その理由を問うています。「ビールには枝豆」がダントツで支持を集めました。期待外れにあげている学生もいて、多様な学生への対応の難しさがあります。

今年のアンケートでは、抽選に漏れて受講許可

がでていないのに、こっそりと毎回出席したという学生がいて、毎回楽しみにしていたという感想を貰いました。

多人数のオムニバスの授業形態は、多様な講師による魅力ある授業になる反面、バラバラな講演の寄せ集めになりやすく、科目の目標があいまいになるとともに、それぞれの講義のつながりが分かりにくくなるので、それぞれの講師の授業の要約をA4で2ページずつまとめてもらい、テキストとして配布しました。また、初回と最終回のアンケートを回覧し、他の講師の授業内容や講義の進行方法などを知ってもらい、講義内容の連携を計りました。

専門の講義と異なり、『食べる』のような科目では、講師の意欲の維持も問題となります。初めは講義することを面白がって毎年新しい展開をしても、何年かするとマンネリ化し、それに伴って学生の反応も鈍くなり、講師が授業の意欲を失ってしまうこともありました。講義のテーマの変更や講師の入れ替えでの対応もありましたが、講師相互や講師と学生とが交流することで、かなり改善されました。

『食べる』の実習

『食べる』というテーマですから、授業で食材を使いましたが、食べることの楽しさを伝えるには実習が必要でした。簡単に言えば実習と称するコンパです。

平成9年度に最初の実習を歯学部でやりましたが、参加した学生は6名でした。五十嵐でやれば集まるかと第1食堂でやりますが、これも期待通





りというわけにはゆきませんでした。考えてみれば当たり前のごとで、学生からみればいつものコンパで、単に講師と話ができるというだけでは魅力がありませんでした。

授業で取り上げた食材、越後もち豚のキムチチゲ鍋やタイのグリーンカレー、留学生の協力を得てのインドネシアや中国の料理など、学生が普段食べないメニューを加えて、魅力あるものにしました。

『食べる』の実習も回を重ねるごとに充実して、平成17年度の実習では試験前にもかかわらず、100名の受講生のうち35名の学生が参加してくれました。今年7月28日に開催した平成18年度の実習では、75名もの学生が五十嵐から旭町の歯学部まで来てくれました。友達を連れてきてもいいとしたので、全部が受講生ではありませんが、100人の受講生のうち少なくとも半分が参加してくれたようです。講師など関係者を入れて100人を超え、途中で食器が足りなくなるなど、バタバタしましたが、多彩なメニューで、大勢が楽しく『食べる』の実習をしました。

公開講座

授業だけでなく、番外編のシンポジウム、公開セミナーも開催し、一般へのアピールも行い、新潟日報にも取り上げられました。

1. 新潟大学教養共通科目

『食べる I—そのメカニズム—』番外編



枝豆シンポジウム

—あなたは薄皮を剥きますか?—

シンポジスト

：花田 晃治（歯科矯正学）

野村 修一（加齢歯科補綴学）

本間 龍夫（新潟食の陣）

平成16年7月23日 歯学部大会議室

2. 新潟大学教養講義『食べる』公開セミナー

子どもの『食べる』—その成育をみつめて—

講師：野田 忠（小児歯科学）

田口 洋（小児歯科診療室）

平成16年11月27日

新潟駅南キャンパス「CLLIC」

新潟大学ブックレット

『食べる』の講義を基に、新潟大学ブックレットを2000年から年1冊ずつ4冊を刊行し、この9月には5冊目が刊行されます。ブックレットも表2に示すように、講義と同様にさまざまな人の協力を得て、幅広い話題を取り上げています。

『食べる』というのは、いろいろな角度から考えることができます。新潟大学の全学教養科目として、また、ブックレットのシリーズとして、歯科の立場からは、食べることのメカニズム、発達、口腔の健康、そして介護を取り上げてきました。教育人間科学部や農学部、保健センターの先生方の協力も得ました。新潟の食文化も、お米やお酒を含めて、幅広く取り上げてきました。しかし、『食べる』というテーマは無限に広がっています。『食べる』という科目も、『食べる』のブックレットも、次なる展開を求め、大きく発展して欲しい

と思います。

『食べる』というのは、赤ちゃんからお年寄りまで、全ての人が好きな行為です。いくつになっ

ても、どんな状態になっても、いつでも、いつまでも、元気に、楽しく、美味しく、うれしい顔をして食べたいものです。



表1 『食べる』講師とテーマ

歯学部教員

野田 忠	小児歯科学	『食べる』の科学、世界の食べ物、おっぱいを飲む 新潟発『食べる』
田口 洋	小児歯科学	『離乳』そして『食べる』、哺乳・離乳そして『食べる』へ 咀嚼の発達
富沢 美恵子	小児歯科学	食べるための口腔の健康
大島 邦子	小児歯科学	口腔の健康と『食べる』、『食べる』ことと口腔の健康
山田 好秋	口腔生理学	食べることと脳の働き、プディングの楽しみ方
真貝 富夫	口腔生理学	味を感じる仕組み、味の不思議、ビールには枝豆、ビールの味 のど越しの味
山村 千絵	口腔生理学	食べることと脳の働き
山村 健介	口腔生理学	咀嚼のしくみ
大島 勇人	口腔解剖学	『食べる』を支える歯と顎
花田 晃治	歯科矯正学	日本人のルーツを求めて
森田 修一	歯科矯正学	歯並びと『食べる』
齋藤 功	歯科矯正学	美しいスマイルで楽しく食べよう
河野 正司	歯科補綴学	咬むことのメカニズム、食べることの老化
小林 博	歯科補綴学	筋の働き
加藤 一誠	歯科補綴学	歯を喪失したら
野村 修一	歯科補綴学	食べることの老化
植田 耕一郎	摂食・嚥下障害学	食べる障害と高齢者社会
大瀧 祥子	摂食・嚥下障害学	食べる障害
福島 伸一	小児歯科学	プディングの楽しみ方
梶井 友佳	小児歯科学	ビールには枝豆

新潟大学他分野教員

小谷 スミ子	教育人間科学部	食物学からみた「食べる」、野菜を食べよう、食べ物のおいしさ
鈴木 敦士	農学部	夢の加工食品ー超高压加工食品ー、新潟発「夢の加工食品」
城 斗志夫	農学部	新潟の米
橘 玲子	保健管理センター	食の病
七里 佳代	保健管理センター	食の病

学外講師

上原 誠一郎	エチゴビール	地域文化としての地ビール
伊藤 文吉	北方文化博物館	世界からみた新潟の食文化
落 希一郎	カーブ・ドッチ	作り手からみたワイン
滝沢 規朗	奥三面遺跡調査室	縄文人の食生活
山田 和子	ケルン	コーヒーと新潟
本間 龍夫	新潟食の陣	新潟の食文化
小野 義之	ラ・カーヴ	楽しく飲む・飲ませる、酒の楽しみ
堀川 裕司	キューピット	食のブランド化～流通からみた新潟の食～
斉藤 俊太郎	麒麟山酒造	新潟の誇り～新潟淡麗の秘密～
茂木 佐平治	キッコーマン	醤油と食文化
留 学 生	ブラジルほか	世界の食べ物

表2 ブックレット

『食べる』 ブックレット新潟大学5 2002年

1. 食べるの科学	野田 忠 (小児口腔科学)
2. 離乳そして食べる	田口 洋 (小児歯科診療室)
3. 食べることと脳の働き	山村 千絵 (顎顔面機能学)
4. かむことと歯	河野 正司 (摂食機能再建学)
5. 歯と顎の生物史的考察	大島 勇人 (硬組織形態学)
6. 歯並びと食べる	森田 修一 (咬合制御学)
7. 食べることの老化	野村 修一 (加齢・高齢者歯科学)
8. 食べるための口腔の健康	
1) 子ども時代に作られる基礎	富沢 美恵子 (小児口腔科学)
2) 歯を無くさないために	子田 晃一 (う蝕学)
3) 歯ぐきを守る工夫	吉江 弘正 (歯周診断・再建学)
4) 歯を無くしたら	加藤 一誠 (総合診療部)
9. 食べることの障害	植田 耕一郎 (摂食・嚥下障害学)
10. 食の病 (やまい)	七里 佳代 (保健管理センター)
11. 縄文人の食生活	滝沢 規朗 (新潟県教育庁文化行政課)
12. 日本人のルーツを求めて	花田 晃治 (咬合制御学)
13. おいしく食べる	小谷 スミ子 (教育人間科学部生活環境学)
14. 味の不思議	真貝 富夫 (感覚情報科学)
15. プディングの味わい方	山田 好秋 (顎顔面機能学)
16. のど越しの味	真貝 富夫 (感覚情報科学)
17. 夢の加工食品ー超高压加工食品ー	鈴木 敦士 (農学部応用生物化学)
18. 新潟の食文化	本間 龍夫 (新潟食の陣)
19. ウイスキーの楽しみ方	小野 義之 (ラ・カーヴ)
20. 作り手からみたワイン	落 希一郎 (カーブドッチ)
21. コーヒーと新潟	山田 和子 (ケルン)
22. 古い家のない町は、想い出のない人間と同じである	伊藤 文吉 (北方文化博物館)

続『食べる』 ブックレット新潟大学22 2003年

1. なぜ、おいしく食べられるの	山田 好秋 (顎顔面機能学)
2. 「食べる」運動の制御の仕組み ー複雑で精緻な脳の働きー	山村 健介 (顎顔面機能学)
【コラム】「食べる」と「食う」	花田 晃治 (咬合制御学)
3. おいしく上手に食べるために働く ー口のまわりのセンサーの役割ー	山村 千絵 (顎顔面機能学)
4. 味わうことの最終段階 ー飲み込むことの大切さー	井上 誠 (顎顔面機能学)
【コラム】醤油と食文化 西・東	茂木 佐平治 (キッコーマン)
5. 食べるの基礎作り『離乳』	田口 洋 (小児歯科診療室)
6. 味を感じる舞台裏	梶井 友佳 (小児口腔科学)
【コラム】グローバルに地産地消	山田 一介 (新潟青陵女子短期大学)
7. 食べ物による飲み込み方の違いを測る ー食べ物の性状と嚥下ー	林 豊彦 (工学部福祉生体工学)
8. 咀嚼・嚥下障害者用食品の開発	渡辺 紀之 (亀田製菓)
【コラム】「カレー」という「食」	本間 龍夫 (新潟食の陣)
9. おいしく食べて、健康寿命を延ばそう	野村 修一 (加齢・高齢者歯科学)
【コラム】「食べる・食べる」	野田 忠 (小児口腔科学)

『食べる』 成育編 ブックレット新潟大学31 2004年

1. 「おっぱい」から「食べる」へ、そして長い「食」人生	野田 忠 (小児口腔科学)
2. 健やかな口で育まれる「食べる」	田口 洋 (小児歯科診療室)
3. 「食べる」の発達と支援	鮎島 桂子 (静岡県西部浜松医療センター)
4. 「おっぱい」から「食べる」まで一咀嚼の発達—	小林 博昭 (小児口腔科学)
5. 赤ちゃんも味がわかる 一味覚の発達—	梶井 友佳 (小児口腔科学)
6. 飲み込む機能の発達 —嚥下の発達—	福島 伸一 (小児口腔科学)
7. 幼児期は『食べる』の発達期	松山 順子 (小児口腔科学)
8. 子どもの「食」	小谷 スミ子 (教育人間科学部生活環境学)
9. 「食べる」の発達障害と支援	鮎島 弘之 (昭和大学歯学部口腔衛生学)
10. 子どもの摂食障害	七里 佳代 (保健管理センター)
11. 小児の肥満	菊池 透・内山 聖 (医学部小児科学)
12. 子どもの「食べる」	野田 忠 (小児口腔科学)

新潟発『食べる』 ブックレット新潟大学41 2005年

1. 新潟発『食べる』	山田 好秋 (口腔生理学)
2. 新潟発の食	鈴木 敦士 (農学部応用生物化学)
3. 新潟の食の楽しみ	本間 龍夫 (新潟食の陣)
4. 『食べる』の仕組み 【コラム】お弁当	田口 洋 (小児歯科診療室)
5. いつ、どこで、誰と、何を、どんな風に食べる？ —あなたの3×365×80回の「食べる」—	川合 里子 (新潟市立興野保育園)
6. 食材のブランド化—流通からみた新潟の食— 【コラム】新潟の食あれこれ	大島 邦子 (小児歯科診療室)
7. 美しいスマイルで楽しく食べよう	堀川 裕司 (キューピット)
8. 老化と『食べる』 【コラム】「衣食住」から「医食住」へ	増山 由美子 (BSN 新潟放送)
9. 30回かめますか？	斉藤 功 (歯科矯正学)
10. 新潟の米 【コラム】枝豆とビール	野村 修一 (加齢歯科補綴学)
11. 新潟の誇り—新潟端麗の秘密— 【コラム】今晚は何の肴がいいかしら	花田 晃治 (明倫短期大学)
12. 『食べる』のネタは尽きない	野田 忠 (小児歯科学)
	城 斗志夫 (農学部応用生物化学)
	真貝 富夫 (口腔生理学)
	斉藤 俊太郎 (麒麟山酒造)
	倉田 真砂美 (花りん)
	野田 忠 (小児歯科学)

『食べる』 介護編 ブックレット新潟大学44 2006年

1. はじめに—『食べる』の介護—	山田 好秋 (口腔生理学)
2. 高齢者介護における『食べる』ことの意味 【コラム】片側ばかりでかむことは、やめましょう	大平 信子 (特別養護老人ホーム八色園)
3. 介護予防新時代 —注目される「食べる」と口腔ケア—	河野 正司 (新潟大学)
4. 介護者における口腔ケアの実際	大内 章嗣 (口腔生命福祉学科福祉学)
5. 要介護者の『食べる』を支える地域連携システム	隅田 好美 (口腔生命福祉学科福祉援助学)
6. 摂食・嚥下機能とその障害	野村 修一 (加齢歯科補綴学)
7. ドライマウス—唾液の重要性—	井上 誠 (摂食嚥下機能回復部)
8. 嚥下障害に対する臨床的アプローチ	伊藤 加代子 (加齢歯科診療室)
9. 『食べる』機能の発達障害児(者)の介護	井上 誠 (摂食嚥下機能回復部)
10. 摂食嚥下障害の介護の実際—現場で思うこと—	大瀧 祥子 (摂食嚥下機能回復部)
11. 魅力的な介護食でQOL (Quality of Life)の向上を 【コラム】ゴゼさんを支えたもの「食」について	船山 さおり (加齢歯科診療室)
12. いつでも、いつまでも、元気に、美味しく食べたい	新井 映子 (静岡大学教育学部家政教育学)
	小林 瑠美子 (料理研究家)
	野田 忠 (小児歯科学)

講義『食べる』雑感

明倫短期大学 花 田 晃 治

『食べる』の講義に参加し、『食べる』に関係している、いろんな分野の人々を知った。

さらに、広く地球の上を考えてみると、まだまだ他の分野にもいろんな人々がいます、ということも改めて感じた。そして、その圧倒的多数は、食べる物に関する分野にいるように思う。このことは、『食べる』を聴講してくれた学生さんの学部が多岐にわたることからもわかる。

一方、「開高 健が喰った!」「魯山人味道」「村松友視：夢見そば」のように、食べる方に位置している人々も多い。

こうした、いわばソフト面にいる人々に対して、「歯冠の欠損部を restoration 修復することによって、口腔機能を restore 回復させ、restaurant において、おいしく、楽しく食べることができるようになる、というハード側の代表が、歯学部学生・教員と歯科医師である (restoration, restore, restaurant は同じ語源だそうだ)。ここに属する人々は、現在のところ、少数派のように見えるが、実は今後増えてきそうな感じが、参加していただいた講師の方々からもわかる。

ヒトは、食べる物を作る人と歯を作る人（口腔を働かす人）と食べる人の輪の中で毎日を過ごしている。要は、この三つが多く満たされれば楽しく、どれか少しでも不足すれば楽しくない。

ということは、「『食べる』を考えること」は、新潟大学という総合大学の役割の一つであるともいえる。学生さんは、『食べる』について、講義を受け、考え、世の中に出てゆく。いろんな分野で『食べる』ことに広くかかわってゆくであろう。そして教員は、講義をさらに充実させるために、『食べる』について研究してゆく。

『食べる』の講義に参加して

農学部 鈴木 敦 士

教養教育関連の委員会などで同席するうちに、野田先生から『食べる』の講義を1コマ担当して欲しいという要請を受けたのがきっかけで、2000年度から、この講義に参加することになった。私が講義に参加した時にはすでに、『食べる』は、歯学部の先生方の、食物を飲みこむ仕組みなどの基礎的な話しの合間に、食文化の話、コーヒーの話、ワインやウイスキーの話など、学生諸君の興味を引きそうな話題がちりばめられ、教養科目としての人気講義の一つとなっていた。

私は『夢の加工食品——超高压加工食品』と題して、熱に代わる食品加工法としての超高压加工法を取り上げ、講義中に世界最初の高圧加工食品のジャムを味わってもらった。新潟県は超高压加工食品の分野では我が国のリーダー的立場にあり、国際的に見ても先端を行っている。昨年からの講義科目名が〈新潟発『食べる』〉に変わったため、よりタイトルに相応しい内容となった。レポートを見る限り、超高压加工に対する学生の関心と理解を深めることが出来たのではないかと思っている。

野田先生がこの講義により平成17年度 Best Teacher Award を受賞されたことはとても喜ばしいことであった。先生の講義・実習に対する情熱、人脈の広さ、『食べる』関連のブックレットを4冊も編集発行なさった行動力等々、ただただ驚嘆すべきことばかりである。

この講義に参加させていただいたこと、一冊のブックレットの共同編集者に加えていただいたことなどに感謝し、感想と致します。

『食べる』の講義を受講して

農学部
農業生産科学科1年 永野 芙美

今回、この講義を受けようと思ったきっかけは、広報誌に載っていたのを読んだことでもあります。理由として県外出身者なので、新潟県の食べるに関することを学んでみたいと思ったからです。また、私は農学部なのですが、この講義は歯学部や農学部、教育人間科学部といった大学の先生だけでなく、キューピットや麒麟山酒造といった企業の方の話も聞くこともできるのでそこに惹かれ、この講義を受けようと思いました。

実際に講義を受けて、自分がまったく知らなかったことを知ることができて、受けてよかったと思います。人気がある理由もよくわかりました。

受講した講義はどれも面白く興味をひかれまし

たが、特にその中で印象に残っているのは、キューピットの堀川社長の講義と農学部の鈴木先生の講義です。キューピットの方の講義は、新潟県の食材に関する講義でした。その中で新潟の食材として紹介されたものは、私はどれも初めて聞くものばかりでとても新鮮でした。農学部の鈴木先生の講義では、超高压を利用した食品加工についてでした。講義の中で、6000気圧で作ったジャムや圧力で殻が割れずに中身が凝固する卵についてなど、加圧処理の食品について様々な話をしてくれました。実際に6000気圧で作ったジャムを食べさせていただきましたが、普通の加熱処理のジャムよりも格段においしかったです。

今回で、『食べる』を野田先生が主宰するのは終わってしまいますが、今回の講義を聴講できたことはとても自分のためになり、いろいろと考えることができました。





特集にあたって

全学教育機構 学務情報部門 協力教員 大島 勇 人
(医歯学系)

昨年4月に新潟大学に全学教育機構が設置されました。これまでの「学部教育」から「学士課程教育」への実質化を進めると共に、教育資源をさらに有効に活用することを目的に、それまであった全学共通科目と専門科目の科目区分を撤廃し、実験や演習など一部の科目だけを除いた全授業科目が、原則として全学生に開かれた「全学科目」とし、新たな学士課程教育システムの構築を始めるところを目指しております。この改革は五十嵐キャンパスだけの改革ではなく、私たち旭町キャンパスにも関わる改革として認識する必要があります。

一方、歯学部においては平成12年度から新教育課程を実施しております。すなわち、問題発見解決型学習を教育課程編成の核とし、導入教育として全学的に行っている大学学習法で習得した思考過程と技能を基盤とした歯学専門教育課程を編成しております。そしてこの度、歯学部が提案した「学生主体の三位一体新歯学教育課程～社会に貢献する包括的歯科医師の育成を目指して～」が平成18年度「特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)」に採択されました。今後は、歯学部が推進してきた教育改革を全学教育機構が取り組んでいる学士課程教育システムの改革にもフィードバックし、また歯学部としても全学の教育資源を有効に活用することも考えていく必要があると思います。

さて、学士課程教育システムの改革を実効化するためには、アクションプランの作成と共に教育インフラの整備も必要になります。本年8月には新学士課程教育を支える全学教育支援システム(新学務情報システム)が稼働されました。歯学

部の教員にとってはあまり馴染みがないかも知れませんが、五十嵐における「いわゆるGコード科目」(以前の全学共通科目)を担当している教員はこれまでも学務情報システムを利用してきただけです。この学務情報システムが副専攻制度や分野・水準表示法等の本学が取り組む新しい学士課程教育を実施するように新たなシステムとして生まれ変わりました。また、五十嵐キャンパスと旭町キャンパスの地理的な問題を解決するためには、既存のLANを利用して五十嵐キャンパスと旭町キャンパス間でリアルタイムの双方向授業を可能にする新授業システムの導入が決まっております。

本特集では、「新学士課程教育を支える新学務情報システム」について、全学教育機構学務情報部門の先生方にご寄稿頂き、8月稼働の新学務情報システムを歯学部教職員、学生に広く周知し有効利用の一助とすると共に、全学教育機構ならびに学務情報部門の活動を歯学部で紹介することを趣旨としております。まず、最初に部門長の木竜 徹先生(自然科学系)から「全学教育支援システムの構想について」紹介して頂き、具体的な新学務情報システムの中身については副部門長の五島 譲司先生(専任教員)より説明して頂きます。また、歯学部の教員のほとんどは旧学務情報システムを使っておりませんが、本システムに長い間関わって来ましたが協力教員の永井雅人先生(人文社会・教育科学系)より「学務情報システムに関わってきて」についてご寄稿頂きました。これを機に多くの教員の皆様、学生諸君が新学務情報システムを有効利用して頂くことを切に願っております。



全学教育支援システム（統合型学務情報システム）の構想について

全学教育機構 学務情報部門 部門長 木 竜 徹
(自然科学系)

新潟大学では、平成16年4月の国立大学法人新潟大学の発足にともない、中期計画・中期目標の策定にあたり、教養教育に資する科目と学部専門科目とを区別するのではなく、学士課程全般を通じて履修できる「全学科目」と位置づけ、有機的に学士課程全般を通じて新構想教育システム構築の方針を決定しました。

この新潟大学の新構想学士課程教育を円滑に実施するためには、全学の学士課程教育に関わる5,500を超える講義科目を管理し、学生、教職員が教育全般を任せられる新たなシステムが必要になります。この際、あらたに講義科目を分野（カテゴリ）と水準（内容のレベル）で分類する事で、例えば、学生は自らどのような科目を組み合わせ履修を進めたら良いかを理解しながら、勉学を進める事ができる様になる事が期待されます。つまり、副専攻制度等の新たな教育プログラムの展開や、自らの習熟度に応じたカリキュラムの選択といった展開も可能となります。以上の様な新構想学士課程教育を支えるのが、統合型学務情報システムです。

さて、従来のシステムとの大きな違いは、学務情報、教務情報を中心に教育に関わるすべての情報を統合して取り扱える点にあります。統合型学務情報システムは、おおざっぱには学務関係の巨大なデータベースと、それらを有機的に結びつけ提示する様々なプログラムからなります。そして、いつでも、どこでも、だれでも直感的に使えるWebベースの操作系が特長です。

今回サービスを開始した統合型学務情報システムは、そのままで、これまで以上の機能を持ちますが、今後、さらに新たに機能開発する場合もそれほど難しくなく行える構造になっています。これによって、総合大学の多様性のメリットを最大限に生かして、新たに講義科目を有機的に組み合わせたカリキュラムを作る事も可能になります。

最近はすべての情報が電子化され、流通しているため、最新バージョンの書類を個人個人が管理する事が面倒になってきています。例えば、googleが提供するWebメール(Gmail)では、メールを分類する事はせずにすべて巨大なメールボックスに入れておき、検索機能を駆使して必要なものをその都度探し出すスタイルを提案しています。統合型学務情報システムを使えば、成績の履歴管理、シラバス、教材の保管など、教育に関する情報はすべてこのシステムでまかなう事ができます。個別のPCではセキュリティの問題や面倒な管理が発生してしましますが、統合型学務情報システムに任せていただければ、わずらわしい状況に陥る事態も少なくなります。このメリットは大きなものがあります。一度でも、<https://ness.niigata-u.ac.jp>へアクセスし、講義に使っていただければ、統合型学務情報システムの良さがすぐにおわかり頂けると思います。統合型学務情報システムが、皆様にとって、質の高い教育に専念して頂けるホームグラウンドとして評価していただける様になりますことを願っています。



統合型学務情報システムの構築 ～ 8月稼働開始！～

全学教育機構 学務情報部門 副部門長 五島 讓 司
(専任教員)

1 開発スケジュール

全学教育機構学務情報部門は、新潟大学の新しい学士課程教育の実施を強力に支援する新しい統合型学務情報システム（全学教育支援システム）を構築し、その管理と改善を行うこと、ならびに、本学における教育に関する情報を広く学内外に発

信することを、主たる業務としています。

当部門では、平成17年6月より本システムの開発を開始し、開発業者であるNTT データ九州との打ち合わせや総合運転試験（ランニングテスト）等を経て、平成18年8月より本システムを稼働（サービス開始）する運びとなりました。

全学教育支援システム開発スケジュール

平成17年6月	システム開発開始
平成18年2月～4月	（総合試験）
平成18年5月	ハード導入
平成18年6月～7月	ランニングテスト
平成18年8月1日(火)	納入（システム開発期間14か月確保）
平成18年8月2日(水)	稼働（旧システムと並行稼働）
平成18年12月末	システム全面切り替え実施
平成19年1月	（総合情報処理センターシステム更新）

2 システムの概要

の「新構想教育システムの構築」にて、以下のよう
に述べられています。

全学教育支援システムの概要については、本学

4. 全学教育支援システムの概要（「新構想教育システムの構築 新潟大学」より）

(1) 教育改革におけるシステムを実現するために

新潟大学の「新構想学士課程教育の実施にあたっては、その機能を十分に発揮するために、ITシステムに支援された強力な統合型学務情報システムを新たに構築して、運用する必要がある。

すなわち、現在稼働中の学務情報システムは、毎年大改修を行いながら運用しているのが実態であり、新たなベンチマークプログラムやオーナーズプログラムを取り込む余裕は全くない。

このため、新たな学務情報システムの更新と共に、新たな教育改革プログラムを運用できる強力な統合型学務情報システムを新構築する。

このシステムの稼働により、教育改革推進に必要な情報処理機能の高性能化を実現し、全学教育機構の成員である教職員・学生に総合的情報サービスを提供することができる。その結果、ワンストップサービスをはじめとする教育全般・大学運営を支援する情報の提供が可能となる。

(2) システムが提供すべき機能

① 現学務情報システムが処理中の情報

a) 授業情報：シラバス、等

- b) 学生情報：健康管理、学生生活支援
- c) 教務事務のための情報：成績・学籍管理、等
- ② 新規に提供するシステムの機能・情報
 - a) 当面提供すべき機能：新授業科目管理システム
 - i) ベンチマークプログラムの運用情報：水準・分野のデータベース、科目体系
 - ii) オナーズプログラムの運用機能：修了判定システム、授業時間割システム
 - iii) 新プログラムの学習モデルと履修・授業計画支援：全ての授業科目の水準と分野を考慮した立体的な副専攻履修モデルの構築、科目の相互関係の解析、等
 - iv) e-Learning と連携した自学自習システムの構築：専門教育に必須な科目を履修しない学生や2006年に懸念されている低学力学生への補習学習ソフトの開発、意欲的学生の予習・復習のための学習内容提供、等
 - v) 開かれた大学推進：市民開放授業、公開講座、等 e-learning による遠隔講義を積極的に活用し、新たな大学開放を実現する。
 - b) 将来的に提供すべき機能：大学運営と教育のための経営戦略支援
 - i) 学外連携：国内外大学との連携、単位互換等を e-learning システムにより実施する。
 - ii) 教育戦略立案に資する情報：学生に関する多角的情報（在学生・大学進学予定者の意向調査）、等
- ③ システム／データ連携

大学運営を総合的に支援するため、下記のシステム連携し、統合的に情報を活用する必要がある。

 - a) システム連携
 - i) e-Learning システム：履修管理、在宅学習管理等で連携
 - b) データ連携
 - i) 入試システム（学部、大学院）
 - ii) その他（図書管理システム、人事管理システム、財務会計システム、同窓会システム）

本システムの運用により、「豊かな教養と高い専門知識を修得して時代の課題に的確に対応し、広範に活躍する人材を育成する」という本学の教育目的を実現するために、総合大学である本学が有する豊かな教育資源を活かして、多様な学習経歴や学習ニーズを有する学生に対し、各自の関心や習熟度に沿った主体的・系統的な学習を促し、確固たる基礎学力、幅広い識見や倫理性・社会性を修得させることを目的としています。

3 新規に提供するシステムの機能・情報（例）

(1) ベンチマークプログラムの運用情報

分野・水準表示法（ベンチマークシステム）は、新潟大学五十嵐キャンパスの7学部（医・歯学部を除く）で開講されている全ての科目に、分野と水準を示すコードを统一的に付けるものです。これにより、全学共通科目、専門科目を問わず、また、開設学部・学科等を問わず、新潟大学の全開設科目を分野別一覧表の形で見るができます。科目には水準を示すコードが付してあるので、各科目の難易度を明確に把握し、科目の相互関係や体系性を理解することができます。

全学教育支援システムでは、これら分野・水準

（および名称）のデータベースを有しており、分野・水準をキーにした授業科目やシラバスの検索・閲覧が可能です（複数の科目から構成される科目についても、それぞれの科目の分野・水準を表示することができます）。このため、分野・水準に基づく科目体系等の解析が可能となっています。

(2) オナーズプログラムの運用機能

副専攻制度（オナーズプログラム）は、所属学部学科の学位とは別に、特定分野の学習成果を認証する制度で、当該専門分野以外の特定分野科目を一定単位数以上取得した学生に、その勉学の認証を付与する制度です。

全学教育支援システムでは、副専攻科目についても、他の（従来の）科目と同様の運用が実現します。すなわち、副専攻テーマ（課題別・分野別）およびテーマ毎の科目のデータベースを有しており、履修したい副専攻テーマ（分野別・課題別）を選択したり、履修科目の成績一覧や修了要件の達成状況を表示・確認したり、認定申請書のダウンロードや証明書の発行が可能となっています。

(3) ユーザインターフェース～ポータル^(*)～

全学教育支援システムでは、ユーザインターフェースの向上を目指し、統一的な認証を導入した

ほか、ポータル（システム）ログイン後のホーム画面では、ユーザに関係する情報（のみ）を集約的に見せることで、「見たい情報がすぐに手に入る」ようにしたり、ユーザ毎に画面を好みのレイアウト（画面配置）にカスタマイズしたりできます。

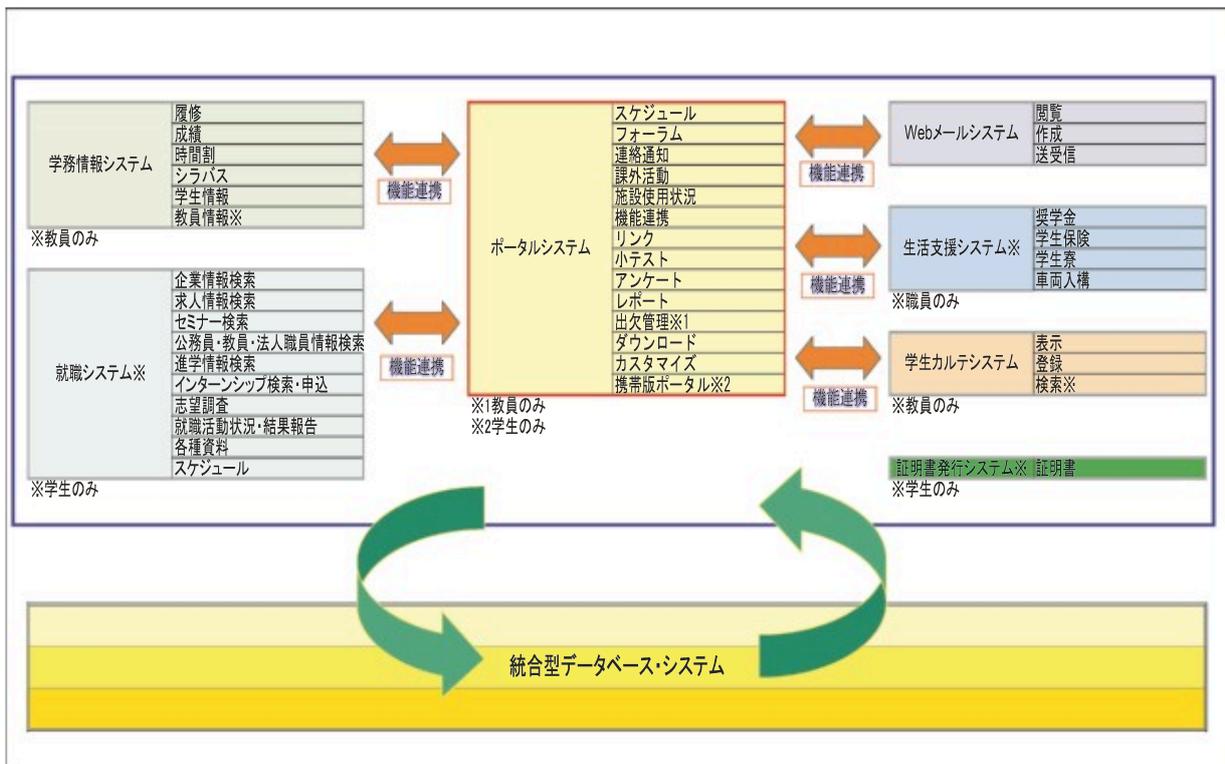
このシステムの稼働により、教育改革の推進に必要な情報処理機能の高性能化を実現し、新潟大学の成員である教職員・学生のみなさまに、ワンストップサービスをはじめとして、教育活動全般を支援する総合的な情報サービスを提供することが可能となります。

（※）ポータル（Portal）とは、システムの表玄関という意味で、システムを利用するときに最初に入る“入口”です。ポータルから一度ログインすることにより、さまざまな機能（連携するシステムも含む）を利用することができます。

（4） 包括的な教育支援態勢の構築～学生カルテ・統合データベース～

従来は、個々のシステムにデータベースが散在し、システム間でのデータベース同士の連携に難がありました。全学教育支援システムでは、各サブシステムが参照するデータベースを集約し、情報を一元的に管理することが可能となります（統合型データベース）。また、全学教育支援システム以外のシステムのデータや、他の機関で登録したデータ、個別に管理しているデータ等も集約して管理でき、さまざまな角度からデータとして取り出し、分析することが可能となるほか、情報の（画面表示）項目の追加もできるようになっています。

このため、複数の（サブ）システムに散在する、一人ひとりのユーザ（学生）に関連する情報を集約して参照することができるようになり（学生カルテ）、従来は、教員が指導学生の情報を断片的にしか参照できなかった不便さが解消され、よりタイムリーな情報が参照可能となります。



全学教育支援システム概念図

新学務情報システム早わかりガイド

全学教育機構 学務情報部門 副部門長 五 島 讓 司
(専任教員)

1 システムの特長～ポータル^(※)～

新潟大学では現在までにさまざまなITシステムが稼働していますが、セキュリティのため、各システムでそれぞれユーザ認証を行っています。この場合、システム毎に違うIDとパスワードが割り当てられることになり、新しいシステムが稼働する度に管理すべきIDとパスワードが増えており、ユーザ個々での管理が難しくなっています。

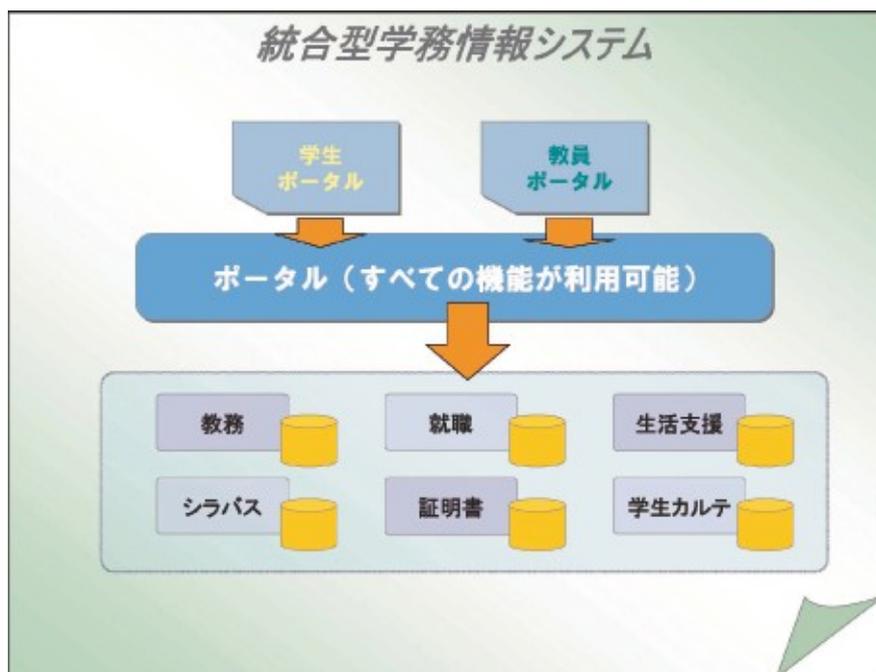
新しい学務情報システムでは、一度認証を済ませれば、利用可能な(すべての)機能を使うことができる仕様となっています。具体的には、ポータルシステムから一度ログインすることで、学務情報システムをはじめとした関係するシステム・

機能を、その都度ログインする必要なく利用することができるようになります(ただし、新学務情報システムと連携せずに、従来そのまま運用されるシステムについては、本システム稼働後も引き続き、別途ログインすることになります)。

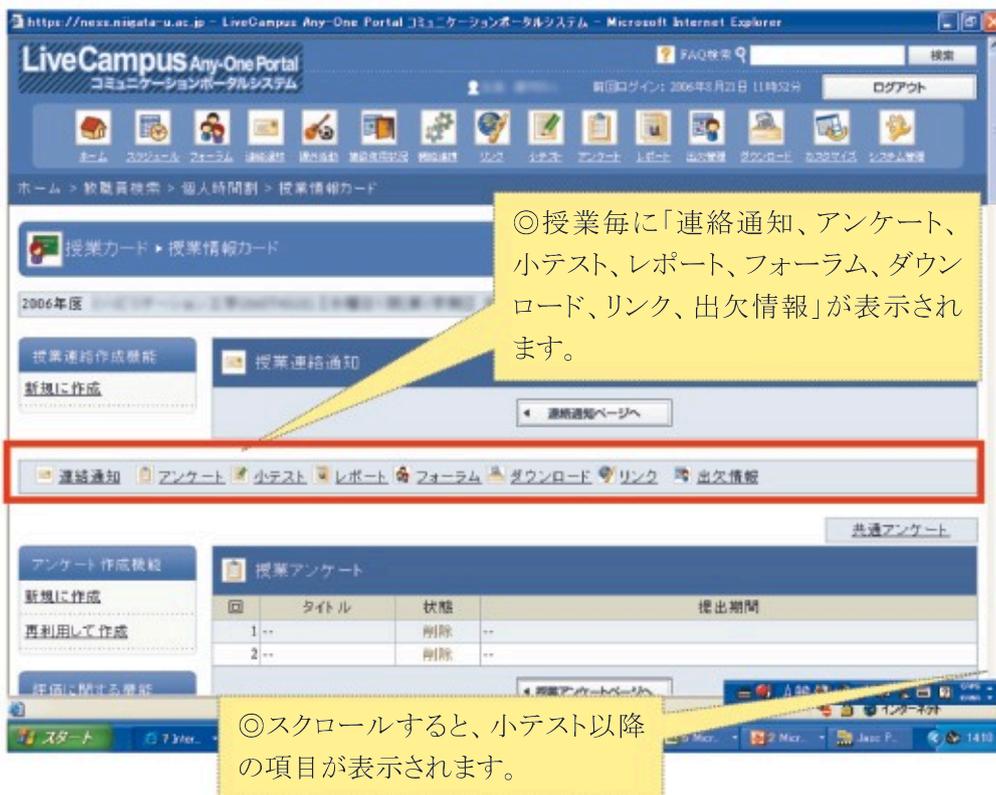
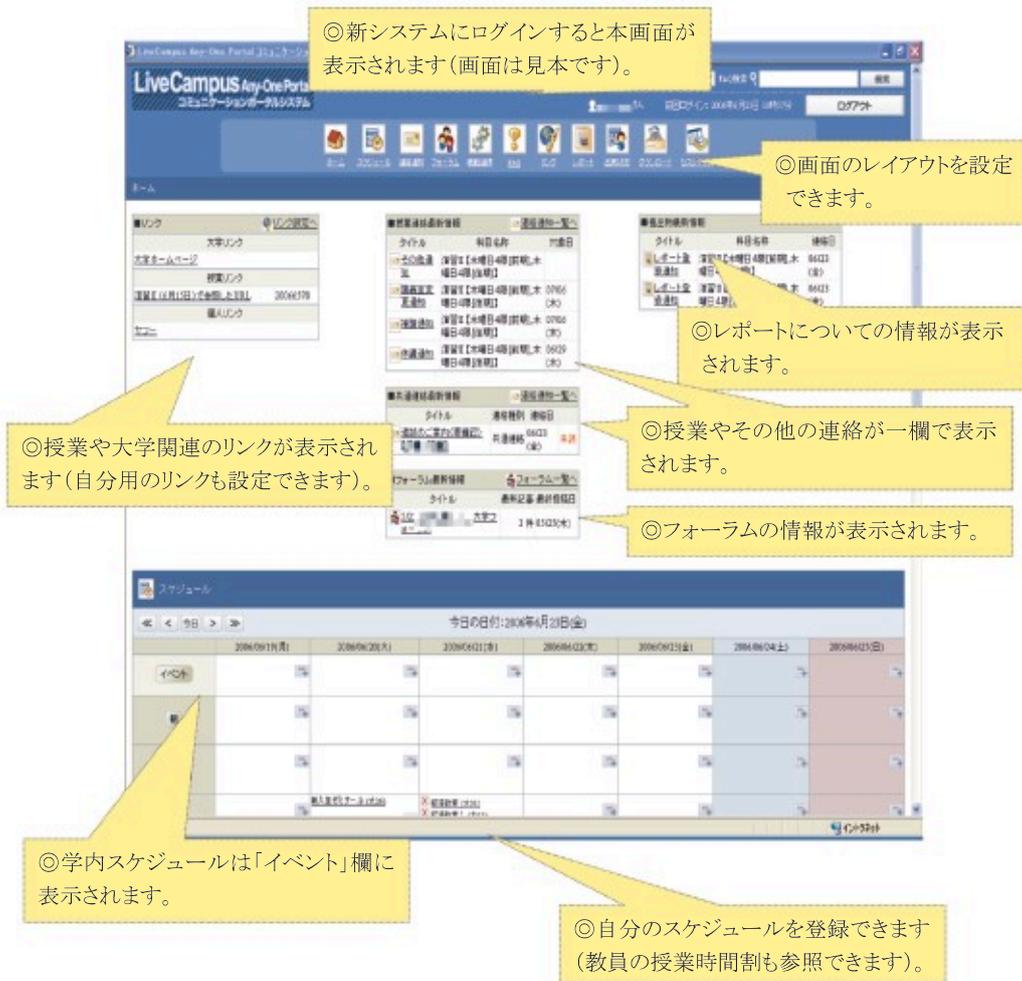
(※) ポータル (Portal) については前ページを参照。

ポータル (システム) ログイン後のホーム画面では、ユーザが履修 (担当) している授業関係のスケジュールや連絡通知等を表示し、ユーザに関係する情報 (のみ) を集約的に見せることで、「見たい情報がすぐに手に入る」ようになり、ユーザ毎に画面を好みのレイアウト (画面配置) にカスタマイズすることもできます。

また、とくに、メニュー間のリンク (画面遷移)



ポータルシステムのイメージ
(ポータルから各機能・システムが利用可能)



ポータルで利用できる機能

項目	内容
ホーム	自分に関する情報（週間スケジュール情報、リンク情報、連絡通知情報、提出物情報など）が一覧表示されます。ホーム画面で最新情報を見ることができるので、ポータルにログインするだけで自分に関連のある最新情報を確認することができます。
スケジュール	個々の個人スケジュールを自由に登録できます（教員のスケジュールは学生からも確認できます）。
フォーラム	意見・質問・相談など情報交流ができる電子会議室です。大学全体、学部、学科、コース別、授業科目別などの任意のユーザ同士でのフォーラムを開設することができます（教員は授業科目別フォーラムのみ開設可能、学生は参加対象のフォーラムに参加のみ可能）。
連絡通知	休講や教室変更などの連絡事項をポータルを通して通知・確認することが可能です（学生は確認のみ）。
課外活動	大学公認クラブ・サークル全体のスケジュールを登録することができ、登録された団体に所属する学生及び教員は、自身のスケジュール表上で登録された内容を確認することができます。
施設使用状況	大学内の各施設の使用状況（予約状況）を月間カレンダーで確認できます。
機能連携	教務システム、生活支援システム、就職システム、CampusEyes、メールシステムを利用することができます。なお、これらのシステムへログインするためにユーザが再度IDとパスワードを入力する必要はありません。
リンク	大学や履修している授業で指定したインターネット上のサイトへのリンクや、個人ごとのお気に入りサイトなどを追加登録・削除できます。
小テスト	WEB上で小テストを行うことができます。小テストは履修者のみを対象とした授業科目別のテストです。設問は自由に設定でき、選択式や自由記述式にも対応します（学生は回答のみ）
アンケート	任意の利用者を対象とした共通のアンケート（共通アンケート）と、履修者のみを対象とした授業科目別のアンケート（授業アンケート）がWEB上で行えます。設問は自由に設定でき、選択式や自由記述式にも対応します（教員は授業アンケートのみ作成可能、学生は回答のみ）。
レポート	教員の設定した課題に対して学生が作成したレポート（ドキュメントファイル）を、WEBを通じて教員へ提出することができます。
出欠管理	教員が自身の受け持つ授業に対して出欠の管理をすることができ、学生別の出席状況を一覧で閲覧することができます。
ダウンロード	大学生活や授業で必要になる各種ドキュメントを、ポータル上のダウンロードセンターに登録することができます（教員は授業関連資料の登録のみ）。登録されたファイルはダウンロードして活用できます（学生はダウンロードのみ）。
カスタマイズ	ポータル画面のデザイン・レイアウト変更や、パスワードの変更などを行うことができます。カスタマイズで設定した内容は、自身のポータル画面にしか反映されませんので、自分好みにカスタマイズすることができます。
ポータル携帯	学生のみ利用することができます。学生携帯ポータルでは、最新情報や連絡通知の閲覧だけでなく、携帯電話向けに作成された小テストやアンケートにも回答することができます。 http://mobile.ness.niigata-u.ac.jp/

に関して、個々のユーザの作業特性に対応し得る構成となっていることが特長です。

例えば、学生がレポートを提出するまでに、以下の手順を踏むことが考えられます：

「ポータルにログイン」→「教員からのレポートのお知らせを閲覧」→「詳細内容をメールで確

認」→「レポートの評価方法を確認」→「関係資料のダウンロード」→「グループで課題に挑戦」→「レポート提出」→「教員からのフィードバックを確認」

このとき、それぞれの機能、すなわち、「連絡通知」、「メール」、「ライブラリ」、「フォーラム」等

がそれぞれ独立した（相互に連絡しない）画面遷移であると、利用する機能が変わるたびに、元の画面に辿り直す必要がありますが、ポータルシステムでは、履修している授業毎の情報をまとめて表示する「授業カード」があり、該当授業の「授業カード」に遷移することで、上記のような手順にも速やかに対応（画面遷移）することが可能になります。

教員にとっては、ポータルにログインすれば、担当授業に関わる一連の教育活動（学生への連絡、出欠管理、講義資料の掲載、小テスト・レポート・アンケートの実施等）が行え、学生にとっても、ポータルにログインすれば、授業に関わる一連の情報（教員からの通知や講義資料等）を参照したり、作業（小テスト・レポート・アンケートの提出等）を行ったりすることができます。

このように、ユーザインターフェースが格段に向上し、ワンストップサービスが実現した新しいシステムは、これまでの機能に加えて、ポータルを通じて、必要な情報がすぐに見られるようになる等、大変便利になりますので、積極的に活用してみてください！

2 システム利用上の注意

【重要】〈学外からの新システムの利用〉

新学務情報システムは、学内からであれば、（利用可能な）すべての機能が利用できます。学外からシステムを利用する場合は、セキュリティを考慮し、VPN（Virtual Private Network）を利用した接続のみ許可していません。

VPNを利用する際は、個人PC接続用アカウント（NU-CAMPUS）とVPNクライアントソフトウェアが必要です（すでにお持ちの場合は、改めて手続きする必要はありません）。

・個人PC接続用アカウント（NU-CAMPUS）は下記を参照して取得してください。
〈磁気付学生証をお持ちの方〉

総合情報処理センター B 棟 1 F 実習準備室
もしくは医歯学図書館（旭町分館）内の「アカ

ウント発行機」で、画面の指示に従ってアカウントを取得してください（学生証が必要になります）。

〈ラミネート加工の学生証をお持ちの方、教職員の方〉

総合情報処理センター事務室に直接お越しいただくか、申請書を学内便またはFAXでお送りください。（申請書は総合情報処理センターWebページにて入手できます）。

<http://www.cc.niigata-u.ac.jp/download/>

・VPNクライアントソフトウェアのダウンロードについては、総合情報処理センターWebページ「VPN接続の手引き」を参照してください。

<http://www.cc.niigata-u.ac.jp/service/vpn/>（VPN接続の手引き）

【重要】〈学外からのメールの利用〉

・学外PCからのメールシステムの利用

新学務情報システムでは、ポータルを経由してメールシステムを利用する場合、学外からはVPN接続が必要になります（学外からメールソフトで利用する場合も、VPN接続が必要です）。

VPN接続が利用できない場合、以下のURLにアクセスすると、学外からもメールシステムが利用できます。新学務情報システムのIDとパスワードでログインしてください。

<https://mail.cc.niigata-u.ac.jp/>

・携帯電話からのメールシステムの利用

新しいメールシステムでは、携帯電話からも直接、メールを利用することができます。下記URLにアクセスし、新学務情報システムのIDとパスワードでログインしてください。

<http://mail.cc.niigata-u.ac.jp/i/>
(I-mode, eZWeb^(*))

<http://mail.cc.niigata-u.ac.jp/j/>
(J-Phone)

(※) eZWeb の一部の機種 (ブラウザ種別が「HDML」になっている機種) では、上記 URL では動作しない場合があります。その際には、下記 URL をご利用ください。

<http://mail.cc.niigata-u.ac.jp/ez/index.html>

お持ちの機種が該当するかどうかについては、下記の Web サイトをご参照ください。

http://www.au.kddi.com/ezfactory/tec/spec/new_win/ezkishu.html

3 新システム関連情報 Web サイトのご案内

学務情報部門では、各種操作手順等、新学務情報システムに関連する情報をご参照いただける Web ページを設置しております。順次、掲載しておりますので、ぜひご覧ください。

新学務情報システム関連情報 URL :

<http://www.ge.niigata-u.ac.jp/iie/gakumu/gakunai/ness/>

(学内参照のみ)



全学教育機構 学務情報部門
〈新学務情報システム問い合わせ窓口〉
E-mail: support-ness@ge.niigata-u.ac.jp





学務情報システムに 関わってきて

全学教育機構 学務情報部門 協力教員 永井雅人
(人文社会・教育科学系)

この7月まで使われていた旧学務情報システムは2002年4月から稼働を始めました。私自身は、この時期から学務情報システムに関わりだしたのですが、当初は、システムそのものに不安定な部分もあり、混乱が見られましたが、こうした点も徐々に改善されていきました。私が一番心配していたのは、このシステムは使える学生だけが使えばよい、あるいは使い方を徐々に覚えていけばよいというものではなく、入学後、講義が始まったならば直ちに履修登録などに全ての学生が使わなければならないシステムであるという点でした。2003年からは、PCの操作に不慣れな学生を対象として、入学式前日にPCの操作法についての講習会を行い、各学部の新入生ガイダンスでも、学務情報システムの説明が行われましたので、基本的な操作について、学生が混乱するということは余り見られなくなりました。学務情報システムを使った履修登録などの操作はそれ程難しいものではありませんから、指定したホームページを見ることができるといった程度の、ごく初歩的なPCの使い方さえ知っていれば、後はこのシステムに関する簡単な説明を聞いた上で実際に使ってみるにより、ほとんどの学生が問題なく使えているようです。

2002年の10月に行われた学生生活実態調査（2年生以上は、前年まで従来の方法で履修申請などを行っていたこととなります）においても、五十嵐地区の各学部では6～8割程度の学生が学務情報システムにおける履修申請・確認は便利な機能だとしています。

私が行っている講義（主に1年生が対象で、2/3は経済学部の学生ですが、残り1/3はそれ以外の学部の学生が聴講しています）において、学務情報

システムについては要望があれば書くように指示したところ、履修申請などについては特に指摘はなく、上がった意見としては、「自宅から成績が見られないのが不便である」、「掲示情報の中から自分に必要な情報を見つけにくい」、「従来からある紙の掲示板にはあるが、学務情報システムの掲示情報に無いものがある」などでした。1つ目に関しては、新しい学務情報システムではVPNという機能を使うことにより、自宅から見るができるようになりましたし、2つ目についても、例えばある講義を聴講している学生だけに情報を送るといった機能が付いたことなどにより、だいぶ改善されるだろうと思います。最後については、学務情報システムの問題というよりも、教員側が十分に学務情報システムを活用していないことが原因でしょう。教員側が思っている以上に、学生の方は学務情報システムに馴染んでいる感じがします。また、今年度寄せられた感想で特徴的なものとして、「重いシラバスを持ち歩く必要がないので便利だ」というのがかなりの数ありました。これはもちろん学務情報システムの機能であります。ここ数年、全学的にシラバスの内容を改善してきた結果でもあらうと思われま

す。新しいシステムでは、レポートの提出など追加された機能もありますが、それ以上に、従来からある機能が、より使い勝手が向上したものと感じています。こうしたシステムをより便利なものとしていくためには、学生・教員・事務サイドのそれぞれが、（最初は面倒に感じる部分もありますが、少し無理をしてでも）積極的にシステムを活用し、相互連絡などのために、このシステムの位置づけを高めていくことが重要だろうと思います。



入学おめでとう

歯学部長 山田好秋

入学おめでとうと題していますが、あなた方学生さんはすでに夏休みを迎え、そろそろ大学生としての生活に慣れてきた頃かと思います。新潟大学のキャンパス生活はいかがですか？ サークル活動に参加していますか？ 五十嵐キャンパスは旭町キャンパスから離れているため、あなた方の日常生活を十分に把握できません。以前は教養教育が明確に設定され、2年間は専門教育から分離されていましたが、現在は入学時から旭町キャンパスで専門課程の教育を垣間見ることができるよう工夫されています。

さて、新潟大学歯学部には歯学科と口腔生命福祉学科が設置されています。いずれの学科も他の国立大学とはひと味違った教育方針を持ち、個性ある学生を育てる努力をしています。もっとも教員の努力とは裏腹に、高校までの管理された生活から解放され、少々授業をさぼっても特に注意されることもなく、好きなことが自由にできると喜んでいる学生も見受けられます。一方では特に自分の意志ではなく進路指導で振り分けられたと感じている学生は、自分の将来に不安を持ち、落ち着かない生活を送っているのではないかと思います。そこで「おめでとう」の代わりに社会環境の変化が教育の現場に及ぼす影響について説明し、将来に向けた人生設計が正しく行われるように注意を喚起したいと思います。

最近の規制緩和は教育の分野にも浸透してきました。新しい大学や学科の増設は文部科学省の厳しい審査を受ける必要があったのですが、今では「作るも自由」「つぶれるも自由」の原則が打ち出されています。ただし、歯科医師の入学定員は厳しく管理され、未だに行政のコントロール下にあります。そんな中で歯科医師の過剰が問題となり、

入学定員の削減が実施されてきました。そのため歯学科はかなりの高倍率になったはずですが。実は入学定員を抑制してもその効果が現れるのは6年後ですが、「国家試験を難しくする」という即効性のある方法もあります。その真偽はわかりませんが、少なくとも国家試験の合格率が低下してきたことは事実です。そこで皆さんに忠告です。歯科医師という職業を自分でよく確認し、その中でどのような学生生活が重要かを考えてください。前向きな学生にとっては新潟大学歯学部は在宅診療など社会の要求に応えられる歯科医師の養成を実践的に行っているすばらしい学部です。

厚生労働省は最近、介護が必要な高齢者や障害者らの相談に乗る社会福祉士の国家試験について受験資格を厳しくするなど大幅な制度改正を検討しています。これは高齢化の進展や介護保険制度の導入で需要が急増していること、さらには今年4月の新介護予防サービスの導入や障害者自立支援法の施行で、社会福祉士の役割が増していることから、質向上のため実践的な学習を増やす必要があると判断されたからです。また、高齢者を狙った住宅リフォーム詐欺などが相次ぎ、成年後見制度による後見人に社会福祉士を選任するケースが増えることも予想され、きめ細かい対応ができる専門家の必要性が高まっています。

歯科衛生士としての道を志す学生さんにとっては社会福祉士の資格は重要でないかもしれませんが、口腔生命福祉学科を設立した目的は、介護・医療の現場で、患者さんや要介護者を医療の方向からのみ近視眼的にみるのではなく、医療と福祉の両面から見ることの良い人生を送って頂くお手伝いができる、新しい人材を養成することにあります。目的を明確にし、力一杯やってみてください。



平成18年度 新潟大学歯学部入学おめでとう

新潟大学医歯学総合病院副院長 宮崎 秀夫

皆さんは全国各地から難関を突破して新潟大学歯学部歯学科・口腔生命福祉学科に入ってこられました。心より祝福するとともに、将来の仲間として喜んでお迎えしたいと思います。

新潟大学医歯学総合病院歯科は歯科医療を行う地域基幹病院、研究病院に加え、臨床教育の重要な場であることは今更いうまでもありません。特に、歯学教育に関しては、全国の他大学歯学部や歯科大学のどこより充実していることを言っておきたいと思います。まずは、全国に先駆けて、入学後直ちに病院実習を行うカリキュラムを導入しました。患者付き添い実習は、5年次の後半から始まる臨床実習に向けての心構え形成や、医療の本質である「患者様の視点に立つ」という意味を実感していただく目的があります。歯科医師の視点に立つ見学実習では、医療行為に必要な知識や技量を観察し、これからの基礎歯学・臨床歯学学習にモチベーションを持っていただくことに加え、医療人としてのあるべき態度を肌で感じ取ってほしい。さらに、自身の口腔健康チェックアップを行う患者役実習は、もちろん、自分の健康管理ができない人が他人（患者）の健康管理ができるわけがないという意図があります。

本年度より、法制化による歯科医師臨床研修制度が始まりました。歯学科の皆さんは卒業し、国家試験合格後どこかの研修施設で1年間研修を行うことが義務づけられました。大学入試と比べると、研修施設の選択は比較的希望が通りやすいかも知れません。受け入れ施設としての大学病院や一般診療所などには、大きな競争原理が働いています。新潟大学には優秀な歯科医師が全国から希

望してきますので、本学出身だからといって安心しないでください。また、出身地へ戻って大学病院などで研修したい人には、受け入れてもらえるよう一貫した努力が必要です。卒業前に実際に患者治療を行っている大学が現在ほとんどない状況で、本学は患者治療の臨床実習を5～6年次に行っています。ここでの経験が、(どこの研修施設に行っても)充実した臨床研修につながることをしっかり意識しておいてください。

口腔生命福祉学科は3回目の入学生です。口腔ケア・摂食嚥下に関する高度な専門知識を持つ保健・医療・福祉を総合的に思考・マネジメントできる専門家になることが期待されています。医歯学総合病院では歯科外来の中に、歯科衛生士の主要科目である予防処置、歯科保健指導および歯科診療補助の実際を行えるように、臨床実習室を兼ねた「お口の健康室」を準備し、また、口腔ケア・摂食嚥下、介護実習など経験できるように、総合リハビリセンターの摂食嚥下機能回復部にて皆さんをお待ちしています。

豊かな自然に囲まれた新潟の地で4年と6年あるいはそれ以上、歯科医療、保健福祉を勉強することになります。余所と比べて食材の豊富さ、新鮮さは群を抜いており、高いお金を使わなくとも、美味しいものをたくさん味わうことができます。仲間と大いに食べ、大いに飲み、大いに語らって歯学に留まらない幅広い教養を身につけ、魅力のある人になってください。仲間がどんどん増えて、楽しく充実した学生生活を送れるものと確信いたします。

入学者のことば

歯学部に入学者として

歯学科1年 上村 藍太郎



あの浪人時代、気付くと高校での日々を思い出していた。たしかに、大学での自分を想像したこともあった。しかし、空虚な想像に幾度となく嫌気がさしたことが。また、社会的意義の

感じられない自分をどんなに情けなく思ったことが。

今、あのときの記憶は消えつつある。そして楽しかった高校生活も、よき思い出となろうとしている。過去を過去として感じられるのは、今が充実していることの他ならぬ証左であろう。

思えばこの入学を果たすまでは、新潟のすべての町並みに新鮮な感動を覚えていた。しかし、今や私のふるさとがそれに取って代わった。久々に前橋駅に降り立つなり、見慣れたはずの風景を思わず眺めまわしていた。荷物を両手に家路を急ぎつつ、ふるさとを持つ喜びをかみしめるのであった。

大学生となった私は、毎日楽しく過ごしている。何よりも笑い合える友人、語り合える友人がいることがうれしい。これからも歯学部の面々を、同じ道を歩むよき友として大切にしていきたい。また長くお世話になる歯学部の先生方を、生涯の師と仰いでいきたい。

私たち新潟大学歯学部の1年生は、早期臨床実習を行うことになっている。この実習では、患者役として処置を受ける患者役実習や、初診の患者様を対象にした患者付き添い実習、そして治療見学実習を行う。患者役実習では、実際に処置を受けて、どのような処置が痛みを伴うかを知ることができた。また、治療見学実習では、口を開けら

れない患者様を目の当たりにして、口を開けられないという症状が現実存在することや、その症状が患者様の生活に深刻な影響を与えることを知ることができた。実習を通じたこのような体験により、今後の歯学に関する専門科目の学習は現実に即したものとなるだろう。2年次以降の専門科目の学習が、自身の歯科医師としての能力を決めることを思うとき、これを目前にして現場をみられることの意義は大きいと思う。

これからは、信頼される歯科医師をめざして、現実に甘んじることなく、謙虚に日々を送りたい。

新潟大学歯学部に入学者として

歯学科1年 平原 三貴子



長い受験生活を終え、やっと迎えた入学式からもう3ヶ月が過ぎようとしています。この3ヶ月間、本当にあつという間でした。新潟出身の私にとっては、全く知らない土地で新しい生活が始まるわけではなかったのですが、これから

の6年間、ちゃんとやっていけるのだろうか、間違った選択をしてしまっていないだろうかと不安に思うこともありました。しかし3ヶ月が過ぎ、大学生活にもようやく慣れてきた今、新潟大学に、そして歯学部に入学者できたことを心から嬉しく思います。

入学してすぐに始まった早期臨床実習で、初めて白衣を着て病院に出た時の緊張感とちょっと誇らしい気持ちは新鮮でした。しかし、白衣を着て病院にいれば、もう学生じゃない、医療スタッフとして見られるのだから行動に気をつけなければならないということに対して責任を感じました。慣れない実習に毎回緊張し、へとへとになり、そ

の上、午後からは苦手なコンピュータを使うスタディスキルズが待っているため、金曜日はなんだか憂鬱なものになっていました。しかし、患者付き添い実習の時、前の週に担当した患者様が顔を覚えていてくださって「また来たのよ。先週は助かったわ。」と声をかけてくださいました。未熟な私でさえ、患者様の力に少しでもなれたことが本当に嬉しかったです。専門的な知識を持たない私たちが病院の中を動き回れるのは、多くの病院関係者の方々のお力添えがあってこそだと思います。私たちに貴重な経験をさせてくださっていることに感謝します。

これからの6年間、楽しいことばかりではないでしょうが、自分で選んだ道を信じて進んでいきたいと思います。また、勉強だけじゃなく、色々なことに挑戦して人間的にもっと成長していきたいと思います。最後に、この道に進むことを応援し、支えてくれている母、姉たちに感謝します。

口腔生命福祉学科に入学して

口腔生命福祉学科1年 小林 玲



口腔生命福祉学科に入学して三ヶ月が経ち、一学期が終わろうとしています。入学したての頃は勝手がわからず戸惑っていた大学生活にもようやく慣れ、部活、勉強、バイトにと充実した毎日を送っています。最近では、疲労感と戦う毎日です。部活はバスケット部に入部しています。小・中学校、高校と続けてきたこともあり、大学でも続けようと思っていました。今では、週2~3回の練習に加え、自主練をするなど、とても充実しています。勉強面では、7月末に迫ったテストに追われながらも、教養科目や早期臨床実習にと、これもまた大変充実しています。特に、早期臨床実習では、患者様に直接接したり、さまざまな治療を見学できたり、車椅子での実習があったりととても貴重な実習となりました。

私は、医療関係、福祉関係の両方に興味を持つ

ていてどちらの道に進もうかとても迷っていました。そんな時、この学科を見つけました。名前だけを見たときは、「なんだ、この学科?」と思いました。しかし、よく調べてみると、歯科衛生士、社会福祉士を養成するという学科で、こんな欲張りな私にぴったりだと思い、また、できて間もなく、しかも全国でも新潟大学が初というもあり、新しいことに挑戦してみようと思い、ここに入ろうと決心しました。

この学科は、できてまだ3年目。世間の認知度もまだまだ低く、学科名を言えば、「なにそれ?」と言われるばかりです。説明しても理解されないこともしばしば。でも、これからの社会において、重要な役割を果たす学科であるのは確かだと思う。だから、もっとこの学科を盛り上げていかなければならないと思います。

これから、2年、3年になるにつれ専門科目も多くなっていきます。その中で、多くの知識を吸収し、これからの社会の役に立てる人材になるために頑張っていきたいと思います。また、誰もが、この学科に入ってよかったと誇りを持てるような学科を築いていきたいです。

口腔生命福祉学科に入学して

口腔生命福祉学科1年 山本 有加利



大学に入学してからあっという間に3ヶ月も過ぎてしまいました。合格する前のこの世の終わりを迎えたかのような顔はもうしていません。あまりにすんなりと気持ちが切り替わったので、あの苦しみは一体なんだっただとさえ思います。面接試験で緊張のあまり自分でも何を話しているのかよくわからずに、とにかく話を途切れさせまいと必死で喋り続けていた事が遠い昔のことのように感じられます。

入学当初は大学の勉強システムに苦労し、いろんな人に何度もしつこく質問を繰り返しては迷惑ばかりかけていました(今でもそうです)が徐々

に慣れつつあります。が、授業内容は格段に難しそうな専門用語の数が増えて、(あれは何? これは何?)「これくらいは高校でも習ってきたでしょ」(そんなの習った覚えはない。自分が忘れただけ?) 覚えなければいけないことがたくさんあって、その上次々レポートが課されるので悪戦苦闘しています。レポートもかなり未熟なもので他人の受け売りばかり書いています。自分のレポートが書けるようになるにはまだまだ勉強が足りません。

未熟といえば、早期臨床実習で付き添いをした患者様にアンケートで「付き添いの目的がわからない」と書かれてしまいました。こちらが気を使ってしたこと患者様は迷惑だと思っていたり、もっと話しかけてくれてもいいのにと感じています。意思疎通の難しさを改めて痛感しました。その人が口や態度に出さなくてもその感情をしっかり読み取ることができるようになるために一つ一つのコミュニケーションを大切にしていきたいです。

自分がどういう人間になってどんなことがしたいのか、まだはつきりとしていませんがこれから4年間一生懸命勉強に励んでその答えを出したいと思います。

大学院に入学して

顎顔面口腔外科学 池野 良



早い、本当に早い。時間が経過するのが早い。新潟大学大学院に入学してからの、この4ヶ月を一言で表すと『早い』しか思い浮かびません。

他大学出身の私は、初めは諸先生方の名前を覚えることから始めました。また、学校の雰囲気、新潟の環境に慣れる事で精一杯でフラストレーションの溜まる毎日でした。しかし、時間が経つにつれて環境に少しずつ慣れてきました。環境に慣れる事により、序々に仕事・勉強にも目を向けられるようになりました。

このころから仕事が増えてきて一日が短い、時間が経過するのが早いと感じてきました。時間が経つのが早く感じるということは、日々充実していることだと私は思います。家に帰った時に感じる疲労感に対応した充実感を毎日感じています。

顎顔面口腔外科の大学院1年次は、口腔外科外来、病棟、歯科麻酔科を4ヶ月ずつ回ります。私は、現在歯科麻酔科をローテーション中です。歯科麻酔科では、患者様個人の全身病態や、全身麻酔、鎮静法について丁寧に御指導して頂いております。普段なかなか勉強しにくい、手が伸びない分野だと感じておりましたが、今回勉強できるチャンスと環境を与えて頂き感謝しています。また、このチャンスを自分のために生かせるようこれからも精進していこうと思います。

私の大学院の研究は始まっていません。ぼんやりとしか、どのような研究を行いたいかは見えていません。しかし大学院で、毎日学ぶ事が研究の道しるべとなると思っております。そして、研究を成し遂げたとき大きな自信が付くと信じています。まだまだ、足りない所ばかりで御迷惑をおかけすると思いますが、なにとぞ宜しく御願います。

大学院に入学して

加齢歯科補綴学 目黒 真依子



今から2年程前に、日本大学を卒業後、新潟大学の研修医になるべく、実家のある新潟に帰って来ました。それから2年間、毎日診療室で不足気味の脳味噌フル回転で臨床経験を積ん

できました。ちょうど2年目の秋、同期の研修医も研修医終了後の進路を考えていた頃、新潟大学が主幹の補綴学会のお手伝いをしました。多くの大学院生の堂々たる研究発表や、ポスターの数々を拝見して、何か自分も1つのことを掘り下げて研究してみたいと思いました。2年間臨床をやってきたことも考え、臨床研究が何かできないかと。

そんなことを思いついてしまい、大学院進学を決意してから、早くも半年以上経ってしまいました。

現在は、まだ研修医から大学院生に移行中といった感じですが、研修医時代には知らなかった大学の新たな一面に触れ、心機一転といった感じ değildir。研究テーマも決まり、すぐにでも研究できる状態なのですが、なかなか現実は厳しいです。まず文献の探し方が解らない。探し方が解ったら今度は当たり前ですが、全部英語。今までに経験したことのないことばかりで、途方もない迷路に迷い込んだ気分です。また、教授の講義のお手伝いもさせて頂き、大学生の時は、できるだけ扉の近くに座り、睡眠学習だった私が最前列で聴いてい

るなんて、母校の先生方が知ったら、さぞやおどろくことでしょう。でも、今また講義を聞いてみると、臨床での経験と結びつき、より理解が深まる気がします。

両親は、またまた学生に逆戻りという事態に、半ば呆れていますが、今まで勉強とは縁遠かった分、4年間みっちり勉強するのも悪くないかなと思う今日この頃です。

長い歯科医師人生の中で最初の数年がその後を決めるとよく言われます。同じ歯科医師でも、同期の仲間と様々な道を選び、その答えが出るのは、もつとずっと先ですが、この選択がきつと良い答えに繋がると信じています。



教授に就任して



教授に就任して

口腔生命科学系列・教授
(口腔生命福祉学科)
(福祉援助学講座) 鈴木 昭

平成18年6月1日付けで口腔生命福祉学科教授を拝命しました鈴木です。福祉援助学講座を担当しています。昨年4月から歯学部にお世話になっております。改めてよろしくお願いたします。

35年間、新潟県に福祉行政職員として勤めていました。平成12年(2000年)の福祉の基礎構造改革に先立つ1990年代はじめ福祉8法が改正され、この時代に今の社会福祉士・介護福祉士法が新たにつくられました。県庁で係長をしていたときですが、この法律の要綱案をめぐって感慨に浸ったことを覚えています。感慨というのは、ようやく社会福祉の分野でも法律に「技術」というコトバが入ってきたか、というものです。いわゆる指定科目として示された社会福祉援助技術論、社会福祉援助技術現場実習などの科目のなかに「技術」という文字を見つけたからです。かねがね社会福祉というソーシャルワークには、理念しかないのではないかと感じていましたので、今度は技術なのだ、と一念を押して確認しました。これで共通のコトバができると。

実際、福祉改革胎動の1990年代までは、福祉は措置(行政処分)で対応していて、いわゆるソーシャルワークの出番は少なかったように思います。ちょうどこのころ新潟県の最初の社会福祉計画策定に携わったのですが、たとえば在宅介護支援センターは中学校区ごとに1ヶ所という目標を掲げました。まだ法施行前で、計画期間中に本当に達成できるのか半信半疑でした。それが今は地域包括支援センターです。このセンターには社会

福祉士(ソーシャルワーカー)が置かれなければなりません。福祉は激変の只中にありますが、その本流は行政による措置ではないソーシャルワークの舞台装置が整えられつつある、ということだと考えています。措置から契約への時代が姿を見せ始めたのです。

日本学術会議が提言しているソーシャルワーカーが登用される社会を目指すには、今まで以上にその技術が求められ、確かめられます。技術というのは同じ操作的な手順、手続きに従えば誰がやっても同じ結果に辿り着くものだと思うのですが、福祉の現場では、人間存在の歴史性や1回性、生物学的モデルに対しての生活モデルが強調され過ぎているような気がします。援助の過程は無数の場面から成り立っているわけですが、そこで用いる知識、技能、態度は一度客観的に構造化された場面に還元され、援助技術として共通言語化される必要があると考えています。いわばソーシャルワークの過程を暗黙知から形式知にしていく翻訳の作業が急がれているということです。

当学科で進めているPBL授業のシナリオは、この翻訳可能性を内包していると考えています。因みに人文・社会科学系では判例を主体にした法学では先行例があるようですが、福祉のカリキュラムでPBLというのはおそらく新潟大学がその嚆矢です。

山田学部長からご指導をいただきましたように、これまでの福祉現場における実践をこのような観点から整理していきたいと思っています。

新潟県では、おおまかに括ると地域保健・精神保健福祉、社会福祉施設での直接処遇、行政・相談所の3領域にまたがる仕事に従事してきました。

入庁した昭和40年代半ばはまだ精神衛生の時代で、精神障害者の地域生活支援は医療のフレームで語られていましたが、50年代に入って、精神科デイケアの試行や認知症の疫学調査、自殺予防対策などの事業に携わりました。

社会福祉施設は最初、コロニー白岩の里で強度行動障害を随伴する重度棟が担当だったのですが、入所児童の嚙下障害や歯磨きに苦労し、随分と歯科診療室の野田先生にお世話になりました。外廊下で治療の終わるのを待っているのですが、ときおり先生の歌っておられるカンツオーネが診療室から洩れてきていたのを思い出します。

行政の職場では、福祉のまちづくり条例の制定や県立施設の再編・改築を担当しました。コロニー白岩の里は、各棟ともユニットケアにし、475名から300名に定員を変更しました。まだ今のように地域移行の考え方が浸透していなかったので、福祉サービス切捨て、と批判されるのを覚悟していましたが、障害者福祉のこれからのメインストリームは地域生活の実現だ、という確信がありました。いわゆる小規模作業所に通う在宅障害者の歯科訪問診療事業が始まったのもこのころからです。

県庁で知的障害者福祉に従事していたときに、障害者が餓死する事件に遭遇しました。これだけ飽食の時代に餓死です。国会でも取り上げられました。福祉は、ニーズキャッチが大切です。つながりが切れたときに福祉ニーズが発生します。この事件でも発見されたのは死後1ヶ月近くたってからのことでした。地域福祉の復権がさげられる所以です。

家族や地域とのつながりが切れるだけでなく、自己の内部で過去、現在、未来の時間軸がうまくつながらなくなるときもあります。格差が拡がり、デジタル化が一層進展していくなかで、新たな援助を必要とする人々も増えていきそうな気配です。

新たな福祉のニーズといえば児童虐待やDV・配偶者間暴力の問題があります。新潟県で最後の職場は、児童家庭福祉の総合相談窓口である中央福祉相談センターだったのですが、寄せられる相

談をみているとつくづく相談所は時代病理を反映するアンテナショップか、とってしまうような様相を呈していました。

子どもの事件をめぐってメディアスクラムというものも体験しました。プライバシーの保護は相談所の生命線なのですが、人権の保護と情報公開とをどのように折り合いをつけていくのか、勉強させられました。

時代が法律をつくります。昔も児童虐待防止法がありましたが、平成も10年を過ぎて新たな防止法ができました。児童虐待は、心の栄養として絶対的な安全感と人間に対する信頼感を獲得しなければならぬ人生の出自のときから、虐待を受けるわけですから深刻です。子どもは育てられたように育っていきます。暴力の時代連鎖を断ち切り、被害者でもある虐待者を支えていくプログラムの開発は、これからです。新しい相談をすすめていくために、これまでの理解と受容を基調とした相談・援助技術に新しいスキルを付け加える必要があります。

児童相談所のときに新潟県歯科医師会の申し出により、児童福祉施設や一時保護所の子どもたちの歯科健診をお願いしました。施設と一時保護所では、大きな差が見られました。保護されて間もない子どもたちに比べ、生活が落ち着いてきた施設にいる子どもたちの方が格段に口腔内の状態がいいのです。ネグレクトなどの生活環境が子どもたちの歯やお口の健康状態に大きな影響を与えていることを実感しました。面白いことに健診を受けた子どもたちは、生き生きしてきました。一生懸命歯を磨き職員に褒められていました。これまで人から褒められることの少なかった子どもたちが、歯磨きという分かりやすい行動で周りの大人から褒められるのです。歯磨きが習慣化していくにつれ、生活が規則正しくなり健康指南力も高まっていくのが分かりました。

歯科健診をきっかけに子どもたちが自尊感情を高めていくことができる、歯学部にお世話になってこのようなことを考えています。お口の中に人生の幸、不幸が表れます。お口の健康のテクノクラートが社会福祉のパラダイムを変えていく、最近はそう思いこんでいます。

祝 新潟大学名誉教授 島田久八郎先生 叙勲おめでとうございます

口腔生命科学系列・助教授 山村 健介
(口腔生理学分野)



新潟大学名誉教授で歯学部口腔生理学教室教授であられた島田久八郎先生（79歳）は平成18年4月29日付け発令の「平成18年春の叙勲」において、教育研究の功績が認められて「瑞宝中綬章」を受章されました。

島田先生は昭和2年に新潟市にお生まれになり、昭和27年に新潟医科大学を卒業された後、新潟大学医学部助手、助教授を経て、昭和42年4月に新潟大学歯学部口腔生理学教室の教授に就任されました。教授就任と同時に歯学部の運営委員会委員、同年7月には新潟大学入学試験制度委員会委員を委嘱されるなど、草創期にあった歯学部や変革期にあった新潟大学の礎を築くことに大きく貢献されました。その後も新潟大学電子計算機運営委員会委員、新潟大学附属図書館委員会委員を歴任され、さらに昭和47年から6期8年余にわたり新潟大学評議員、平成元年からは2期4年にわたり歯学部長をつとめられ、平成5年に定年退官されるまで、長年にわたり歯学部および新潟大学の管理・運営に携わってこられました。

また、在職された39年間、先生は生理学教育を通して生命科学の基礎を身につけた教育者、研究

者、臨床家の養成に力を注がれるとともに、ご自身も呼吸運動のリズム発生機構やその修飾機構について電気生理学的手法を駆使した実験をおこなわれ、多くの成果をあげられました。また昭和40年代後半からは、教室に在籍した大学院生などの若手研究者とともに咀嚼運動調節機構における歯根膜をはじめとする様々な口腔感覚情報の役割を解析した一連の研究を展開されました。これらの研究は、同一の受容器から誘発される反射が運動ニューロンの活動状況に応じて変調されることを解明し、学会でも高く評価されました。

若手研究者に対する先生の指導は非常に真摯かつ熱意あるもので、朝、実験の相談のため教授室に入った大学院生が教授室を出てくるのが夜中ということも決して稀ではありませんでした。先生の研究に対する姿勢で特に思い出されることは実験データを非常に大切にされることで、教授室で先生と二人で記録したばかりの「未処理」のデータを長時間にらめっこ……という状況は先生の指導を受けた大学院生なら誰もが経験したことです。また論文執筆指導の際には「話すように書きなさい」「あなただけがわかっている(注：あなた



にしか理解できない文です)」などの名言からもわかるように研究データを理路整然と他人に伝えることの大切さを教えてくださったのが思い出されます。そんな中でデータを見る目や、論文を執筆する能力が自然と養われていったのだと思います。

さる7月29日には口腔生理学教室のスタッフや島田先生のもとで学位研究を行った先生方による

「島田先生の叙勲を祝う会」が開催され、久しぶりに先生のお元気な顔を拝見することができました。以前よりおだやかになった表情で「才能ある若い人たちと同じ時間をすごすことができたことを本当に感謝しております」との御礼の言葉をいただいたときには一同恐縮するばかりでした。島田先生、これからも健康に留意されて、ますますのご活躍をお祈りしております。



顎関節治療部の紹介

新潟大学医歯学総合病院・顎関節治療部 荒井 良明

顎関節治療部は、いわゆる顎関節症患者に対して診査・診断・治療を行う診療部として、2006年4月より専任歯科医師2名を配置し設置されました(写真1)。

これまでも1994年より、補綴科、口腔外科、矯正科、画像診断の数名ずつの担当者により構成された顎関節治療班として、10年以上に渡ってチーム医療を行ってきましたが、今回正式に中央診療部の一つとして設置され、今後より専門的な医療を提供できるものと期待しています。

我々が現在行っている臨床についてご紹介いたします。

1 顎運動機能の診査

顎関節症状を訴えて来られた患者様は、すべて総括的に顎関節治療部にて共通プロトコールによって診査されます。年間約300名の新患の患者様が来院しています。診査は問診に始まり、筋や顎関節の触診、下顎の可動性検査を経て、画像診査としてパノラマおよびシーラーによるX線診査をします。

また、これら身体面のみならず精神心理面の診査として、簡易精神健康評価表を用いたスクリー

ニングも行っています。

2 顎関節症の診断

すべての症例が、毎週水曜日に行われる「診断と治療方針の検討会」において検討されます。この検討会では、顎関節症を専門としている補綴医、口腔外科医、画像診断医、矯正医の専門医4名を中心として、各症例の担当医が診断と治療方針の妥当性について検討し、顎関節治療部としての診断と治療方針を決定します。さらにMRIやCT、筋電図、採血等の検査を追加すべきかが検討されます。

3 顎関節症の治療

治療は診断に基づき、初期治療として患者教育、セルフケア指導、理学療法(写真2、3)、薬物療法、スプリント療法が行われます。現在最も効果があると報告されている患者教育を初診時には十分に行うことが、不安を抱いて来院された患者様にとって最も重要だと考えています。2週間に一度の来院ごとに患者様の症状は自覚的および他覚的に再評価されます。3ヶ月を目安としたこれらの可逆的療法である初期治療で、80%以上の患者様は症状が改善し、日常生活に支障が無い程度に回復し予後観察に入ることになります。

症状に改善が認められない患者様は、再度検討会にて報告され、追加検査や今後の治療方針を検討します。長期間におよぶ症例は、顎関節内障の進行したケースや筋症状が消失しないケース、精神心理面の要因が大きいケースが主体となります。顎関節内障で痛みが改善しない症例、開口量が増加せず日常生活に支障が残る症例では外科的療法が選択されます。非開放性関節手術として、顎関節穿刺によるパンピング・マニピュレーション、



写真1 顎関節治療部外来受付。診療室はインプラント治療部、画像診断診療室と併設



写真2 遠赤外線を用いた理学療法



写真3 超音波を用いた理学療法



写真4 顎関節穿刺による関節腔洗浄療法

関節腔洗浄療法(写真4)、関節鏡視下手術、時には開放性関節手術として、関節円板切除術、下顎頭切除術、下顎枝垂直骨切術が行われます。これら開放性関節手術は毎年約1%、2～3名の患者様に適応されています。

スプリント療法後に咬合の要素が大きいと考えられた症例は、咬合調整や、補綴物の再制作が選

択されます。咬合支持の消失により消失側の顎関節の負荷が増加し、咬合が継続因子として働き、症状が継続してしまうケースが多く観察されます。これらの症例は補綴専門医に紹介され、慎重に補綴治療が行われることとなります。

また顎関節治療部では「顎関節症の補綴学的治療」が、日本でも三番目に高度先進医療として承認されました。適応症は、初期治療後に開咬等となり全顎的な補綴治療が必要となった症例です。初めに顎運動測定装置で顎運動を測定し、金属性で食事時も使えるメタルスプリントを製作し咬合機能の回復を図ります。再評価して症状の再発が無いことを確認後、最終補綴に移るといものです。すぐに非可逆的な補綴治療を行わずに、メタルスプリントを長期間使って、患者の咬合因子の評価が行えるところが特徴です。毎年2～3症例の高度先進医療が実施されています。

精神心理面の要因が大きいケースでは、麻酔科のペインクリニックや心療内科を併診していただくこともあります。

4 臨床研修医による研修

本年度より歯科医師臨床研修医制度が必修化となりました。6月より顎関節治療部においても2名ずつの研修医が2週間交替で研修しています。診査、診断後には検討会での症例の報告、さらには初期治療までと一連の治療の流れを学んでもらいます。2週間と短い研修期間ではありますが、終了時には皆自信をもって顎関節症の患者様に接することができるようになっています。

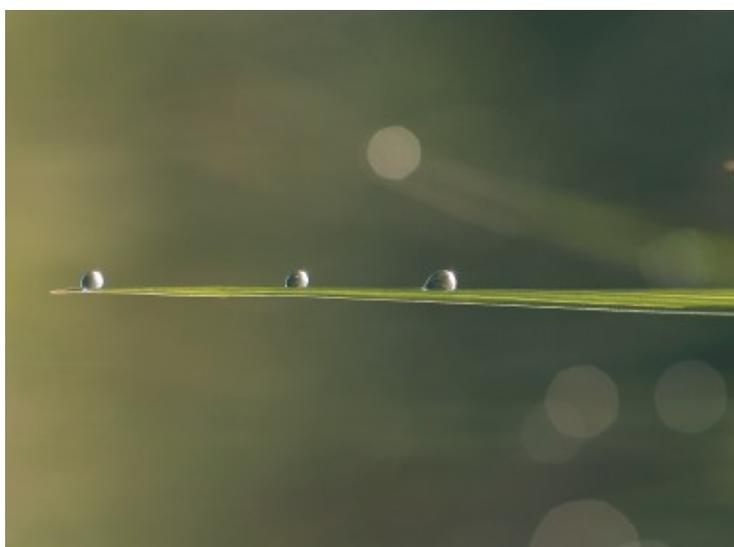
5 ホームページ開設

ホームページは、患者様への情報提供と地域医療に携わる先生方に顎関節治療部の現状をご理解いただき、有効な連携により多くの患者様が一日も早く機能障害から開放されることを目的に開設しました。<http://www.dent.niigata-u.ac.jp/hosp/tmd/>

是非一度ご確認いただき、ご意見、ご希望がありましたら、何なりとお寄せいただければ幸いです。

以上、立上げ後約5ヶ月を過ぎある程度体制も整いましたので、ご挨拶とご紹介をさせていただきました。なにしろ2名ですので、昼ご飯が食べられる日がめずらしくらい臨床に振り回されて

いる毎日です。今後、先生方との良好な連携により、これまで以上に地域医療に貢献できるよう努力いたしますので、宜しくお願いいたします。



インプラント治療部の開設と現況

インプラント治療部 星 名 秀 行
魚 島 勝 美

1 はじめに

平成18年4月より、本学医歯学総合病院歯科にインプラント治療部が設置され運営されています。本院では昭和60年代から診療室単位でインプラント治療を行ってきました。平成9年7月にインプラント外来が設置され、インプラント診療班運営委員会の下でチームアプローチによる治療が行われてきました。本年4月からのインプラント治療部設置によって、組織的かつ効率的に各専門診療室の英知を集約し、患者様により良いインプラント治療を提供することができるようになりました。現在、新患受付は3階のインプラント治療部で行い、インプラント手術は3階の歯科外来手術センター（旧歯病中央手術室を改修）で行っています。

おいしく食事をするということはとても大事なことです。従来、歯が無くなった場合には両側の歯を削って固定するブリッジや、取り外しの入れ歯を使って治療することがほとんどでした。しかしながら、近年では歯科用インプラントの予知性と信頼性が飛躍的に向上し、多くの患者様がこの治療を受けていらっしゃいます。スタッフ一同、さらに良いインプラント治療を皆様にご提供できるよう、日々努力をして参りますので、何卒、宜しくお願い申し上げます。

2 歯科用インプラントとは？

歯科用インプラントとは人工歯根のことです。天然歯（自分自身の歯）が何らかの理由で失われ、欠損部の修復が必要となった場合に顎の骨にインプラント（チタン製のネジ）を埋め込み、その上に冠をかぶせて、物を咬む機能や見た目を回復する方法がインプラント治療です（写真1）。



写真1 歯科インプラント
第一小臼歯（矢印）にインプラント治療がされた。

インプラント治療を行う場合、ブリッジのように隣の歯を削る必要はなく、またほとんどの場合入れ歯のように金属製のバネやプラスチック製の入れ歯本体は必要ありません。元々あった歯と同じ様に、無くなった部分を補う（補綴する）ことができます。なお、総入れ歯の場合などで、少数のインプラントを使用する場合には、入れ歯を支えて安定させるためにインプラントを埋め込むこともあります。

もちろん、全身状態、顎の骨の状態や費用の点ですべての患者様にインプラント治療ができるわけではありませんが、最初から諦める必要もないのです。

3 本院におけるインプラント治療の流れ

残念ながらインプラント治療には健康保険が使えません。従いまして、本院にいらっしゃった患者様に対して、インプラント治療部のスタッフがご説明申し上げ、インプラントに関するご相談をさせて頂く段階から自費の料金が発生いたしますのでご了承下さい。



写真2 症例検討会の一場面

インプラント植立のための診査、X線CT撮影後、インプラント症例検討会を行います。顎は最低でも幅6mm以上、高さ（太い神経や血管までの距離など）10mm以上の骨が必要ですので、これらのことを正確に調べるためにはCT撮影が必須です。

症例検討会では数十人が参加して、インプラント治療が可能かどうかをはじめ、その妥当性、具体的な診療計画、埋め込む部位、本数、長さなどを検討します。最終的に患者様にとって最適なインプラントをご提供するためには、場合によって部分的な骨移植や骨増生が検討されたりもします（写真2）。インプラントは歯が抜けたところに単純に埋め込めば良いわけではなく、それぞれの患者様のお口の中の状態をトータルに考えて行わなければなりません。そういった意味でもこの症例検討会は非常に重要です。

この症例検討会を経て実際のインプラント埋入手術が行われます。ほとんどの手術は静脈内鎮静法（静脈麻酔により不安など除去）下で行いますので、痛みなどの苦痛はありません。

3ヶ月間ほどオッセオインテグレーション（インプラントが骨に結合すること）のための治療期間が必要です。インプラント二次手術が必要なシステムもあります。仮のインプラント補綴後、最終補綴物を装着し、メンテナンスにより定期的な診査が重要です。

4 インプラント前処置としての骨増生

近年のインプラント治療の進歩の1つにトップ

ダウントリートメントによる骨増生（骨がない部分に骨を増やす）が挙げられます。骨があるところにインプラントするという発想から、インプラントが必要なところに骨を作るという発想への転換です。骨増生法としては、自家骨を用いる骨移植術が一般的であり、下顎の下顎枝部（おやしらず部）やオトガイ部（正中部）から骨を採取します。時に腸骨（腰の横の骨）採取や、骨延長術（特殊な装置を装着し骨を延ばす）も行われます。これらの手術は本学医歯学総合病院東病棟3階に短期入院していただいて、施行することもあります。骨が生着した後にインプラント治療が可能になります。

5 高度先進医療『インプラント義歯』

本院は平成16年2月より、特定承認保険医療機関の認定を受けており、インプラント義歯による治療が高度先進医療として認可されています。通常の入歯ではどうしても食事ができないと判断される場合に限って、インプラント治療前の治療費用の一部が保険適用となることがあります。すなわち、インプラント埋入前の検査、画像検査、骨移植などの前処置、入院費などに健康保険が適用されるようになっていきます。

高度先進医療としての認定基準は通常の義歯による口腔機能と形態の回復が困難な症例です。その認定根拠の内訳は高度顎堤欠損（骨がない）等で、悪性腫瘍、良性腫瘍（写真3）、嚢胞の術後、歯の先天性欠如症、顎変形症、外傷、これら以外の理由による高度の低歯槽堤症（骨が極端にやせている）、嘔吐反射による義歯適用不能例に限られています。

6 インプラント治療の適応症・禁忌症

1本だけ歯を失った場合から複数の歯を失った場合、あるいは全く歯が残っていない場合、いずれにおいてもインプラントによる治療は可能です。ただし、個々の患者様で判断は異なりますので一概には言えませんが、糖尿病や心疾患などの

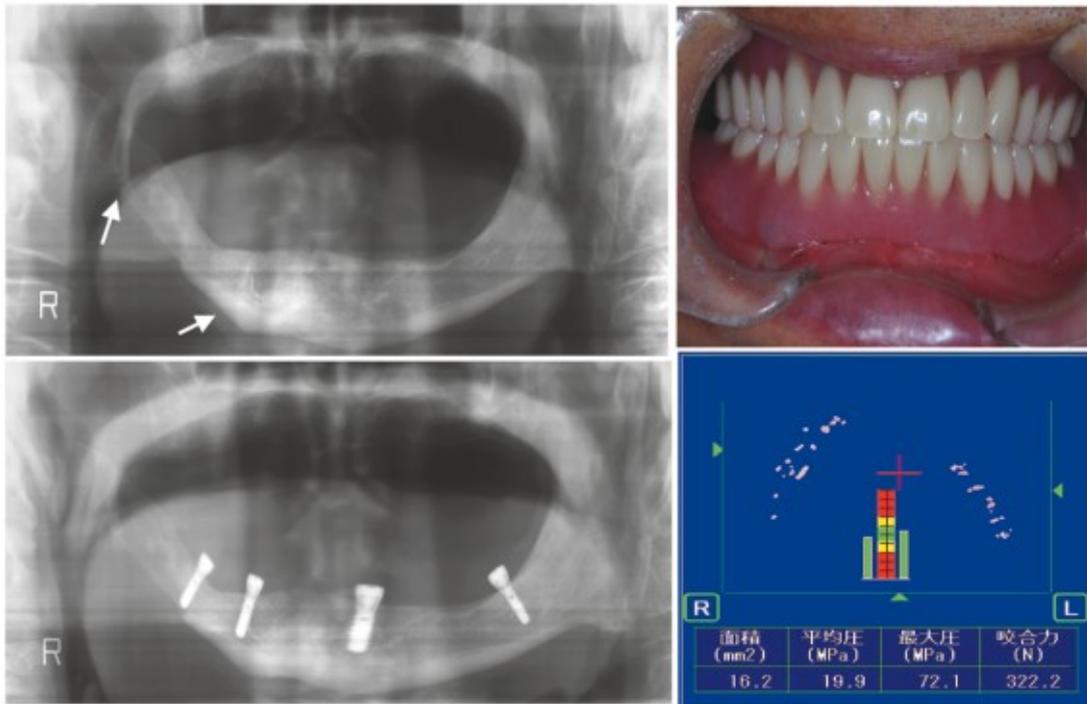


写真3 高度先進医療「インプラント義歯」
 右側下顎腫瘍の切除、腸骨移植後（腰の横の骨、矢印）の症例で、高度先進医療が認可され、インプラントを4本埋入した。インプラントに支持された総義歯を装着し、デンタルプレススケール®（右下）による咬合評価では高い咬合力が得られた。

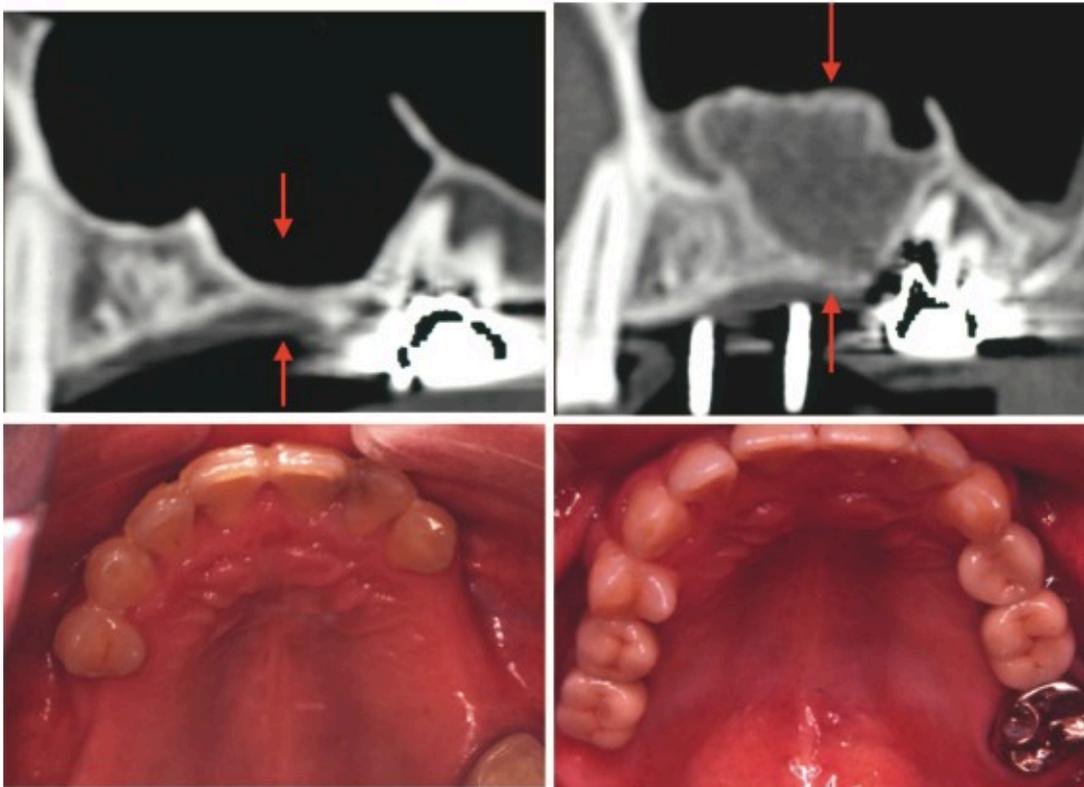


写真4 病診連携
 上顎骨の高さが不足しているため（矢印）、上顎洞への骨移植術を依頼された。術後、紹介元の開業歯科医院でインプラント埋入、治療が可能となった。

全身的な疾患がある場合や、特定の条件下では注意が必要になることがあります。

7 病診連携について

当治療部は大学病院にあって地域医療の中核となるべく努力するばかりではなく、先進的なインプラント治療にも取り組んでおります。しかし、それらには診療所の先生方のご協力も必要不可欠です。また、診療所の先生方のお役に立てる場面も多いと思っております。実際、CTによる画像診断依頼をはじめ、インプラント前処置としての骨移植、上顎骨の高さを増すための上顎洞底挙手術(写真4)、インプラントの埋入のみを紹介いただく症例もあります。特に、骨移植などの骨増生はインプラント治療の適応拡大とともに日常の歯科臨床においてもますますその必要性が高まりつつあると思われまます。引き続きご紹介をいただければ幸いです。

なお、インプラント治療の成功率はいずれも約95%とされていますが、インプラントによる知覚異常、インプラント周囲炎、インプラントによる上顎洞炎などが起こる可能性は否定できません。これらのトラブルにつきましても下記のスタッフに気軽にご相談、ご紹介いただければ幸甚に存じます。

8 最後に

本院では独自のインプラント指導医、認定医システムを構築しています。本院の認定医育成コースの内容は取得希望者による症例検討、症例報告

の実施や、学外講師によるインプラントセミナーへの参加などを含みます。今のところ学内スタッフのみが対象ですが、将来的には学外の希望者にもコースを設けたいと考えています。このシステムを通して、少しでも質の高いインプラント治療を提供できるよう努力をして参ります。また、今後さらに病診連携を密にし、歯科外来手術センターにおける日帰り手術やオープンホスピタルなども視野に入れていきたいと思っております。

インプラント治療部はまだまだ設立されて間もない組織です。スタッフ一同、さらに良いインプラント治療をご提供できるよう、努力をして参りますので、諸先輩、諸兄には益々のご協力、ご鞭撻のほどこの場をお借りいたしましてお願い申し上げます。

9 診療体制

インプラント治療部スタッフ：

部長（魚島勝美）、副部長（星名秀行、藤井規孝）、
部員（荒井良明、久保田健彦、小林正治、櫻井直樹、田中 裕、田口裕哉、中舘正芳）

診療日時：月曜日～金曜日、午前9時～12時、
午後1時～3時

診療室：インプラント治療部（3階）

10 連絡先

インプラント治療部

外 来 TEL：025-227-0385

研究室 TEL：025-227-0384

星名秀行 hoshina@dent.niigata-u.ac.jp

歯科外来システム再編成に至るまで

歯科外来看護師長 中 俣 文 子



平成18年4月に歯科外来システムの再編がスタートしてから、早いもので半年が過ぎようとしています。

始まりは、平成16年の病院計画においてICUの増床計画に伴う看護師の配置の検討がなされました。歯科外来は平成16年の業務量調査の結果より、看護職でなくてもよい業務内容の多さから、他職種への転換計画が出されていたこともあり、平成17年10月に1名、平成18年4月に6名の看護師の削減が言い渡されました。その結果、医科への配置換えが5名、退職者2名の7名が減になり総数18名から11名になりました。

しかし、我々は人事の結果が出る前から、歯科外来看護師全員が一丸となって現状の問題や効率のよい人員配置を念頭に置き、歯科外来システム再編に向けプロジェクトを立ち上げ、取り組まなければなりませんでした。

取り組みについて

1. 器具の中央化について

- ・各科で洗浄メンテナンスしている器械器具類を中央化に向けて内容の統一を行う。
- ・サプライセンターに移行できるように調整し開始できるようにする。
- ・歯科医師、歯科衛生士、看護師の中央化ワーキンググループを立ち上げ、意思統一を図る。作業課題が山積みで綿密な計画、詳細な検討を行っても二転三転してしまい、取り組みに費やす時間が多く誰もが必死の思いで頑張りました。さらに限られた予算では、再生利用を余儀なくされました。なかでも点滴台の再利用は大

変で、移動や洗浄、整備に思ったより時間がかかりました。ケース類の見積もりも予算に限界があり業者との交渉に当たってくれた看護師長は非常に大変でした。

また、年度末の忙しい日程の中、歯科手術室の跡地で点滴台や引出しの整備等に、夜遅くまで時間を費やしました。この時は、物流センターのスタッフの皆様にも応援していただきとても助かりました。

今現在、だいぶ軌道に乗ってきてはいますが、とにかく診療に支障がないように配慮していくことが必要条件であります。

2. 外注職員の導入について

- ・用度係と看護部の打ち合わせにより、清掃業務とサプライ6時間パートの導入の承諾を得ることができ、それに伴いマニュアルを作成し、受け入れを準備しました。どちらもスムーズに導入でき現在に至ります。

3. 看護業務を整備し標準化するために

- ・現状の歯科外来の問題について検討し、看護師ができる看護業務を上げ、具体的に計画立案していきました。看護師スタッフの意識の違いやトレーニングに多少の違いはありますが、外来スクリーニングに関しては、ほぼ全科で実践しています。

4. スタッフのローテーションについて

- ・各科の看護業務が統一されることで担当科のみならず歯科外来全体でのスタッフのローテーションが可能となることを目的に取り組みました。
- ・平成17年11月～18年3月に、各科の1週間ごとの研修をまず副師長から開始し、スタッフ3名については、人事異動発表後に開始しま

した。

- ・研修期間を終えて、いよいよ4月17日から開始の予定でしたが、器具類の中央化が軌道に乗らず、5月の連休明けから開始となりました。
- ・1週間ごとに変わることに對して、看護師自身はもちろんのこと歯科医師も戸惑いやストレスがあったと思われます。しかし、少ない人数で業務をこなすにはやむをえない方法であり、もうしばらく時間を見ていただきたいと思います。
- ・毎月定例の外来相談会では全員の意見を聞いて、より良い方向に導いていきたいと思っています。

5. 歯科衛生士との協力体制

- ・平成18年4月より看護師の人数が減り、歯科衛生士と共に協力し合って外来運営を行う必要があるため、意見交換や業務について話し合いをすることにしました。

第1回の話し合いを2月に行い6月まで5回話し合いをしましたが外来の新体制も軌道に乗り大きな問題もないため、次回は4ヶ月後

に開催することにしました。ただし早急に話し合いが必要な場合は、臨時で開催することになりました。

6. 今後の課題

大学病院における患者様の特殊性としては、全身疾患を有している患者様が多く、他院での治療が困難なために受診するということが多いのが現状です。そのため不安をもちながら治療に望むことが多いため、心身ともに患者様を理解し看護の必要性のある患者様には全人的に把握し看護を展開していかなければなりません。

また、各診療科の特殊性を理解したうえで、看護業務・診療補助業務を行っていく必要があります。しかし何よりも大切なことは、患者様が安全に安心して治療が受けられ、「大学病院に受診してよかった」と言っていただけることだと思います。

それには、医療従事者がお互いに連携し、患者様中心の良質で安全な歯科治療に当たることではないでしょうか。私達歯科外来看護師は、患者様の口腔内を理解した上で、診療補助を行い、必要とする患者様の情報を的確にキャッチし、提供できるように日々、頑張っていきたいと思っています。



野原廣美先生を偲ぶ

人生の師匠 野原廣美先生を悼む

8期生 柳村光寛



退官記念祝賀会
当日の野原先生

「先生ご無沙汰しております。お元気ですか」
「いやーちょっと具合が悪くてねー」
「どうなさったんですか」
「胃の具合がちょっと」

年3回、野原先生を囲む会のご案内のお電話をさしあげたのが、昨年の9月でした。いつもの会を今回は「温泉でもいかがでしょうか」と電話した受話器の向こうから聞こえてきたのはとても信じられない内容でした。

私が先生を知ったのは33年前、学1の生化学の講義でありました。先生の講義は川の流れのように、よどみなくとても静かな雰囲気です。定期テスト前には膨大な分量となったものでした。そしてテストのヤマを見事にはずすのが先生の得意技で20種類の必須アミノ酸の構造式を徹夜で記憶したのも昨日の事のように。

卒業後、第二保存大学院に所属し、本格的に生化学教室にお世話になる事となりました。先生には4年間毎日、直接ご指導いただき、無知な私に研究することの意義と厳しさ、楽しさを教えていただきました。その結果を英文誌に掲載するにあたり全面的に加筆していただきました。今は亡き飯塚幸策先生と二王子岳に残雪深い5月に3人で

登ったことがありました。「君は独身だから昼食の準備をしてきたのでよかったらどうかね」とおっしゃってください、御心遣いにびっくりし感動したものです。その後も、8年間にわたり臨床と基礎を往復しながら大変お世話になりました。ご自宅にも何度かご招待いただき、私にとってこの時期は人生で最も充実していたように思います。

開業後も15年余り、かつて先生に大学院で御指導いただいた、長岡の山下智先生、上越の五十嵐文雄先生と、山崎和久教授を加えて変わらないおつきあいをさせていただきました。そのたびに、先生ほど若い世代に御自身の体験を伝える、語り部としてふさわしい方はいらっやらないと思われました。先生のお話は事実のほかに余計なものは加えず本質を突くもので、人間味に溢れた内容でとても楽しい雰囲気の中杯を重ねたものでした。若い時分には東大でロケットの研究をしたかったと話され、御自身の体験から戦争のような愚かなことは二度としてはならないと強調されておりました。新潟医科大時代は中距離選手として陸上で活躍され、退官後も埼玉より毎週、情熱をもって若者に新潟と村上で医学の講義をつい昨年末まで続けていただきました。御息様は医師として活躍されお嬢様、奥様に囲まれお元気であられた先生が病に倒れるなどとは思ってもみませんでした。電話の後は診療も手につかず自身の無力を感じたものでした。御見舞にお伺いしても、奥様をはじめとてもお気をつかいいただき泰然と対応されておられ、帰り際に右手を軽く上げ見送っていただいた姿が目に残っています。

御健在でいつまでも御指導いただきたかったのに今はそれもないません。優しくした野原先生、人生の師匠であった野原先生、いつの日か皆で再会できることを念じております。ありがとうございました。合掌

野原廣美先生を偲んで

9期生 山下 智

昨年の秋ごろからだったでしょうか。毎年必ず2～3回は先生を囲んで大好きな酒を数人で酌み交わし人生を語り合った会が、突如中断してしまいました。検査入院で胃がんと診断を受け、手術を受けなければならないとのことでした。更に先生は学生の頃から陸上部で長距離走を得意とし、これといった大病もせず体力に自信があると伺っておりましたので、4月20日に御逝去されたとの報を受けたときは思わず耳を疑いました。謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

先生は私の父と同年齢で、出会った頃はいつもお会いする度に私を息子のように、時には厳しく、時にはやさしく可愛がってくださいました。「山下君のお父さんはうらやましいね。僕の息子なんかまだ小さくてね。成人式の頃には僕はもう定年だよ。」といつも嘆いておられたことが印象的でした。

私は、昭和54年に卒業と同時に大学院（歯周治療学）に入り、基礎研究のため口腔生化学教室で4年間（旧第2保存学教室より里子に出され）お世話になりました。（蛇足ですが、8期生の柳村先生は私の1年前に里子に出されました）その時の指導教授が野原先生でしたが、私自身、学生時代の講義でのイメージしかありませんでしたので、不安を抱いての生化学教室入りだったことを覚えています。しかしこれも一瞬の杞憂に終わり、野原先生を始め個性的な口腔生化学教室のスタッフの人情に触れ、厳しいながらも生涯忘れえぬ貴重な体験をさせていただきました。ただ、地道にコツコツと何回もやり直しながら根気強くデータをとってゆく基礎的研究は、私の苦手とする分野でもありました。ある時、資料の分析のためカラムでの抽出を途中で投げ出し、帰ってからゆっくりやろうと柏崎の国立療養所にアルバイトに行ったときのことで。夕刻大学に戻り、いざ測定の続きに取り掛かろうと7階にたどり着いたそのときの光景は今も忘れられません。これから私が測定をしようとする場所には既に白衣を着た野原先生

の後姿がありました。先生は、私に代わって1本1本試験管の検体をスペクトロフォトメーターで測定されていたのです。一介の院生たるそれも他の教室からの里子である私ごときのために、教授自らが手を差し伸べてくれたことへの感謝と畏敬の念で、一瞬胸が詰り涙が込み上げてきたそのときの感動は今でも忘れられません。また先生は御多忙にもかかわらず、時として私の実験中に「どうだね？」と声をかけてくださることがよくありました。いい加減な回答をすると、「えっ??」と独特の一寸心臓にドキッとさせる御返事が返ってきたこともありましたが、実験が滞ったり暗礁に乗り上げたときは、当意即妙、実に適切な打開策で私を助けてくださいました。大学院を修了後は、生化学に顔を出す機会もやや減りましたが、生化学で実験した一連の研究の集大成でもある論文をJ.Periodontologyに投稿する際、再び先生の薫陶を受けました。先生と苦労に苦労を重ね、ようやくアクセプトされた時のあの感動はいまでも忘れません。「山下君よかったねー。おめでとう」先生は自分のことのように喜んでくれました。

泰然自若なお人柄である先生は、パニックになった私にいつも冷静さを失わないよう指導してくださいました。25年以上お付き合いさせていただきましたが、私は先生の怒った姿を見たことがありません。先日8月13日の新盆に柳村先生と埼玉県の上尾を訪れ、御家族の方とお話をした際にも、同様と伺いました。決して自分を見失わない冷静沈着な先生のお人柄が偲ばれます。趣味も広く、野球やプロレスなどのスポーツや車の話題で盛り上がったこと、また酒の席では終始陽気に振舞われ、興に乗ると少々毒舌なせりふも飛び出し我々を楽しませてくれたことも今は懐かしく思います。

野原先生、長い間本当にお世話になりました。生まれ故郷の埼玉の地でどうぞ安らかに眠りください。合掌。

野原廣美先生を悼む

口腔生命科学系列・教授 山崎和久
(口腔生命福祉学科)

平成18年4月20日、私たち後輩に多くのものを残して、野原先生が79歳の生涯を閉じられました。

野原先生は昭和26年、新潟大学医学部の前身、新潟医科大学をご卒業の後、新潟大学医学部生化学講座を経て、昭和41年口腔生化学講座（当時）の助教授として歯学部に着任され、翌42年教授に昇任されました。以来平成4年に定年退官されるまで学生教育と研究に情熱を傾けて来られました。

私は昭和56年に大学院に入学し、歯周病学を専攻しましたが、研究は4年間口腔生化学講座で野原先生の指導の下、多型核白血球の産生する酵素と歯周組織の炎症の関係について調べました。先生はお忙しい中、歯科保存学第二講座の先輩大学院生であった柳村光寛先生、山下智先生（現長岡市開業）とともに実験機会の使い方や実験記録の仕方などをはじめとほんとうに親身の指導をしていただきました。ある日、アルバイトで柏崎に行く前、朝6時に実験のセットをして出掛け、夕方帰ってくると、野原先生が測定をして、おまけにグラフまで書いてくれていたことがあり、戻るとすぐ結果の検討をすることができました。データのディスカッションでは問題点と対策法そして次の課題はどうするかなど細かい指導を受け、サイエンスはこういう風に進めるのかと納得すると同時に科学者としての野原先生に感服していました。データを持って教授室に訪ねて行くと、先生は必ずと言っていいほどいつも学術雑誌を読んでいて参考になる文献を渡してくれるなど、常に私たちの研究を考えていてくれたように思います。時に厳しく、時に父親の様な優しさで接してくれた野原先生と生化学講座の先生方そして先輩大学院生のおかげで当時、外来診療とアルバイトをする日以外のほとんどの時間を口腔生化学で過ごし、それこそ盆も正月も、昼も夜もないような

生活をしていましたが、つらいと思ったことは一度もありませんでした。

野原先生はまた、愛煙家のうえにお酒が大好きで、酔っぱらった先生は豪放磊落でそれはそれで大変魅力的な姿を見せてくれました。それまで酒に弱く、缶ビール1本も飲めなかった私を酒のうまさ分かる人間に変えてくれたのも野原先生でした。毎年お正月には先輩大学院生と一緒にご自宅に招いていただいて深夜までごちそうになり、足もともおぼつかない状態で家に帰ったことを思い出します。

定年退官されたあとも生化学講座でお世話になったOBが集まって野原先生を囲む会を開催し、時々参加させていただいておりましたが、ここ1-2年はめっきりお酒の量も減り、弱くなったなと思っていましたが、今から思うと病魔が徐々にむしばんでいたのかもしれない。昨年（平成17年）の秋ごろに胃ガンの手術を受けられ、その後お見舞いに伺った折には予想したよりもお元気そうでした。安心したのもつかの間、本当に残念なことになってしまいました。

先生から学んだサイエンスに対する思いは必ず後輩に伝えていきます。野原先生安らかにお眠りください。



ありし日の野原先生と診療室にて

素 顔 拝 見



口腔生命科学系列・助教授
(口腔生命福祉学科)

黒川 孝 一

この4月1日付で助教授を拝命し、厚生労働省から赴任致しました黒川と申します。めまぐるしく変わる天候に驚きながらも、徐々に雨の日の外出のコツがわかってきたような気がします。大学での生活は約7年ぶりとなります。その間に、OSCEやCBTなど大きく教育改革が行われてきたことに驚きを隠せません。白衣を着用しない生活を7年以上送っていたため、白衣は持ってありますが、実習など必要な時以外、着用していません。そのため、口腔生命の学生達は私が歯科医師以外の職種であると最近まで誤解していたようです。

私は、昭和38年に東京で生まれ、平成元年に神奈川歯科大学を卒業し、卒直後から同大学の補綴（総義歯）に助手として採用される機会に恵まれました。当時は臨床の基礎やラボワークを中心に諸先輩方から鍛えられました。

パソコンは道具であるというのが持論ですが、初期のMacintoshを手に入れ、製図ソフトでロトリングペンで引いた製図図面と同じものがプリンタから打ち出されたときに、やっと使える道具を手にしたという感動は忘れられません。

多少の知識からPCのトラブル相談を受ける機会が多くありました。そのため、無茶な相談に閉口することもありましたが、人に教えることは自分自身が一番勉強になるため、今日まで、他人からのPC相談は断らないように心がけています。

インターネットの黎明期、UNIXがプロバイダのシステムの中心であることがわかったと、UNIX

の世界に引き込まれていきました。Sunのワークステーションの中古を手に入れたり、IBM互換機をUNIXのサーバにしたりと全てが新鮮に感じた時期でした。特にユーザグループで合宿旅行やミーティング後の飲み会に参加し、自分よりもスキルのある先人から直に学んだ様々なノウハウやセキュリティーポリシーが、その後の自分の考え方の根底にあり活かされているように思います。

平成11年の1月に、厚生省内に医薬品と医療機器を審査するために設立された国立医薬品食品衛生研究所医薬品医療機器審査センターに審査官として3年3ヶ月ほど勤務致しました。多くの薬剤師の人たちが勤務するなか、医師や歯科医師は少数派でしたが、毎日議論をする中で、様々なバックグラウンドを持つ人々と交流が出来ました。海外から審査の遅さを指摘される分野でもありましたので、審査の事務処理時間を管理するタイムクロックデータベースを構築し、業務システム開発のおもしろさを味わいました。

平成14年から4年間は埼玉県庁に管理職として赴任しました。歯科の専門職として歯科保健行政を担当する他、老人保健、介護予防や難病などの特殊疾病対策を担当しました。埼玉県の歯科保健は行政と歯科医師会の2人3脚で発展してきたように思います。熱心な歯科医師会の先生方により、毎年多くの成果をあげることが出来ました。そのためでしょうか、埼玉県は全国に4人いる歯科医師出身の国会議員のうち3人が埼玉の選挙区である特別な地域にもなりました。私が県庁や県議会の方々から可愛がって頂いたのも、そのような歯科保健の環境があったからなのかもしれません。

埼玉県庁では残業時間が月200時間を超える忙しい時期もありましたが、趣味を楽しむ機会もありました。学生時代の想いが蘇り、1970年代の楽器や音響器材をネットオークションで買いあさったりもしました。家にはRhodesやCPとい

う電気仕掛けのピアノやミキサーなどがゴロゴロしており、いづれ整理をしなければと思っているところです。

新潟市内は平地が多く、天気良ければ自転車でどこにでも行くことが出来、ありがたいです。このような環境を堪能しつつ、皆様のお役に立てるような仕事をさせていただけるよう努めて参りたいと思いますのでよろしくお願いたします。

*

さらにあれから10年



口腔生命科学系列・助教授
(歯周診断・再建学分野)

奥田 一博

「素顔拝見」の原稿依頼がありました。たしか昔に書いた記憶があるので、歯学部ニュースのライブラリーを探っていたら、ありました！平成8年第1号(通算84号)p12-13「不惑の年を迎えて」としっかり写真つきで書いています。あれから早いもので10年が経過しました。この10年は、不惑どころか、もがき苦しみそして迷走し続けた期間でした。今回はその延長上にいる現在の自分をとりまいている状況について雑感を述べたいと思います。言うまでも無く、我々の業務は教育、診療、研究の3本柱をいかにバランスよく推進していくかにつきます。私は、これらの3本がばらばらではなく、またどれか一本が突出している訳でもなくすべてをリンクさせるところに絶えず意識を注いでいます。そうしないと私の能力では限られた時間内にすべてを行おうとすると、破綻を来してしまうからです。

私の頭に常にあるのは、患者様あつての歯科医療、歯学研究、学生教育という柱です。「すべては患者様のために」この点だけは絶対に外すことができないのです。フィールドを歯周病診療室におき、そこで治療に参加される患者様を通じてすべてを学ばせていただくというスタンスをとってい

ます。歯周炎も、う蝕も予防可能な疾患ですが、不幸にも歯周炎に罹患された患者様からの破壊された組織を再生させて欲しいという切実な希望に答えるために、私はこの10年の間、歯周組織再生療法に目を向けてきました。エナメル基質由来タンパク(エムドゲイン®)の無作為比較臨床研究を展開して、日本発のデータを発表しました。続いて、多血小板血漿とハイドロキシアパタイト顆粒との混合物の効果を検討しました。何れもある程度の効果はみられたのですが、骨再生については不十分な成績でした。そのころ、組織再生には、(幹)細胞と細胞の足場と増殖因子が必要でそれに適切な環境と時間が加わることが必要であるという概念が確立されてきました。骨原性の細胞をどこから採取するべきか思案に暮れていたところ、名古屋大学の上田教授およびジャパン・テックエンジニアリングの畠部長より、骨膜培養についての知見を教授していただき、「これだ！」とひらめきました。患者様での臨床応用を実現するために歯学部倫理委員会に申請して承認を得て、昨年7月から自己培養骨膜+多血小板血漿+ハイドロキシアパタイト顆粒の再生治療を展開しています。これまで10例ほどの治療が終わり、有害事象などは一切無く良好な経過をたどっています。さらに、この治療法を広く発展させるために新潟大学医歯学総合病院生命科学医療センターの中田教授のご指導のもと、細胞プロセッシングルームにおいて専属の“培養士”のもとで細胞培養が行われるように今年の11月を目途に準備を進めています。また歯科基礎移植・再生学分野の川瀬助教授のご指導のもと、これらの培養技術を一般開業医へ普及すべく簡易細胞培養装置の開発にも目を向けています。将来的には、これまでの人工骨代替物では無い患者様自身から採取した細胞を利用した培養骨を生体外で作成し、それを臨床応用するカスタムメイド治療の実現を見据えています。これらを教育という点にリンクさせるには、この考え方を歯学部4年生の講義、実習で披露させていただき、この現場を歯学部5、6年生には見学していただけるよう機会をつくってまいりますし、卒後の研修医や大学院生には実際に治療に参加してもらっています。最近は大隅に再生

医療ということで体のいくつかの部位で行われている新しい治療法がたびたび報道されていますので、歯科の分野でもこういう方法があるんですよとお話すると多くの患者様が関心を示してください。歯周病で歯を失っても生命が脅かされることは殆どの場合ありませんが、生活のQOLには重大な影響が及びます。人生の質を高めていただくためには、歯周病を中心とする歯の病気で悩んでいただきたくありません。患者様にはできるだけ長く歯を保存していただきたい、今後とも、この1点に徹底的にこだわっていかうと思っています。

＊

口腔生命科学系列・助教授
(顎顔面口腔外科学分野)

飯田明彦



顎顔面口腔外科学分野の飯田明彦と申します。新潟大学歯学部に入學させていただいたのが昭和57年で、それ以降現在に至るまでずっとお世話になっておりますので、本学部との関わりはかれこれ四半世紀になります。「素顔拝見」と言われても、もう何もお見せするものはないように思うのですが、趣味や休日の過ごし方などを書いてほしいとの依頼を受けましたので、筆を執ることにしました。

生まれてから高校卒業までは栃木県で育ちましたが、新潟市出身の妻と結婚し、新潟市内の小学校に通う2人の女兒がおりますので、すっかり新潟の人になっています。大学に入學したての頃は良く聞き取れなかったこともあった新潟弁もすっ

かり耳になじみ、患者様に「おめさん、なじらね？」などと声をかけることも、違和感がなくなってきています。

休日の過ごし方といっても、病棟を担当する半年間は、土日どちらかに出勤しますし、第3土日は社会保険診療報酬支払基金でレセプトの審査をします。週末の日直、宿直などもありますので、完全にオフになる週末はそうありません。体を動かすことが好きなことと、少し放置するとすぐにはね上がる中性脂肪値と体重の維持のためにも運動は不可欠なのですが、学生時代やっていたバレーボールなどの球技は、チームメイトとの日程調整が出来にくいので最近お休みしています。そのかわりといっでは何ですが、単独行動が可能で、時間が比較的自由になるスポーツをしています。

まず、雪の季節以外はランニングです。平日は週に2日ほどジムに行って5kmくらいずつ走ります。週末で日中に時間がとれるときは、屋外を10kmくらい走ります。スピードは時速10~12kmくらいを目安にしていますので、30分~1時間、シャワーの時間を入れても1時間~1時間半あれば実行可能です。しかし、ただ目標もなく走っているだけでは飽きてしまうので、新潟県内で開かれるランニングの大会にはできるだけ参加しています。朝早く起きて、電車、バスなど公共の交通機関を使って会場に向かいます。ハーフマラソン以下であれば、できるだけ距離の長い種目に出場しますが、大会となると普段よりもペースが上がりますし、距離も長くなるので大会前は深酒などを慎重体調維持に努めるようになります。スタート時刻は9時頃が多いので、ハーフマラソンを走ってもお昼時には風呂に入ってさっぱりした体になっています。それから、各地の名産品などをつまみにビールを飲んで帰ってきます。これが、公共の交通機関を利用する理由です。会場にもよりますが、だいたい明るうちに新潟に到着しますので、買い物をするなど、もう1つ何かをすることが可能です。夕食後、疲れた体を横たえればすぐに眠りに就くことができますので、翌日以降、筋肉痛と日焼け以外はほぼ平常通りの仕事に戻れます。

さらに、年に1~2回、県外への遠征も行いま

す。思い出深いのは、フルマラソンを走破したつくばマラソンと長野マラソン、東京国際マラソンのラスト10kmを走った東京シティロードレースです。フルマラソンでは、走りきった自分に感動します(写真)。さらに長野マラソンでは、コースの途中で長野オリンピックの施設を見て回ることが可能でしたし、東京シティロードレースは日比谷公園前をスタートし、東京ドームのわきを抜け、国立競技場にゴールするといった具合に、このような大会でもないといけない公道、施設を堂々と走破することが出来るのも魅力です。

雪の季節はスキーをします。最近では娘たちも大きくなってきたので、家族で出かけることも増えてきましたが、単独行動もまれではありません。単独行動の場合、遠くのスキー場に行くわけではなく、近場の胎内スキー場などに良く出かけます。朝早く出発し、誰もすべっていないゲレンデを午前券で目一杯すべり、温泉、蕎麦と流れていきます。外は寒いのですが、温泉で火照ったからだには、ざる蕎麦が良いようです。冬の日も短くても、明るいうちに到着できるのはランニングと一緒にです。

こうやって書いてみますと一年中、自然の中で季節を感じながら体を動かし、食事を楽しみ、ぐっすり眠るといった基本路線が私の余暇の時間に流れているようです。ランニングもスキーも以前は、「何も好きこのんでつらい思いをしなくても……」とか「冬のさなかにわざわざ危険な思いをして出かけなくても……」と思って、むしろ敬遠していたものですが、やってみるとだんだん楽しくなってきます。何より、体力的にはピークを過ぎてしまっているこの身体で、記録が伸びたり、新たなことができるようになっていくことが魅力です。何でも挑戦してみるのが大切なようです。このような楽しみは、世の中が平和で、自分が健康でないとできないことですので、そういった基本的なニーズが満たされていることに対し感謝する気持ちを忘れてはならないと感じるとともに、患者様の診察をするときも、患者様の病気を治すということだけではなく、患者様が病気の恐怖から解き放たれて、より高いニーズに向けて気持ちを高めることができるようお手伝いできれば良

いなと思う今日この頃です。

写真は2004年つくばマラソン完走後のスナップ。自己ベスト更新です。中越地震のため新幹線が不通で、往復は自家用車を運転。このあと自宅玄関まで遠いゴールでした。

✧



医歯学総合病院・助手
(顎顔面外科診療室)

児玉泰光

こんにちは、顎顔面口腔外科の児玉です。「素顔拝見」ということですので、自己紹介や趣味、今やっている研究について少しお話ししたいと思います。

私は秋田出身の32歳、既婚、子供は未、新潟に来て14年目になります。平成10年に新潟大学を卒業し、同年4月に当時の第二口腔外科に入局させて頂きました。1年目は、外来、病棟、手術室の研修を4ヶ月づつラウンドし、その後は医学部第1生化学教室で癌感受性遺伝子の研究を行いました。大学院修了後は、研究生、医員を経て平成17年8月から助手として勤務させて頂いております。

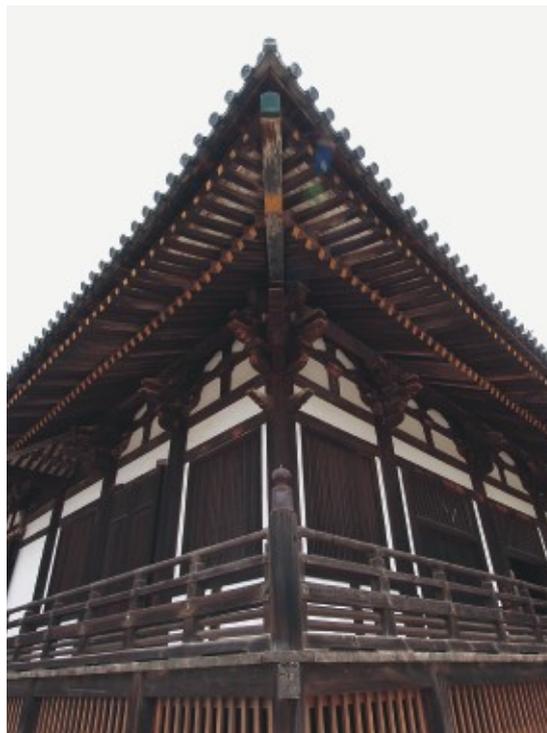
趣味はスポーツと庭いじり、それとお酒を楽しく飲む事です。春夏秋はテニス、冬はスキー、昨年夏からゴルフを始めました。テニス・スキー・ゴルフと揃うと聞こえは良いのですが、ことスポーツに関しては努力を惜しまず妥協を許さない体育会の流れが強く、今でも常に必死です。全学テニス部の頃は「実力は練習の質、自信は練習の量」と言い聞かされ、試合で負ける人＝努力せず妥協する人、だから練習の毎日でした。実力至上主義、マナー厳守でコートは神聖な所、試合になれば嫌な緊張感に襲われます。あの頃は当たり前でしたが、今思うと少し恥ずかしくなります。現在は健康増進と体力維持、その後のビールを目的に、友人や後輩達と和気藹々楽しんでます。他方、スキーとゴルフは自然を相手にしている点、結果が

全て自己責任である点、昼休みに飲むお酒の旨さ、俗世からの逃避など……、似ている点がたくさんあります。当面の目標は、ゴルフは90を切る事、スキーは準指導員合格です。庭いじりは家庭菜園をやる嫁の影響で始め、以来、はまっています。この話は長くなるので割愛させていただきます。お酒は大好きですがここ数年は弱気で、二日酔怖さに量少なめです。

普通の大学では、外来・病棟・手術室を往復しながら、時間を見つけていくつかの基礎および臨床研究を行っています。現在、力を入れている研究は、マウス口唇口蓋裂感受性遺伝子の検索です。口唇口蓋裂発症は遺伝要因・環境要因の単独または相互作用と考えられ、患者様には現在はそのように説明しています。けれども研究を進めるうちに、他の多因子遺伝子疾患（高血圧や糖尿病）と同じように、遺伝子多型による可能性が示唆されてきました。病因論に関する新しい知見なので、

新鮮な気持ちで研究させて頂いております。今後、臨床で患者様やその御家族に正確な説明をしてゆくためにも、慎重に結果を出したいと思っています。

最近ではEBMやRCTの結果から、これまでの治療方針が論理的に修正され、効率の良い医療サービスが提供される傾向にあります。しかし、実際には経験的な部分と科学的な部分とが複雑に絡み合った所も多く、口腔外科の分野でも一筋縄には行きません。これまでの実績を尊重しながら新しいエビデンスを組み込めるよう努めておりますが、高木教授をはじめ周りのスタッフにはいつも迷惑をかけるばかりで本当に恐縮しきりです。でも、こうした環境で臨床や研究ができる喜びを大切に、バランスのとれた口腔外科医になれるよう頑張りたいと思っています。このような私ですが、今後とも宜しくお願いいたします。



バッファロー、ポスドク生活

医歯学総合病院・助手
(噛み合わせ診療科 歯周病診療室) 両 角 俊 哉

2004年6月から2006年3月までの1年10ヶ月間、ニューヨーク州立大学バッファロー校歯学部口腔生物学講座へポスドク（博士研究員）として赴任しておりました。帰国後すでに半年近くが経ち、こちらの生活や仕事にも慣れてきた最近、やけにバッファローでの生活を懐かしく思い出します。ふと目を閉じると、ラボでよく流れていたボストン・ポップスのメロディーや黄昏時のエリー湖上に広がる眩しいばかりの夕陽、真冬のハード・フリーズによる凍てつくような頬の痛みなど、数々の光景や思い出が蘇ってきます。そして、今にもドアの向こうからアーニーがお得意の口笛を吹きながら、“Hey, Toshi!”と入ってくるような錯覚さえ……などという思い出に浸れるのもほんの一瞬、今は診療や研究に追われる毎日で、昨日のこのように思い出することもあれば、遠い過去の出来事のように感じる時もあります。

留学への思い

私は大学院修了後の1年間は研究生として、その後の1年は医員として日中は外来で忙しくしていたため、研究時間には平日の夕方以降や休日を当てていました。私は臨床に対してもその面白さから意欲的に取り組んでおりましたが、一方で実験のためのまとまった時間がとれないことにある種のもどかしさを感じていました。そして遂には、アメリカで思う存分に研究をやってみたいという気持ちを抑えることができず、サンフランシスコで開催されていた米国歯周病学会において、我々の講座と共同研究をしていたNY州立大学バッファロー校のDr. Gencoに半ば直訴のように受け入れをお願いしました。ジェンコ教授は口腔生物学講座のチェアー（当時）であり、Journal of Periodontologyのエディターも務める



歯周病学界における世界的重鎮です。その後、吉江教授に非常に強いプッシュをして頂いたおかげで、ジェンコ教授からProf. De Nardinを紹介され、その半年後に渡米しました。

バッファロー・シティ

アメリカ北東部に位置するバッファロー市はNYシティから西へ飛行機で1時間程の距離にあり、それゆえ同じNY州とはいっても新潟一大阪間ぐらい離れています。五大湖の1つであるエリー湖の東端に位置し、それとオンタリオ湖とを結ぶナイアガラ・リバーが市中を流れる自然豊かな街です。緯度は北海道の帯広や釧路とほぼ同じであり、冬はとてつもないのですが、梅雨がない6月はまさにベストシーズンです。公園や街路の木々は緑鮮やかに燃え盛り、ナイアガラの滝へつながる川の流れるには躍動感が溢れています。私が赴任した5月末はその『短い最高の季節』のスタートであり、人々のみならず昆虫や建物までもが生き生きとしているかのようで、感激の内に新生活が始まったことを思い出します。

また、この地域はカナダとの国境の街でもあり、車でナイアガラの滝まで20分、トロントまでへは



写真1 ナイアガラの滝（正確には2つある内のカナダ滝）。

2時間と一大観光拠点地でもあります。その名の通り野牛=バッファローは市のシンボルであり、街路や公的機関内などあらゆる場所で多彩なバッファロー像を目にすることができます。かつては米英戦争の拠点もしくはカナダ貿易の基地として栄え、20世紀初頭は全米でも10の指に入る主要都市でしたが、現在は人口約30万人の小都市に落ち着いています。しかしながら、日本やアメリカの大都市に比べれば物価は安く、緑も多く、腰を据えて研究するには中々良い環境でした。

UB

前身の私立医科大学時から数えると150年以上の歴史を持つこの大学は、略して University at Buffalo、地元では親しみを込めて UB と呼ばれています。ノースとサウスの2つのキャンパスがあり、歯学部は医学部や看護学部、公衆衛生



写真3 キャンパス内の校舎。



写真2 オベ着を着た矯正中のバッファロー。

健康学部、建築学部などと共にサウス・キャンパス内にあります。近代的なノースに対して、サウス・キャンパスを歩いて目立つのは一面に広がる芝生と木々よる豊かな緑であり、その中に佇むように存在するクラシックな石造りの校舎とパティオはいかにも東海岸といった雰囲気です（実際にはもうちょっと内陸ですが）。しかし、建物の内部は一部の装飾画を残していずれも最新の研究設備を有する姿に改装されており、新旧の共存という精神がそこに表れているように思えます。

ラボ

そのサウス・キャンパスの住人である Department of Oral Biology は約20のラボから成る大講座の呼称です。その内の約8割は



写真4 我々の講座が入居するフォスター・ホール。

微生物学を専門としており、良く言えば「方向性が定まった」、悪く言えば「非常に偏った」編成となっています。私が属していたラボはその中でも少数派の分子免疫学・炎症班 (Molecular Immunology and Inflammation Group) に属しており、私は血液凝固因子プロモーター領域遺伝子多型の機能解析等に取り組んでいました。

我々のラボはボスとポスドク2名、大学院生1名、テクニシャン1名の計5名という小世帯でした。ちなみにボスであるアーネスト・ディ・ナーディン教授 (通称アーニー) は高校生の時に移住してきた陽気なイタリア人であり、ポスドクは中国人のミーシャンと日本人の私、院生であるトビアスはドイツ人、テクニシャンのリンダはアメリカ人と、ご多分に漏れず多国籍ラボでした。ちなみに私と入れ違いの時期に PhD を取得してラボを出たエズラはトルコ人であり、その前にはギリシャ人のジョージがポスドクとして在籍していました。さらには隣ラボのボス、アシュールはインド人です。中学の社会科で習った『アメリカにおける人種の垣塙 (るつぼ)』とはこれなのかと肌身をもって実感しました。

UB では横のつながり強さを実感することが多く、それは学部や講座、ラボを問いませんでした。ラボ同士も非常に良好な関係が築かれており、隔週で開かれる講座のリサーチ・セミナーやジャーナル・クラブではいつも盛んに議論が行われています。大学院生と教授が対等にディスカッションするのはいつもの光景ではありますが、それは即

ちそこまで勉強していることの表れでもあり、自らの院生時代と比べては反省しきりでした。また、大型かつ高額な実験機器は大学もしくは講座として購入し各ラボに仮置きしている形なので、他学部のラボであっても勝手知ったる他人の家のように協力・共用し合い、思いがけないところで交流が生まれることもあり、楽しくかつハードに日々仕事を進めていました。

悪戦苦闘

それでも、その実験も軌道に乗るまでが大変でした。到着して最初のリサーチ・ミーティングでアーニーから新しいプロジェクトの説明を受けた時のこと。やはりというか、予想以上に言っていることがうまく聞き取れませんでした。それでも何となく概要はわかったので、とりあえず

“I understood your explanation.”
と答えたら、アーニーが心配そうな顔で隣の人に
“Maybe, he doesn't understand.”
と、しっかり見抜かれていました。

また、細胞の成長をコントロールするつもりが逆に自らの生活が振り回されてしまい、明け方までラボに残るか、一旦アパートに戻って早起きするかしばしば迷ったものです。しかし、アパートで一旦寝るとなかなか起きられないことがすぐに判明し、世界中の院生達がやっているようにサマーベッドみたいなものを実験室に持ち込んで、仮眠を取ることにしました。しかしこれがまた何とというか、寝つけが悪いうえに眠りも浅く、冷凍庫の音が気になって翌日はボーっとして仕事はか

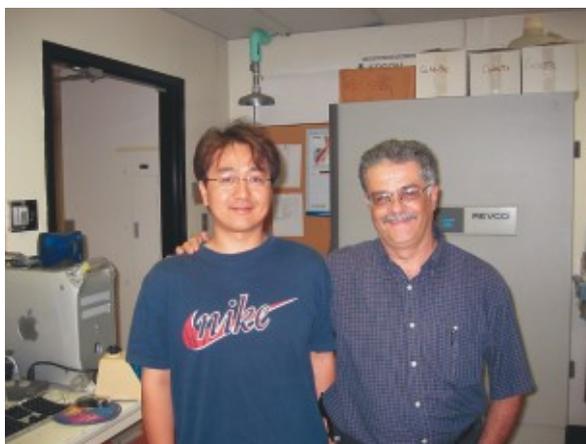


写真5 渡米したばかりの初々しい私とアーニー。



写真6 近くの公園で講座の仲間達とピクニック。

どりませんでした。そうこうしているうちに、細胞の方もこちらの気持ちを汲み取ってくれたのか（そんな訳ありませんが）、成長が安定し、計画的に実験を進められるようになってきました。

月に一度のリサーチ・ミーティングも頭の痛い問題でした。『いつ来て、いつ帰ってもいい。データさえ出せば』という各々のやり方を尊重するアーニーの方針は、ともすれば強いプレッシャーでもありました。計画的に進めようとしても、何かしらによりどうしても遅れてしまうもの。直前の一週間は「やばい、やばい」が口癖でした。そして、どうしてもいいデータが無いときの取っておきの手段。それは、当日朝からオフィスのドアを開放しておき、彼の生まれ故郷の音楽であるカンツォーネを大音声でかけておくことです。アーニーが廊下を歩くときはいつも口笛を吹いており、その音色によりその日の機嫌がわかります。そして午前10時半、私宛の郵便物を持って彼が私のオフィスを訪ねる頃、遠くから聞こえてきたホイッスリングが突然曲を変え、しかもいつもよりワンオクターブ高くなっています。そして、部屋に入るなり大きな声で、

“Toshi, It's Italian !! Do you like Italian music ?”

“Of course.”
これにて作戦終了。

スポーツ

研究は体力勝負とばかりに、オフ日は特に仕事



写真7 名物料理バッファロー・ウイング。あまりの辛さに涙が出てきます。

がなければ外に出てスポーツに励んでいました。とりわけ、春から秋にかけての日曜日は、バッファローで一番の規模を誇るデラウェア・パークでサッカーをしていました。動物園や美術館、ゴルフコースまであるこの公園には4面のサッカーコートがありましたが、アメリカではマイナーなスポーツであるせいかいつも空いていました。しかも、今思えば外国人や他所からの移住者が多かったような気がします。

どこかのチームやサークルに所属していた訳ではなく、週末の夕方5時半頃になると近辺に住むサッカー好きの人達がめいめい集まり、その人数に応じてチーム分けをしてゲームをしていました。人数が少なければ2チームで通常通りに、もし3チームであれば1点取るごとに負けたチームが入れ替わるといったふうにして大体2~3時間は続いていました。サッカーが好きであれば性別・年齢に関係なく、誰でもいつからでも途中参加可能で、もちろん帰りたいたい時には「バイ」と言って勝手に帰ります。私はこのイージーな雰囲気大好きで、中・高校生や年齢不詳のオジサン達と汗をかきながら緑の芝生を駆け巡っていました。ダウンタウンに100年以上の歴史を誇るRPCI (Roswell Park Cancer Institute)の大学院生やポスドク達との交流が生まれたのもここでした。そして、心地よい微風を浴びながら芝生の上に大の字になり、真っ青な空を縦横無尽に交わる飛行機雲を眺めながら遠い故郷に思いを馳せたり、草の色の微妙な変化に季節の変



写真8 吹雪のロードレースで完走直後。

化を感じたりしたものでした。

学内外のロードレースにも積極的に参加しました。11月末のサンクスギビング・デイには隣接するトナワンダ市からデラウェア・アベニューをダウンタウンまで上るレース（ターキー・トロット）に出たのですが、途中で猛吹雪になり、白い息を吐きながらそれでもなんとか完走しました。コンベンション・センターでちょっとしたパーティー形式の表彰式が開かれたのですが、その時に飲んだ熱々のホットチョコレートの味は忘れられません。これら以外にも、遠心機を回している間の同僚とのテニス、中国人留学生とのバドミントン対決など、日本にいた時よりも随分体を動かしていました。私に限らず多くの市民が懸命にスポーツに励んでいたように思えます。もしかしたら、長かった冬からの解放感と、短い夏への惜別の思いが本能的にそうさせているのかもしれませんが。

音楽、建築

プライベートが充実せねば良い仕事はできぬと自らに言い聞かせ、NY シティやクリーブランド、ピッツバーグ、トロントなど近辺各地のオーケストラへもよく聴きに行きました。地元のバッファロー・フィルに至っては、車で10分少々距離であったため、週末PCRをかけている間にちょっと行ってきます、という具合。他にも、友人達と片道7時間かけて行ったボストン交響楽団のタングルウッド音楽祭、かねてより大ファンであったエレヌ・グリモーのリサイタル、クリスマ



写真9 ピアニストのエレーヌ・グリモーと。もっといい服着てくれば良かったと後悔しながら。

ス近くにクリーブランドで聴いた2時間30分にもわたるヘンデルのメサイア等々、忙しい中でも何とか時間を捻出して出かけ、明日への活力を注入しておりました。

また、かねてより建築に興味があった私にとって、NY シティの多彩な美術館やクライスラービルをはじめとするアール・デコ様式、近代の巨匠達による高層建築群など、今まで本や写真でしか知り得なかった建築物をこの目で見て巡ることができたのは嬉しい限りで、分野は違えど非常に感銘や刺激を受けました。ピッツバーグ郊外の落水荘に代表されるフランク・ロイド・ライトによる個人住宅はバッファロー近辺にもいくつかあり、建築士の友人と週末によく巡り歩いたものです。帰国前には遂に、ライトとその弟子達の住まい兼仕事場の1つであるアリゾナのタリアセン・ウエストへも行っていました。帰国したら読もうと、その都度に衝動買いしてしまった多数の書籍や写真集は現在、自宅の本棚で熟成されています。そろそろ読み時だと思うのですが……。

おわりに

私にとって、生まれて初めての海外旅行は大学院3年目に行った国際学会でした。同年代の人たちと比べればやや遅い方かもしれませんが。それがまさか、その数年後にアメリカに住むようになるとは、人生とはわからないものだなとつくづく思います。アメリカでの生活は、見るもの、触れるもの全てが刺激的かつ新鮮であり、子供時分のよ



写真10 このようなライトの小作品が近辺に多数あります。もちろん中にも入れます。

うに好奇心がくすぐられる毎日でした。同時に、ダイナミズム溢れるあの環境に身を置いて研究に集中できる機会を歯科医師としてあの時期に獲得できたことは幸福だったとつくづく感じます。

バッファローでは実験技術のみならず、研究というものに対する姿勢、多彩なラボやボスの在り方など多くのことを学ぶことができました。また、多くの良き友人や同僚、ボスに恵まれたことは幸運としか言いようがありません。さらには、多様

な価値観がぶつかり合うアメリカという国で、客観的に自分を見つめ直すという機会は非常に得がたいものでした。今後は、バッファローで学び得たことをいかに継続、発展させるか。とりわけ、どのように臨床へ応用させていくかがこの先の課題となりそうです（今は目の前のことで手一杯ですが……）。

本当に行ってよかった！ その一言に尽きます。



写真11 帰国前日。左からリンダ、アーニー、私。アメリカン・スマイルも板についています？



写真12 講座のチーズ&ワインパーティーで。ちなみに、この中で日本人は私だけです。



写真13 2004年10月のとある午後。リサーチ・グループの仲間達と。

Hatton Award 学部生日本代表として参加して

歯学部歯学科5年 坂上直子

2006年6月27日から7月1日までの間、IADR (International association for dental research) での Hatton awards competition に参加するために、オーストラリアのブリスベンに行って参りました。

オーストラリアのブリスベンは、オーストラリアの中では3番目に大きな都市で、川が町の中央を流れているという点で新潟と共通しており、とても美しい街でした。今回のオーストラリアでの学会発表は勿論のこと、学部3年から長期の休みを利用し研究を続けてきたことは、私にとってその全てが貴重な経験であり、自分の糧となりました。今回このような機会をいただきましたので、私が出た事や感じた事を述べようと思います。

Hatton award とは

IADR 学会は、基礎・臨床を問わずさまざまな歯科の研究が発表される国際的な歯科学会です。Hatton award とは第10代 IADR 会長の Edward Hatton 博士の功績を称えて設けら

れた若手研究者を顕彰するための賞で、Junior 部門、Senior 部門および Post Doctoral 部門があります。世界各地から各々代表が選ばれ、日本からは毎年5人の候補者が選出されることになっています。2005年7月中に、第一次選考として書類審査が行われ、参加応募のうち、10名が選出されました。また、8月29日に大阪で第二次選考として英語による口頭発表の審査を受けました。その結果、Junior 部門の日本代表として、この Hatton award に挑戦する機会を得ることができました。日本代表として発表することに対してプレッシャーに感じることはありましたが、それと同時に自分がこの Hatton award に挑戦できることをとても嬉しく感じ、精一杯取り組みようと思いました。

Hatton awards competition

IADR の学会では、一般のポスター発表に加え様々な催し物が開かれ、その中の一つとして Hatton awards competition がありま



写真1 Travel award レセプション (Hatton award 参加者の表彰式)にて。左は、仲良くなったマレーシア出身のレニーさんです。



写真2 Travel award を頂きました。左にいらっしゃるのは IADR の黒田会長。

す。Hatton award の審査は一般ポスターの発表よりも一足先の27日に行われました。審査は一人ずつ個室で行われ、発表者は3人の審査員の前で自分の研究を発表します。発表者には研究内容のプレゼンテーションに5分、質疑応答5分の合計10分与えられます。私は最初の発表者から数えて3番目という早い順番だったので、比較的緊張することなしに発表に臨む事ができました。発表は朝の8時から始まり、発表者全員が一人ずつ発表していくので、全員が発表し終わると夕方5時までかかります。

英語での口頭発表には少し不安と戸惑いを感じましたが、研究内容のプレゼンテーションは練習の甲斐あって上手く発表することが出来ました。審査員の先生方は、にこやかに私の英語の発表にときどき相づちを打ちながら耳を傾けてくださいました。しかし、その後の質疑応答には2つの点で苦戦しました。その1つは、なんとなくこのようなことを聞いているのだろうか、と審査の先生の質問を自分なりに解釈して答えることで精一杯だった事です。もう1つは、質問を聞き取れても、自分の言いたい事を英語に置き換えることが出来ない場面があった事です。

発表を通して痛感したことは、やはり英語は重要だということです。Hatton award の発表に備え、英会話教室に通い、英語CDを聞いて自分のリスニング・スピーキングのトレーニングをしましたが、流暢に会話を成立させるなどということは到底至りませんでした。そうはいても、そ

の時点での自分の力を出し切ったという思いが強く、Award を取れるかということよりも、発表が終わったときにはやり遂げた達成感でいっぱいになりました。

今回のオーストラリアで得た宝物の一つは、いろいろな国の人との出会いです。Hatton award に一緒に参加した学生や大学院生とは、これまで自分と同じように研究をし、この発表に向けて頑張ってきた仲間だという意識があり、異なる国から来たのにも関わらず不思議に親近感が湧きました。特に、同じ Junior のカテゴリーのマレーシア出身の女の子とは、私の一つ前に発表したという事もあってとても仲良くなりました。また、29日には一般のポスター発表をする機会があったのですが、そこでは外国の先生からも沢山の質問やサジェスチョンをいただきました。自分の研究に興味を持っていただくというのはこんなに嬉しいことなのだと思います。そこでは審査と違って気楽に話したりできるので、Hatton award に挑戦した学生同士でお互いに自分の研究についてプレゼンテーションし合ったりもしました。

私の研究テーマ

私の研究内容について少しお話をさせていただきますと、今回発表した Hatton award 研究発表のテーマは、破骨細胞と骨芽細胞のカップリングについてです。今までのところ、破骨細胞の分化過程において、M-CSF によるマクロファー

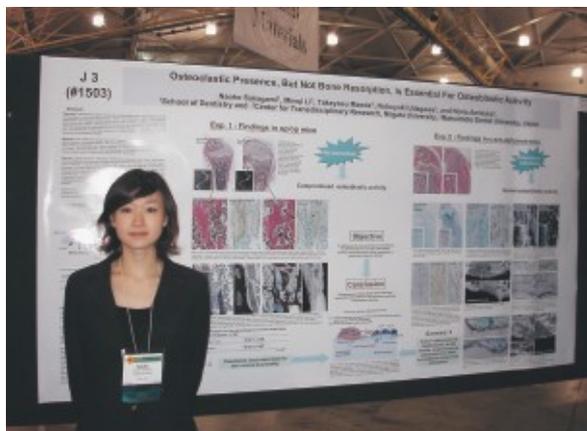


写真3 これが私の研究発表のポスターです。



写真4 学会会場には企業の展示も併設されており、沢山の企業のブースにはいろいろな商品が並んでいました。

ジ系の細胞への分化誘導と、その後の RANK-RANKL を介した破骨細胞と骨芽細胞との細胞間接触が明らかになっています。しかし、骨芽細胞の機能活性に対して破骨細胞が与える影響はまだはっきりとしていません。そこで、破骨細胞の存在が骨芽細胞の機能活性に影響を与えるかどうか、また影響を与えたとしたらどのようなメカニズムでそれを行っているのかを調べるために、大理石骨病のモデルマウスである op/op マウスと c-src 欠損マウスをそれぞれ光学顕微鏡と電子顕微鏡を用いて観察し、比較検討しました。M-CSF を欠くために破骨細胞が存在しない op/op マウスと、骨吸収を行うことが出来ない破骨細胞を持つ c-src 欠損マウスではそれぞれ異なった骨芽細胞の活性と石灰化の所見を得ることができました。すなわち、破骨細胞が存在しない op/op マウスの骨芽細胞の活性と石灰化の程度は、機能不全を示す破骨細胞を有する c-src 欠損マウスのそれよりも著しく低いことが分かりました。その結果から、破骨細胞は骨芽細胞の活性化に必要不可欠であること、また骨芽細胞を活性化するためには、骨吸収ではなく破骨細胞からの有機物質の分泌や細胞間結合が必要である可能性が示唆されました。これが、私がここ 2 年間行ってきた研究の結果であり、今回の Hatton award で発表した内容です。

研究を通して、実際に自分で細胞や組織を顕微鏡観察すると、今まさに自分が見ている細胞で起こっている事象と 2 年生の時に細胞生物学で学んだ内容が具体的に結びつき、「教科書に書いてあることは、こういうことだったのか。」と目の前にある細胞から教科書の内容を再確認したり、実際に起こる現象から学んだりする事の楽しさを感じました。

形態学は、組織切片から細胞や生物のさまざまなストーリーが推察でき、本当に面白いと思います。また、マウスの固定から切片の染色まで、一つ一つの段階の細かい所が正確に行われていない

と、綺麗で確かな所見が出ないという事を実際に自分でやってみて実感しました。そのような正確な所見が出るように、実験のテクニックを何度も練習したり、失敗して試行錯誤したりするのも形態学の楽しさの一つなのではないかと思います。

最後に

今回発表を終えて、まだまだ研究の世界をほんのちょっと覗いただけなのですが、一步知らない世界に足を踏み入れることは勇気が必要けれども、いままで未知だった物事に触れることはとても興味深く、そこで得られた事は、今後の自分の行動に対して情熱を燃やす原動力となることを知りました。

また、基礎研究は決して臨床と切り離して考えるべきでなく、またその逆に臨床においても Basic science は必要であると思います。この基礎研究で得た科学的な物の見方は将来自分が歯科治療に携わる際にも役に立つものと信じています。

自分のキャパシティを越えて何かにチャレンジするという事は、今回のような Hatton award への挑戦という大きな出来事もそうなのですが、むしろ日常の小さな事の積み重ねもそれにあてはまるのではと思います。自分が出来なかったことが出来るようになることはたとえ小さなことでも大変な喜びだと思いました。困難なことにぶつかっても、自分が日々成長できるようにチャレンジする前向きな姿勢を持ち続け、これからの学生生活を過ごしたいと考えています。

最後になりましたが、今回の発表に際し、多くの先生、大学院生、技官の皆さんからご指導や助言をいただき、感謝の気持ちでいっぱいです。分からないことも多く、いろいろとご迷惑をおかけしたと思いますが、学生という立場で研究をしていることに関して、いつも暖かい目で応援してくださいました。本当に、どうも有難うございました。

IADR—初めての国際学会発表—

大学院医歯学総合研究科3年 奥井隆文
(歯周診断・再建学分野)

私は現在、医歯学総合研究科 歯周診断・再建学分野の大学院3年生です。この度、IADR (International Association for Dental Research) という歯科界最大の国際学会で発表をする機会を得ることができました。6月末であり、日本では非常に暑い季節でしたが、学会場があるブリスベン (クイーンズランド州、オーストラリア) は初冬でした。といっても、気温は新潟の秋頃と同程度でしたが。

学会では、「Functional analysis of the FOXP3⁺ T-cell clones established from periodontitis tissues」という題名でポスター発表を行いました。この研究は私が大学院1年生の時から携わっていて、実に2年以上も真剣に取り組んでいます。内容を簡単に説明しますと、歯周炎組織中のT細胞をクローン化してそのキャラクターを調べており、歯周炎病態の解明につながる研究であると考えています。これまでに歯周病学会や新潟歯学会で研究の途中経過を発表させていただき、日本語による学会発表の経験は積んできました。しかし、ご存知のようにIADRでは発表も質疑応答も全て英語でこなさなくてはなりません。生粋の日本男児であり英会話が苦手な私は、IADRの3ヶ月前になってやっと英会話対策を始めました。結果、IADR本番ではだいたい相手の言っていることを理解して、つたない英語で返答することができました。しかし、言いたいことを全て英語にできたわけではなく、悔しい思いもしました。

IADRで学んだことは、1つ目として、英語力は優れた研究者であるための必要条件であり、英語なしでは他のライバルと戦う場に立てないということです。2つ目として、世界の歯学分野では沢山の大学院生が多種多様な研究を行っているということです。特に研究内容が近似している研究者と論議することにより、私もモチベーションを

上げることができました。3つ目として、シンポジウムで偉大な研究者の講演を聞くことにより、世界の歯学分野のレベルの高さを知ることができました。初めての経験ばかりのIADRでしたが、それだけに得ることも多く、大変貴重な時間を過ごすことができました。

IADRが終わってから、わずかながら観光する時間をとることができました。定番なのですが、ブリスベンのローンパイン・コアラ・サンクチュアリでコアラを抱き、カンガルーと戯れました。ブリスベンの人々は明るく気さくで、豊かな土地柄を反映しているようでした。また、オーストラリア英語も十分に堪能できました。道行く人々の挨拶は、グッダイ・マイト (Good day, mate)、ニュースキャスターもトゥダイ (Today) を連発します。住みたくなくらい本当に素敵なおところでした。ただし、食事だけは日本の方が勝っていると思いましたが。

最後に、私がIADR発表に至るまでに沢山のの方々に応援していただいたことを付け足したいと思います。特に実験を手伝っていただいた先輩や同期、実験する環境を整えてくださった吉江弘正教授、直接の研究指導をくださった山崎和久教授には、格別の感謝の意を表します。



日本歯科医学教育学会 出席レポート

医歯学総合病院・教授 魚島 勝 美
(歯科総合診療部)

平成18年6月16日(金)、17日(土)の両日、杜の都仙台において東北大学大学院の担当で第25回日本歯科医学教育学会記念大会が開催されました。会場となった「ネ！ットU 仙台市情報・産業プラザ」には初日の開場時より多くの会員が集まり、各大学の事情や昨今の歯科医学教育に関する話に花を咲かせていました。教育学会に参加する度に思うのですが、この学会にいらっしゃる先生方は真面目です。学術大会初日の開場から2日目の最終演題まで、ずっと会場で発表に耳を傾けている先生方が結構いらっしゃいます。先日、教育学会編集による歯科医学教育白書が発刊されました。これによると、本学会は1982年に118名でスタートして以来、右肩上がりに会員数を増やし、今や1400名を越える会員を擁しています。毎年の学術大会における演題数も1999年頃から右肩上がり、特に新潟大学が担当した2004年からは飛躍的に伸びています。今年も実に口演発表41題、ポスター発表116題、合計157題の発表がありました。3種のシンポジウムと25周年記念国際シンポジウム等が平行して行われたことを考えると、もはや2日間でごなしきれぬ内容ではなくなってきているようです。多くの教育熱心な先生方に支えられて発展充実の一途を辿っていると言えるでしょう。

本学会では新潟大学からも毎年多くの先生方が発表をし、活躍しています。今年は前田先生が25周年記念国際シンポジウムのオーガナイザーをされましたし、私も一般口演の座長をしました。他に小野和宏先生と小林哲夫先生が口演発表を、大内先生、興地先生と私がポスター発表をしました。宮崎先生、齋藤功先生とロクサーナ先生はご発表こそされませんでした。熱心に歯科医学教育について聞いておられました。新潟大学が先進的な歯学教育を実践していることは他大学のほとんどの先生方が認識されています。ここ数年の本学会における新潟大学の活躍を見れば、当面は心配無



さそうですが、それでも他の大学に遅れを取らぬよう、今後も積極的に頑張る必要はありそうです。

今年の学術大会は学会発足25周年ということもあり、上述の通りシンポジウムが3本、国際シンポジウム、サテライトシンポジウム、合計5本のシンポジウムに特別講演と、実に多彩な企画が提供されました。シンポジウムのテーマはそれぞれ「新たな歯科医師臨床研修制度の検証」、「21世紀の歯科医学教育(国際シンポジウム)」、「臨床実習開始前の共用試験の正式実施を迎えて」、「歯科医学教育の質の向上を考える」、「歯科大学における医療倫理教育」で、どれもタイムリーなものばかりでした。特に国際シンポジウムでは、アメリカ、ヨーロッパ、カナダ、中国、日本のそれぞれの歯科医学教育事情が紹介され、世界的なレベルで歯科医学教育の標準化が進もうとしている事実を目の当たりにしました。我々も、日本国内から世界に目を向ける時期が確実に来ていると感じます。さらに、特別講演では首都大学東京の西澤潤一学長が、「電子工学と医学(歯学)」という従来にない切り口で興味深いお話をされていました。

私が教育学会に始めて参加してから既に10年近くが経とうとしています。当初は本学会の意義もさして感じていませんでしたが、今では貴重な情報交換の場としても機能しています。昨年には本学会が日本歯科医学会の分科会になったこともあり、今後は益々大学を始めとする教育機関にとっ

ては重要な存在になるでしょう。平成16年に新潟大学が担当した際には、全国国立大学歯学部歯科医師臨床研修担当者と厚生労働省の担当官が集まって意見交換会を開催しました。以来、毎年学術大会の折には非公式な意見交換の場が設けられ、本当に貴重な情報収集が可能となっています。また、過去8年に亘って毎年開催された、いわゆ

る富士研(3泊4日のそれは辛い教員研修会)OB会も、単なる飲み会に形を変えはしましたが存続しています。いずれにしても、大学の教員の方々には一度は真面目に参加してみることをお勧めします。学生の皆さんも、機会があったら覗いてみて下さい。「教員はこんなことを考えているんだあ〜」なんてことも分かるかもしれませんよ。



平成18年度新潟歯学会報告

新潟歯学会集会担当
口腔生命科学系列・助手 八 卷 正 樹
(歯科矯正学)

第39回新潟歯学会総会は、平成18年4月22日(土)、歯学部講堂にて開催されました。

総会においては、平成17年度会計決算報告および会計監査報告が行われ、平成18年度事業計画案が承認されました。平成18年度予算案も原案通り承認されました。あわせて研修医必修化に伴い学会費に研修医の項目を設けることや歯学会雑誌投稿規定の改訂事項—電子図書館サービス、論文情報ナビゲータへの登録に当たって著作権の帰属を新潟歯学会にすることが承認されました。

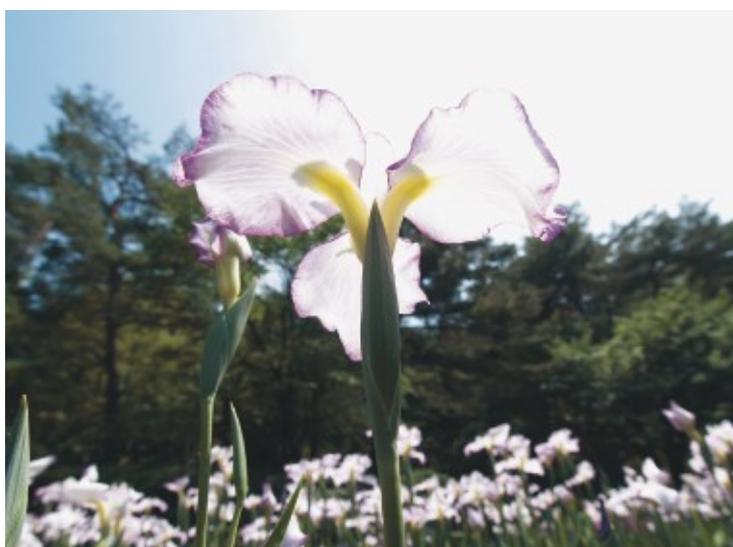
総会後に一般口演13題が行われ、東京医科歯科大学大学院・歯科医療行動科学分野 俣木志朗先生より「わが国の歯学教育の方向性—共用試験・卒前臨床実習・新歯科医師臨床研修制度—」と題した特別講演をしていただきました。

また、平成18年度第一回例会は7月8日(土)に歯学部第3講義室で開催され、10題の一般口演の後、教授就任講演として新潟大学歯学部・口腔生命科学福祉学科・口腔介護支援学講座富沢美恵子教授



の「口腔生命福祉学科の現状と課題」と新潟大学歯学部・口腔生命福祉学科・口腔衛生支援学講座山崎和久教授の「歯周疾患の病態形成における免疫機構の関与と全身疾患との関連」と題した講演をしていただきました。

新潟歯学会ホームページ
(<http://www.dent.niigata-u.ac.jp/nds/index-j.html>)





同窓会だより

新潟大学全学同窓会の誕生に関連して

新潟大学歯学部同窓会 会長 多和田 孝 雄



本年4月より会長に就任して2期目の執行部がスタートしました。1期目では就任した年に発生した水害や中越地震の対応に追われました。同時に手を付けた同窓会の会則を始めとした

諸規則の改定、会計業務の外部委託、さらに事務職員の追加採用等が、今年度に入り一段落しました。私の基本方針は1期目同様「会員一人ひとりを大事にすることにより、会員からも大切にされる同窓会づくり」、「会員にメリットのある同窓会づくり」、「強い同窓会づくり」の3点であります。

最近では歯学部同窓会よりも全学同窓会の動きの方が急でありますので、全学同窓会に関連した報告をさせていただきます。新潟大学が法人化した平成16年4月に全学同窓会の準備組織である全学同窓会連絡協議会が結成されました。その後2年の準備期間を経て本年4月1日に新潟大学全学同窓会が誕生しました。これは新潟大学9学部同窓会（人文・法・経済学部同窓会、医学部学生会、歯学部同窓会、教育人間科学部同窓会、理学部同

窓会、医学部保健学科同窓会、工学部同窓会、農学部同窓会、商業短期大学部同窓会）と新潟大学を基盤とした校友会で組織されております。それぞれの組織の代表者が理事となり、校友会代表の理事には学長が就任しております。理事会は全学同窓会の最高意思決定機関でありますが、その下に実務を担当する運営委員会があります。会長には人文・法・経済学部同窓会の柳本会長、副会長には私と医学部学生会の追手会長が就任しております。歯学部同窓会からの運営委員には佐藤副会長、鈴木副会長、福島学術理事が就いております。

本年5月27日(土)、ホテルイタリア軒において全学同窓会の設立式典及び祝賀会が同窓会関係者は素より大学、行政、政財界から大勢の方々に出席していただき盛大に開催されました。式典においては、新潟大学弦楽研究室四重奏団による祝賀演奏及び新潟大学合唱団50名による大合唱が花を添えてくれました。また、全学同窓会本部と同日に誕生した沖縄県支部の設立総会・祝賀会は本部より一足早く4月15日(土)に那覇市内のホテルにおいて開催されました。同支部は歯学部同窓会沖縄県支部の新里叡先生(7期生)を中心に準備が進められ、約100名の会員が確認されております。祝賀会には私と長谷川学長の2名が出席しましたが、地元の参加者も数十名を数え、沖縄恒例の祝宴の座開き琉舞「かぎやで風」でスタートし、2次会も含めて深夜まで宴席は続きました。





平成18年度同窓会総会を終えて

副会長 宮野正美

日時：平成18年4月22日(土) 午後4時30分から
場所：歯学部2F大会議室

連日のように「記録的な……」、「観測史上……」という報道がなされた新潟の長かった冬も終り、移植された「歯学部の桜」が今年も満開の姿を見せてくれた4月第4週の土曜日、平成18年度歯学部同窓会総会が開催されました。今年も総会学術講演会（講師：齋藤 功教授）のあと、午後4時30分からの開催となりました。

開会に先立ち、この一年間で亡くなられた阪田雅浩先生（21期・平成17年7月25日逝去）、高野文夫先生（4期・平成17年12月4日逝去）、野原廣美名誉教授（平成18年4月20日逝去）のご冥福を祈り全員で謹んで黙禱を捧げました。

会長挨拶

冒頭、多和田孝雄会長は会長選挙の結果、ご自身2期目の会長の任にあたる事、監事には神保陸郎先生（3期生）、高木律男先生（10期生）が再選されたことをご報告されました。1期2年間を振り返り、就任当初掲げた3大方針「会員一人ひとりを大事にする事により、会員からも大切にされる同窓会作り」、「会員にメリットのある同窓会作り」、「強い同窓会作り」に沿っての会務執行を行ってきた。具体的には、長期会費未納会員へ同窓会誌を送付し、同窓会の現状を知っていただき再び会を支援していただきたい、過去に大学等勤務経験がある会員の公的年金請求方法のご案内、都府県代表幹事の設置、代議員モニター制の導入等による会員相互あるいは本部、支部・各都府県との連携強化と組織整備、対学部・対大学支援を念頭においた全学同窓会での活動、また今後は口腔生命福祉学科卒業生の受け入れに向けた準備や長年の課題である同窓会館（室）問題にも取り組む覚悟である。

つづいて、上路総務理事の議長の下、議事が粛々と進行了。慎重審議の結果、17年度事業、一般会計決算および特別会計決算ならびに18年度事業計画、18年度予算案は満場一致で承認されました。

特筆すべきことがいくつかあります。第一に、同窓会会則が改正されました。本会の目的が「本会は会員相互の連携と親睦および会員の資質向上を図り、併せて母校の発展と社会の貢献に寄与することを目的とする。」となり、新潟大学の支援と社会貢献としての責務を明確に打ち出しました。また会員構成区分の変更により、浅岡久俊元新潟大学教授が名誉会員として推薦、承認されました。第二に、慶弔規約、天災等被災に関する見舞規約が成立しました。各支部、クラス代議員、都府県代表幹事各位のご協力をいただき、情報収集に努めますのでよろしくお願い致します。しかしながら、見舞規約が頻繁に活躍しないことを節に望む次第です。第三に、同窓会館（室）設立に向けて、「同窓会館（室）設立検討委員会」を設け今後検討が開始されることが承認されました。大学の独法化や旭町地区再開発など不確定要素が多い中、将来も安定した同窓会活動の拠点となるべき同窓会館（室）とはどのような形がよいのか、会員皆様の貴重な財産の有効活用を第一に念頭に置き、今後同委員会を中心に検討がなされることとなります。

「歯学部の桜」が移植されたことはいろいろなところでお知らせしたとおりですが、国道116号線拡張整備事業で歯学部周辺の景観は様変わりをしました。遠方の皆様、是非一度なつかしい新潟にお出で下さい。また、支部の講演会など、同窓の先生を講師に依頼されて、母校の近況などをお聞きしてみたいかたがでしょうか。

歯学部、大学本部、全学同窓会との連携を図りながら、歯学部同窓会のさらなる発展を目指してまいりたいと思います。会員皆様のご支援、ご協力をよろしくお願い致します。



平成18年度歯学部同窓会総会学術講演
【新潟大学医歯学総合病院矯正歯科診療室にお
ける矯正治療の現況】

一齋藤功教授の学術講演を聴いて一

35期 三 上 俊 彦



今回、2006年4月22日に催された新潟大学歯学部同窓会総会学術講演会で、本学歯科矯正学分野の齋藤功教授による「新潟大学医歯学総合病院矯正歯科診療室における矯正治療の現況」という講演を拝聴しました。

歯科矯正治療の歴史は古く、ギリシャやエトルリアの出土物に矯正装置と見られるものがあり、紀元前1000年に遡ると聞いた事があります。日本においては1978年の医療法改正で歯科標榜科名に「矯正歯科」が加えられましたが、ここ最近の歯科矯正治療学の発展と、社会のニーズの拡大には目をみはるものがあります。と、知った風に書いてしまいましたが、私がこの世に生を受けたのが1979年ですので、私が目の当たりにした歯科矯正学は長い歴史のほんの一部です。したがって、歯科矯正学の奥深さは簡単に理解できるようなものではないことと思います。今回の齋藤功教授の講演では、本学における矯正治療方法やシステムの変遷と現況を軸に、臨床例を交えてとても分かりやすく話され、私にとってかなり新鮮で、刺激となるものでした。

また、今回の齋藤功教授の講演では、成人矯正治療の需要の増加についても触れられていました。私は現在、組織再建口腔外科学分野の大学院として勉学に努めている身ですが、外科的矯正治療症例を傍らにて経験する機会を何度か頂いております。その大部分が20歳前後の症例ですが、中にはより高齢層症例も見受けられました。現代社会における歯科治療に対する要求は高度になってきていると考えられ、そしてそれは地域差こそあ

れ今後も続くものでしょう。その一部がこのような形で現れているのだと思います。今後とも成人矯正治療のニーズ・適応の拡大に伴い、外科的矯正治療のそれも拡大することは容易に想像できません。以上の事を踏まえた上でも、齋藤功教授の講演内容は今後の展望を見据えたとても充実したものであり、口腔外科学を専攻する私にとっても今後の歯科治療全般に対する姿勢を前進的なものにしてくれたと感じています。

現在もそうですが、今後ますます歯科矯正治療が隆盛を誇る時代になると予想されます。適応症例の拡大がすすめられ、患者様の身体的のみならず、社会的健康を担うことのできる役割は今後とも重要であり、当然の事ながら私たち若い歯科医師は学び続けていかなければならない分野であることを痛感させていただきました。

平成17年度第2回歯学部教授会・同窓会定期協議会開催

20期生 渉外担当理事 杉 本 浩 志

日 時：平成18年3月6日(月) 午後7時から

場 所：新潟大学歯学部特別会議室

出席者：(教授会) 山田学部長、宮崎副病院長

：(同窓会) 多和田会長、佐藤副会長、宮野副会長、成田専務理事、齋藤渉外担当理事、飯田渉外担当理事、杉本渉外担当理事

1. 歯学部より(山田学部長)

はじめに、同窓会から歯学部への寄付について謝辞を述べた。

口腔生命福祉学科に海外より(スリランカ)の留学生を受け入れることになった。この件に関し、スポンサーの企業が留学費用の一部を負担してくれる。来年度以降も、引き続き留学生を受け入れる準備をすすめている。

公務員の人件費を5%削減しなくてはならない。人数を5%減らすということではないが、現



状では河野教授が退官した後、補充のめどは立っていない。細菌学教室の助教授に関しても同様。また、助手が退官した場合、旭町だけではなく全学の会議にて決定されるため、補充されるとしても半年ほど空白期間となることありうる。これとは別件で、今後3年間で48名を、歯学部、医学部、病院で削減しなければならない。医学部と統合できる部分はあるであろうが、外来、研究ともに、人員の削減に伴う質の低下を招く恐れがある。

今後、学部の事務は旭町地区として医学部と統合され、一部機能が歯学部に残るのみとなる。

大学院が定員割れを起こしている。定員を少なくすれば運営費、教員ともに削られてしまう。社会人にも門戸を開いているが決定打とはいえないのが実情である。

2. 病院より（宮崎副病院長）

今年より始まる研修医制度への、同窓会からの協力に対し謝辞を述べた。この制度に関しては、病院として、専属のスタッフを5名確保できたことも含めて明るい見通しを持っている。今後病院としては、さらになるスタッフの増員を図りたい。その際には病院内部からのみではなく、外部からの指導医を導入することも考えている。

病院外の研修医受け入れ施設数はまだまだ十分といえる状態ではなく、今後とも協力施設を募集したい。

歯学部は文科省の管轄だが、研修医制度の運営費に関わる人件費は管轄が異なるため文科省からは交付されず、独自運営を余儀なくされている。また、従来の研修医制度の2年目は手当てがつかなくなった。このため、医員27名分の手当てを削って充当する。

口腔外科の病室は、年末に医学部の病棟へ引越した。環境が変わったが、患者様の評判はおおむね良好である。なお、7～8年後には病棟だけではなく、外来棟も医学部と統合される可能性がある。今現在は、歯学部と医学部の病院は協力的に運営されており、人事に関しては独立性を保っている。

4月の保険制度改定により、病院でも相当の影響を受ける見込みである。今後は単に「歯科」といった概念に囚われたり、歯科医師個々の利潤の追求を考えるだけでは将来的な見通しは開けないであろう。たとえば嚙下といった分野で医科と協力体制を整えろとか、食育といった考えに基づいて歯科の存在を国民にアピールするといったことにより潜在的な患者様を掘り起こしていくことが開業医、病院ともに求められるのではないだろうか。

3. 同窓会より（多和田同窓会長）

(1) 全学同窓会関連

4月1日に全学同窓会が発足する。設立祝賀会が5月27(土)に開催されるため、学内関係者に出席を依頼した。

11月3日(金)に行われる交流会への学内関係者の出席を依頼した。

(2) 評議会報告

同窓会より歯学部への寄付金について報告した。寄付金等に関する報告は、協議会で報告するほか、ホームページにも掲載する。

口腔生命福祉学科の卒業生を同窓会へ受け入れる。同学科の卒業生には、同窓会の概要に関する説明会を2回予定しており、卒業と同時に同窓会の正会員となるようにスケジュールを組んでいる。

(3) 同窓会名簿

個人情報保護の観点から、非会員（他大学出身の医局員等）は同窓会名簿に名前のみを載せることとする。

(4) 歯学部の将来について

(5) 歯学部と同窓会の連携について

同窓会と大学が協力し、研修会のような形で同窓会員に対しセミナーを企画してゆきたい。修了者には証書を発行したい。そのためには今後同窓会と大学で、カリキュラムを擦り合わせ、何らかの進展を図りたい。





4. その他

研修医制度でのマッチングでは、新潟大学歯学部の人気は高かった。その一方他大学や、医学部では定員割れの所も多い。人員の一極集中化が進んでいるようである。

「平成18年度第1回歯学部教授会 同窓会定期協議会」開催される

18期 渉外担当理事 飯田明彦

標記会議が平成18年8月2日(水)午後7時より、東堀8「味粹」で開催されました。教授会側からは山田学部長、宮崎副病院長にご出席いただき、同窓会側からは多和田会長、佐藤、野村、宮野、鈴木の各副会長、成田専務理事、多部田渉外担当理事が出席しました。加賀料理に舌鼓を打ちながら午後9時30分まで、活発な協議がなされました。

以下に、議事の概要を示します。

1. 同窓会の近況について（多和田会長）

- 1) 同窓会と学部の連携を強化している大学が増えてきた。本学でも連携を強化していきたい。
- 2) 口腔生命福祉学科の卒業生も同窓会に受け入れることとした。

2. 歯学部の近況について（山田学部長）

- 1) 教育 GP や「留学生大学院教育の実質化による国際貢献」などの申請が採択された。後者については、同窓会からも支援を頂き感謝している。
- 2) 歯学部附属病院前の道路が2車線化されることに伴い、病院駐車場が狭くなる。さらに、看護師の130名増員が計画されており、駐車場問題は切実である。

3. 全学同窓会について

全学同窓会として、会員が無料で利用できるクレジットカード（ゴールドカード）事業を開始する予定である。

4. 同窓会室について

現時点で同窓会室として使用できる大学のスペースはない。今後、大学職員の削減などに伴いスペースが空くことも考えられる。そのようなスペースを同窓会が使用できる可能性もある。交渉先は歯学部ではなく大学となる。

5. 歯学部・病院と同窓会との連携について

- 1) 山田学部長に対しすでに開業等で大学を離れた同窓生が、大学の実習などでインストラクターになることは可能かという質問をしたところ、学位を持っていれば可能であるという回答が得られた。ただし、同窓会としてインストラクター希望者の質の担保までは出来ないため、同窓会が窓口になることは困難である。
- 2) 他大学出身者で、本学の大学院に入学したものや、本学で臨床研修をしたものを賛助会員として入会していただく構想があることを報告した。
- 3) 病院について（宮崎副病院長）
病院の統合により、厳しいところもあるがスケールメリットを享受できる部分もある。顎関節治療部やインプラント治療部の発足もあり、歯科としての主張を大切にしていきたい。そのような中で、歯科から臨床教授に採用されたものがあることは喜ばしいことである。

同窓会に対しては、臨床研修医の受け入れや病診連携でご協力をお願いしたい旨お話があった。

次回は、平成18年度第2回協議会を2月頃に行う予定である。

歯学部6年生と同窓会との交流会

27期 渉外担当理事 多部田康一

7月21日(金)に「歯学部6年生と同窓会との交流会」が歯学部大会議室で開催されました。6年生の参加者は54名中40名と多数の学生に参加して





いただきました。同窓会側からは多和田会長、宮野副会長、鈴木副会長、成田専務理事を始めとしてその他学内理事8名の先生方に参加していただいて大変賑やかなものとなりました。

鈴木副会長の司会進行により会は始まり、新潟大学歯学部同窓会の活動、本交流会の趣旨、経緯についての説明のあと、参加された同窓会の先生方からの自己紹介がおこなわれました。続いて多和田会長よりの挨拶においては歯科医師がどこよりも足りなかった昭和40年当時の新潟においての新潟大学歯学部の誕生とその後の同窓会設立から現在の歯科医師過密県新潟に至る興味深いお話、同窓会の役割、重要性、6年生に対して是非とも卒業後には全国17の新潟大学同窓会支部と連絡を取って就職や開業のアドバイスをもらうようなどのお話がありました。

そして成田専務理事より乾杯の発声をいただくと、冷たい生ビールにより時間を要せず、かきこまっていた雰囲気もとても和んだものとなりました。

十分に用意されていたはずのビールも追加が必要になるほどに会も賑わい、終了時間も例年より少し遅めの10時半くらいとなりました。

研修医必修化以前は6年生に対する進路アドバイスということで例年行われていた講演等は昨年と同様に本年度も行われませんでした。まだ研修先も決まっていない6年生に対してですのでその先を見越した進路相談は少々難しいことかもしれないとの配慮によるものですが、今年度末には必修化後の最初の研修医も終了することから、近いうちにまた改めてこの懇親会の形式も検討されることになると思われます。

学部卒業後、他大学や他機関にて研修を受ける学生も多くありますし、本学で研修を受けるとしてもなかなか同窓会と接する機会も多くないことから、将来同窓会の一員となつていただく6年生とこのような会において交流をもつことにはとても意義のあることであると考えられました。



新入生合宿研修を終えて

学生支援委員会委員 齋藤 功
歯科矯正学分野・教授

毎年恒例となっている新潟大学歯学部新入生合宿研修を、今年も4月15日(土)、16日(日)の日程で、歯学部およびウェルサンピア新潟において開催しました。この研修は、新入生ならびに3年次編入生を対象としたものですが、今年度は新たに口腔生命福祉学科3年次編入生が加わったことから、学生参加者数は、歯学科新入生45名(3年次編入生5名を含む)、口腔生命福祉学科新入生30名(3年次編入生10名を含む)の計75名と昨年度より10名増となりました。参加教員は、山田歯学部長、宮崎医歯学総合病院副院長、富沢口腔生命福祉学科長をはじめ、学務・教務委員会関連の教員5名、学生支援委員会関連の教員5名の13名で、運営に当たっては事務方2名、学生アシスタントとして歯学科2年生4名、口腔生命福祉学科2年生2名にもお手伝いいただきました。

初日、朝9:00に歯学部大会議室に集合し研修がスタートしました。昨年度よりも新入生が10名増えたことで大会議室は立錐の余地もない状態でしたが、親近感を高めるにはかえって好都合だった?かもしれません。また、例年は合宿研修が入学式直後の週末開催であったため参加者の緊張感

はかなり強かったように思いますが、今年は開催が一週間遅くなり、新入生諸君はすでに自発的に親睦を図っていたことから比較的和やかな雰囲気での始まりでした。

まず、学部長、副院長から、勉学に励むことはもちろん是非クラブ活動やサークル活動に参加して充実した学生生活を送ってほしいとのご挨拶があった後、全体ガイダンスとして歯学部のカリキュラム、全国共用試験、院内感染対策など、学部生活を送っていく上での主要な事柄について各担当教員より説明がありました。

次に、8つのグループに分かれ、アイスブレイキングを兼ねた簡単なゲームを行った後、自己研鑽セミナーⅠとして「砂漠で遭難したときにどうするか」というシナリオをもとにしたコンセンサスゲームへと進みました。コンセンサスゲームでは、砂漠で遭難した時生きるために所持品をどう優先付けするかについてグループ討議を行いました。このグループ討議の実践では、好ましい討論のあり方についての基本事項、すなわち、より好ましいグループ意思決定には感情的ではない論理的な意見の主張が大切で、同時に他者の意見にも



耳を傾けることが必要なことを知ってもらえたらと考えています。

昼食終了後バスで新潟市赤塚にあるウェルサンピア新潟に移動し、場所を移して午後の研修を開始しました。午後は、午前中と同様グループに分かれ、自己研鑽セミナーⅡとして【面接試験に物申す「異論／反論オブジェクション」―面接試験での問題点と対策を検討する―】と題したテーマをもとに、問題発見・解決法として簡便かつ有効であるとされるK-J法と二次元展開法について実践してもらいました。

午後の研鑽セミナーでは、グループ内で司会進行、発表、報告係などの役割を決め、自分たちが実際に体験した面接試験について様々な観点から良い点や問題点を発見し、また、問題点の解決策を考えるにあたっては、重要度、緊急度に配慮しながら議論してもらいました。これらの作業では、グループ討議の有効性や問題解決の方法論の一部について理解してもらうことを期待しています。そしてセミナーの最後では、グループごとに議論の経過や議論により得られた結論を参加者の前で発表してもらいました。

面接試験に関して各グループから得られた結論（プロダクト）は、毎年1年次前期の「歯学スタンディーズスキルズ」でパワーポイントなどを使って学生自身が整理し、その結果は、歯学部入試実施委員会を通して教授会あるいは面接委員に周知され、今後の面接試験がより効果的なものになるよう役立てられています。すなわち、新入生諸君は、間接的ではありますが、面接試験の改善に一役買っていることとなります。

研鑽セミナー終了後は懇親会を兼ねた夕食会へ

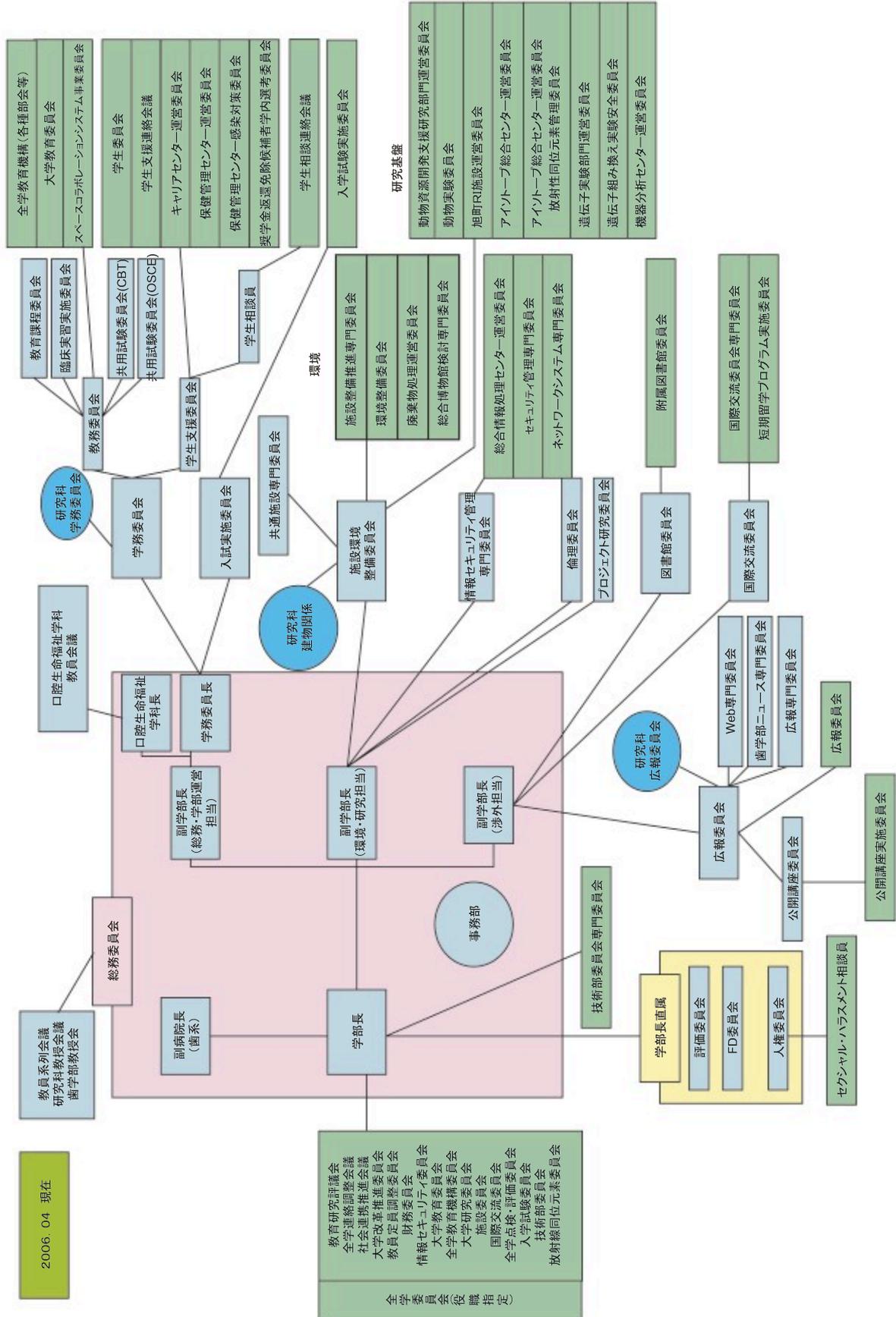
と移行し、歯学部先輩たちによる趣向を凝らしたクラブ紹介も行われました。翌日は朝から学生ガイダンスⅡとして履修相談があり、続いてグループ対抗バレーボール大会を開催しさらに交流を深めてもらいました。

新入生合宿研修は、平成12年よりワークショップ形式となり、参加者自らが問題を発見、議論、解決策を検討し、発表するという形で行われてきました。私はここ数年参加してみて、多くの新入生が人前で臆することなく意見を堂々と発表できることに驚いています。特に、今年の新入生の多くは、いわゆる「ゆとり教育第一世代」と言われ、新学習指導要領の下で学んできています。ゆとり教育には賛否両論ありますが、賛の部分としては、総合学習を取り入れることで、問題発見解決能力の育成と人前で自分の考えをプレゼンテーションする能力の養成を重要視している点が挙げられます。歯学科では2年前より、また、口腔生命福祉学科では開設当初より、問題基盤型学習（PBL）を取り入れていることから、すでに初等中等教育においてPBLの基本を体験してきたものが多いということはPBLの学習効果がより高まることが期待されます。

歯学部では、人間性豊かで自ら問題を解決できる能力を有する人材の育成を目指しています。スタートラインに立った新入生の皆さんが、新入生合宿研修で体験、習得した、コミュニケーションのあり方の基本、問題発見と解決技法ならびに人と議論することの重要性について理解し、これからの学生生活をより充実した、有意義なものとしてくれることを願っています。



歯学部各種委員会



学部内委員会

平成18年 9月 1日現在

委員会名	氏名	職名	対応する全学委員会	備考
総務委員会	山田好秋	歯学部長		総括
	宮崎秀夫	副病院長		病院（歯系）
	前田健康	副学部長・学務委員会委員長		学部運営
	織田公光	副学部長		環境・研究担当
	吉江弘正	副学部長		渉外
	富沢美恵子	口腔生命福祉学科学科長		口腔生命福祉学科
学務委員会	前田健康	学務委員会委員長	全学教育委員会	総括
	林孝文	教務委員長		教務
	富沢美恵子	入試実施委員会委員長	入試委・入試実施委	入試
	小野和宏	学生支援委員会委員長		学生支援
	魚島勝美	臨床実習実施委員会委員		臨床実習
	(富沢美恵子)	口腔生命福祉学科学科長		口腔生命福祉学科
教務委員会	林孝文	教務委員会委員長		総括
	高木律男			教育課程（臨床系）
	小野和宏			教育課程(口腔生命福祉学科系)
	大内章嗣			教育課程(口腔生命福祉学科系)
	齋藤功			◎共用試験（CBT）
	魚島勝美			◎共用試験（OSCE）
	前田健康	オブザーバー		教科課程(基礎系)・共用試験
教育課程委員会	高木律男			
	小野和宏			
	大内章嗣			
臨床実習実施委員会	魚島勝美	委員長		
	葭原明弘	第37期ヘッドインストラクター		
	安島久雄	顎顔面外科診療室		
	泉直也	口腔再建外科診療室		
	平周三	画像診断・診療室		
	白倉正基	義歯(冠・ブリッジ)診療室		
	庭野和明	歯の診療室		
	多部田康一	歯周病診療室		
	金田恒	義歯（入れ歯）診療室		
	中島貴子	総合診療部		
	豊里晃	歯科麻酔科診療室		
	廣富敏伸	予防歯科診療室		
	井上誠	摂食・嚥下機能回復部		
	渡邊淳一	小児歯科診療室		
	八巻正樹	矯正歯科診療室		
	(山田秀子)	総合診療室看護師		
	興地隆史	オブザーバー：前委員長		
共用試験委員会(CBT)	齋藤功			必要な都度委員を指名
共用試験委員会(OSCE)	魚島勝美			必要な都度委員を指名
学生支援委員会	小野和宏	学生支援委員会委員長	学生相談連絡会議	総括・学生相談員
	野田忠			歯学科
	齋藤功			歯学科
	大島邦子			歯学科・学生相談員
	隅田好美			口腔生命福祉学科
	程 珺		学生相談連絡会議	研究科
学生相談員	小野和宏			全学の学生相談連絡会議は小野教授、程助教授
	大島邦子			
入試実施委員会	富沢美恵子	入試実施委員会委員長	入試委・入試実施委	総括・口腔生命福祉学科
	興地隆史	前入試実施委員会委員長		補佐
	齋藤功			
	野村修一		(オブザーバー)	
研究科学務委員会	前田健康			総括
	林孝文			教務
	小野和宏			学生支援

委員会名	氏名	職名	対応する全学委員会	備考
施設環境整備委員会	織田公光	副学部長		総括
	大島勇人		施設整備専門委・環境整備委	◎
	野村修一		総合博物館検討専門委	
	瀬尾憲司		動物実験委	
	川島博行		遺伝子組み換え実験安全委	
共通施設専門委員会	織田公光	副学部長		
情報セキュリティ管理専門委員会	林孝文		総合情報処理センター運営委	総括
	小林博		総合情報処理センター運営委	IT 一般
	鈴木一郎			
	西山秀昌		総合情報ネットワーク委	
図書館委員会	吉江弘正	副学部長・図書館副館長		
	江尻貞一		附属図書館委員会	
	井上佳世子		附属図書館委員会	
国際交流委員会	吉江弘正	副学部長		
	魚島勝美		国際交流委員会専門委	
	星野悦郎		国際交流委員会専門委・短期留学プログラム実施委	
広報委員会	吉江弘正	副学部長		総括
	大島勇人			◎
	鈴木一郎			◎
	川瀬知之		広報委員会（学部）	◎
	林孝文		広報委員会（研究科）	◎
	ステガコ・ロクサーナ			
	野村修一		公開講座実施委員会	◎
研究科広報委員会 （Web 担当）	大島勇人			◎
	鈴木一郎			
歯学部広報委員会 Web 専門委員会	大島勇人			◎
	鈴木一郎			
	黒川孝一			
歯学部ニュース専門委員会	大島勇人			他の委員は助講層、助手層からローテーションで選出
広報専門委員会	川瀬知之		学部	
	林孝文		研究科	
歯学部公開講座委員会	野村修一		公開講座実施委員会	
プロジェクト研究委員会	織田公光	副学部長		
	山崎和久			
	川島博行			
	網塚憲生			
倫理委員会	星野悦郎	委員長		
	山田好秋	学部長		
	宮崎秀夫	副病院長		
	織田公光			任期 18.4.1~20.3.31
	吉江弘正			任期 18.4.1~20.3.31
	高木律男			任期 18.4.1~20.3.31
	駒宮史博	学識経験者 法学部		任期 18.4.1~20.3.31

臨床実習実施委員会以外で任期の記載のない委員会委員の任期は、平成17年4月1日から平成19年3月31日まで
◎は下部組織を立ち上げる必要のある委員

教 職 員 異 動

学 部

【教員等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
転出	18. 4. 1	田 村 貴 彦	厚生労働省	う触学・助手
採用	18. 4. 1	黒 川 孝 一	口腔生命福祉学科・助教授	
昇任	18. 4. 1	井 上 佳世子	口腔解剖学・助教授	口腔解剖学・助手
担当替え	18. 4. 1	五十嵐 敦 子	歯学部口腔生命福祉学科担当	大学院医歯学総合研究科摂食嚥病歯学講座担当
担当替え	18. 4. 1	八 木 稔	歯学部口腔生命福祉学科担当	大学院医歯学総合研究科口腔健康科学講座担当
担当替え	18. 4. 1	ステガロク・ロクサーナ	歯学部口腔生命福祉学科担当	大学院医歯学総合研究科口腔健康科学講座担当
昇任	18. 6. 1	鈴 木 昭	口腔生命福祉学科・教授	口腔生命福祉学科・助教授
昇任	18. 6. 1	山 村 健 介	口腔生理学・助教授	口腔生理学・助手
昇任	18. 7. 1	飯 田 明 彦	顎顔面口腔外科学・助教授	医歯学総合病院講師
採用	18. 8. 1	濃 野 要	予防歯科学・助手	医歯学総合病院医員

【事務部】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
昇任	18. 4. 1	中 野 周 二	技術専門員	技術専門職員
昇任	18. 4. 1	監 物 新 一	技術専門職員	
配置換	18. 4. 1	塚 田 均	総務部総務課長	医歯学系歯学課長
配置換	18. 4. 1	伊 藤 時 夫	医歯学総合病院医事課副課長	医歯学系歯学課課長補佐
配置換	18. 4. 1	吉 田 一 昭	医歯学総合病院医事課公費医療係長	医歯学系歯学課会計係長
配置換	18. 4. 1	景 山 綾 子	自然科学系学務課主任	医歯学系歯学課学務係主任
配置換	18. 4. 1	土 田 啓 子	医歯学系学務課主任	医歯学系歯学課庶務係主任
配置換	18. 4. 1	伊 藤 廣 和	医歯学系学務課総務第三係長	医歯学系歯学課庶務係長
配置換	18. 4. 1	堀 川 猛	医歯学系学務課学務第三係長	医歯学系歯学課学務係長
配置換	18. 4. 1	野 口 政由喜	医歯学系学務課主任	医歯学系歯学課会計係主任
配置換	18. 4. 1	太 田 耕 治	医歯学系学務課主任	医歯学系歯学課会計係主任
配置換	18. 4. 1	丸 山 隆 行	医歯学系学務課主任	医歯学系歯学課庶務係主任
配置換	18. 4. 1	小 池 裕 磨	医歯学系学務課	医歯学系歯学課会計係
配置換	18. 4. 1	渡 辺 美智子	医歯学系学務課	医歯学系歯学課学務係
配置換	18. 4. 1	内 山 良 明	医歯学系学務課副課長	学務部就職課課長補佐
採用	18. 4. 1	酒 井 健 一	医歯学系学務課	
採用	18. 4. 1	工 藤 京 子	口腔生化学・産学官連携技術者	
採用	18. 6. 1	坪 田 涼 子	摂食・嚥下障害学分野・パート職員	
配置換	18. 8. 1	伊 藤 廣 和	学務部入試課入学試験第二係長	医歯学系学務課総務第三係長
配置換	18. 8. 1	石 田 修	医歯学系学務課総務第三係長	自然科学系学務課学務第四係長

病 院

【教員等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
異動	18. 4. 1	竹 石 英 之	歯の診療科助手	口腔保健科助手
異動	18. 4. 1	廣 富 敏 伸	地域保健医療推進部助手	口腔保健科助手
異動	18. 4. 1	大 瀧 祥 子	摂食・嚥下機能回復部講師	口腔保健科助手
異動	18. 4. 1	星 名 秀 行	インプラント治療部講師	歯の診療科講師
異動	18. 4. 1	伊 藤 加代子	口腔保健科助手	歯の診療科助手
異動	18. 4. 1	井 上 誠	摂食・嚥下機能回復部講師	歯科総合診療部講師
異動	18. 4. 1	寺 田 員 人	顎関節治療部助教授	特殊歯科総合治療部助教授
異動	18. 4. 1	大 島 邦 子	歯の診療科講師	特殊歯科総合治療部講師
異動	18. 4. 1	荒 井 良 明	顎関節治療部講師	特殊歯科総合治療部講師
採用	18. 4. 1	山 本 幸 司	噛み合わせ診療科助手	噛み合わせ診療科医員
採用	18. 4. 1	両 角 俊 哉	噛み合わせ診療科助手	ニューヨーク州立大学
採用	18. 4. 1	五 島 秀 樹	口腔外科医員	新規
採用	18. 4. 1	中 舘 正 芳	歯の診療科医員	新規
採用	18. 4. 1	川 岸 恵理子	歯の診療科医員	新規
採用	18. 4. 1	子 田 浩	噛み合わせ診療科医員	新規
採用	18. 4. 1	山 田 裕 士	口腔外科医員	継続
採用	18. 4. 1	池 田 順 行	口腔外科医員	継続
採用	18. 4. 1	嵐 山 貴 徳	口腔外科医員	継続
採用	18. 4. 1	新 國 農	口腔外科医員(研修医)	継続
採用	18. 4. 1	中 里 隆 之	口腔外科医員	継続
採用	18. 4. 1	五 島 秀 樹	口腔外科医員	新規
採用	18. 4. 1	加 藤 健 介	口腔外科医員	継続
採用	18. 4. 1	石 井 多恵子	口腔外科医員	継続
採用	18. 4. 1	前 川 孝 治	口腔外科医員	継続
採用	18. 4. 1	齋 藤 正 直	口腔外科医員	継続
採用	18. 4. 1	船 山 さおり	口腔保健科医員	継続
採用	18. 4. 1	濃 野 要	口腔保健科医員	継続
採用	18. 4. 1	田 巻 元 子	口腔保健科医員	継続
採用	18. 4. 1	高 野 尚 子	口腔保健科医員	継続
採用	18. 4. 1	中 舘 正 芳	歯の診療科医員	新規
採用	18. 4. 1	川 岸 恵理子	歯の診療科医員	新規
採用	18. 4. 1	河 野 承 子	歯の診療科医員	継続
採用	18. 4. 1	飯 澤 二葉子	歯の診療科医員	継続
採用	18. 4. 1	土 田 しのぶ	歯の診療科医員(研修医)	継続
採用	18. 4. 1	齋 藤 健	歯の診療科医員(研修医)	継続
採用	18. 4. 1	若 松 里 佳	歯の診療科医員(研修医)	継続
採用	18. 4. 1	仲 川 隆 之	歯の診療科医員(研修医)	継続

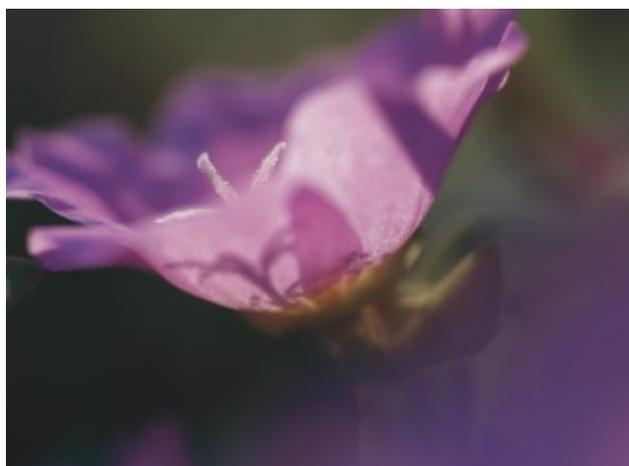
異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	18. 4. 1	松 井 香 苗	歯の診療科医員(研修医)	継続
採用	18. 4. 1	福 田 敬	歯の診療科医員	継続
採用	18. 4. 1	重 谷 佳 見	歯の診療科医員	継続
採用	18. 4. 1	下 条 智 子	歯の診療科医員(研修医)	継続
採用	18. 4. 1	小 林 篤 人	噛み合わせ診療科医員(研修医)	継続
採用	18. 4. 1	佐々木 美 紀	噛み合わせ診療科医員(研修医)	継続
採用	18. 4. 1	新 保 さやか	噛み合わせ診療科医員(研修医)	継続
採用	18. 4. 1	斎 藤 和 幸	噛み合わせ診療科医員(研修医)	継続
採用	18. 4. 1	千 葉 奈保子	噛み合わせ診療科医員(研修医)	継続
採用	18. 4. 1	野 澤 麻紀子	噛み合わせ診療科医員(研修医)	継続
採用	18. 4. 1	安 中 真 美	噛み合わせ診療科医員(研修医)	継続
採用	18. 4. 1	山 下 絵 美	噛み合わせ診療科医員(研修医)	継続
採用	18. 4. 1	山 田 一 穂	噛み合わせ診療科医員	継続
採用	18. 4. 1	澤 田 美 穂	噛み合わせ診療科医員	継続
採用	18. 4. 1	越 知 佳奈子	噛み合わせ診療科医員	継続
採用	18. 4. 1	花 岡 潤一郎	噛み合わせ診療科医員(研修医)	継続
採用	18. 4. 1	伊 藤 晴 江	噛み合わせ診療科医員	継続
採用	18. 4. 1	島 田 靖 子	噛み合わせ診療科医員	継続
採用	18. 4. 1	金 子 明	歯科総合診療部医員(研修医)	継続
採用	18. 4. 1	郷 梨江香	歯科総合診療部医員(研修医)	継続
採用	18. 4. 1	武 田 なぎさ	歯科総合診療部医員(研修医)	継続
採用	18. 4. 1	長 澤 麻沙子	歯科総合診療部医員(研修医)	継続
採用	18. 4. 1	平 山 実 里	歯科総合診療部医員(研修医)	継続
採用	18. 4. 1	小 嶋 にしき	歯科総合診療部医員	継続
採用	18. 4. 1	宮 堀 友理子	歯科総合診療部医員	継続
採用	18. 4. 1	山 下 庸	摂食・嚥下機能回復部医員	継続
採用	18. 4. 1	岡 田 淳	顎関節治療部医員	継続
採用	18. 4. 1	田 口 裕 哉	インプラント治療部医員	継続
退職	18. 4. 30	星 隆 夫	開業	噛み合わせ診療科助手
退職	18. 4. 30	仲 川 隆 之	日吉歯科診療所	歯の診療科医員
昇任	18. 7. 1	飯 田 明 彦	口腔健康科学講座助教授	口腔外科講師
採用	18. 8. 1	濃 野 要	摂食環境学講座助手	口腔保健科医員
採用	18. 8. 1	池 田 順 行	口腔外科助手	口腔外科医員
採用	18. 8. 1	小 山 貴 寛	口腔外科医員	新規
採用	18. 8. 1	小 松 康 高	噛み合わせ診療科医員	新規
退職	18. 8. 31	重 谷 佳 見	海外留学	歯の診療科医員
採用	18. 9. 1	尾 添 裕美子	歯の診療科医員	新規

【看護・診療支援部】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	18. 4. 1	阿 部 由起子	看護部東3階病棟	新規
異動	18. 4. 1	石 井 結 里	看護部東6階病棟	看護部歯科外来
異動	18. 4. 1	丸 谷 恭 子	看護部東3階病棟	看護部歯科外来
異動	18. 4. 1	田 村 真由美	看護部放射線部	看護部歯科外来
採用	18. 4. 1	長谷川 亜 矢	技術補佐員(診療支援部歯科衛生部門歯科衛生士)	新規
採用	18. 4. 1	高 橋 深 雪	技術補佐員(診療支援部歯科衛生部門歯科衛生士)	新規
採用	18. 4. 1	小 島 千奈美	技術補佐員(診療支援部歯科衛生部門歯科衛生士)	新規
採用	18. 4. 1	渡 邊 美 幸	技術補佐員(診療支援部歯科衛生部門歯科衛生士)	新規

【事務部】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
異動	18. 4. 1	久 住 和 夫	医事課収入第二係長	教育人間科学部養護学校係長
異動	18. 4. 1	吉 田 芳 衛	自然科学系学務課フィールド科学教育研究センター係長	医事課収入第二係長
異動	18. 4. 1	池 田 明 男	医事課専門職員(歯科)	医事課公費医療係長
異動	18. 4. 1	菊 池 義 明	医歯学系総務課学系研究支援係長	医事課専門職員(歯科)



編集後記

今までは読んで、見て楽しむ側だった歯学部ニュースの編集を担当し、各部署の方にご協力いただき何とか発行にこぎつけました。多大なアドバイス、お力添えをいただいた広報委員会 大島勇人教授に感謝いたします。

日頃、研修医の指導に取り組んでいると近視眼的になりがちですが、今回の編集を通して新潟大学歯学部には多様な考えの人たちが集まっていることを再度認識しました。

本号の2つの特集は非常に充実した記事になりました。それに加えて、個人的には学会レポートの部分が気に入っています。学部生、大学院生、教員の研究活動の一端が伝わればいいなと思います。
(中島)

今回、初めて歯学部ニュースの編集員となりました。他大学出身の私にとって、歯学部ニュースは、大切な情報源でいつも楽しみにしておりました。そんな私が今度は編集の立場となり、改めて編集委員の皆様の大変さを知りました。お忙しい中、原稿を執筆くださった先生方には心からお礼申し上げます。また、大島先生や中島先生にまかせっきりで、本当に申し訳なく思っております。次号から、きっと歯学部ニュースを読む眼が変わってくるのではないかと考えている次第です。
(伊藤)

今回初めて歯学部ニュースの編集委員を担当しました。原稿執筆依頼をお引き受け下さった先生方は大変だったのですが、何のトラブルもなく、無事に役目を果たすことができ、快くお引き受け頂いた先生方にこの場を借りてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。(小山)

はじめて編集を担当させて頂きました。この度、原稿をお願いした先生方にはお忙しい中、原稿依頼を快くお引き受け頂き、大変感謝しております。ありがとうございました。

また右も左も分からない状態でしたので、大島勇人教授をはじめ、中島貴子先生、他多くの編集員の方々にご迷惑をお掛け致しました。この場をお借りしてお詫び申し上げます。

今回を機に編集員の仕事が非常に大切であることを実感致しました。貴重な経験をさせて頂き、ご協力くださった方々に感謝致します。ありがとうございました。
(安島)



歯学部ニュース

平成18年度第1号（通算109号）

発行者 新潟大学歯学部広報委員会
編集責任者 中島貴子
編集委員 鈴木誠、伊藤加代子、小山純市、安島久雄
印刷所 ㈱プライムステーション

表紙・裏表紙の写真の説明

表紙タイトル：ツユクサ

撮影データ：オリンパス E-500/ズイコーデジタル ED 50mm F2.0マクロ/絞り優先オート/記録画素数 3264×2448/ISO200/ホワイトバランス：太陽光

撮 影 地：新潟市

裏表紙タイトル：西方浄土

撮影データ：オリンパス E-300/ズイコーデジタル14-54mm F2.8-3.5/絞り優先オート/記録画素数 3264×2448/ISO200/ホワイトバランス：太陽光

撮 影 地：新潟市

コ メ ント：散歩の途中で目にした植物と佐渡の夕景を、表紙と裏表紙の写真にしてみました。毎日のように見慣れている風景ですが、光の当たり具合によって著しくその表情が変わることに驚かされます。光の使い方次第で、ごくありふれたものが急にこの世のものとは思えないほど、激しく美しく見える瞬間がある。これを画像データとして保存する、これこそが画像を愉しむ極意ではないかと感じています。もしかしたら、医療で用いている画像診断もこれと似たようなものかも知れないと勝手に考えています。光や音といった物理現象も、使い方次第。

本誌中の写真の使用機材

ボ デ ィ：オリンパス E-500, E-300, μ 710

レ ン ズ：ズイコーデジタル ED 50mm F2.0マクロ、ズイコーデジタル11-22mm F2.8-3.5、ズイコーデジタル14-54mm F2.8-3.5、オリンパスレンズ6.5-19.5mm F3.4-5.7

撮 影 者：林 孝文

